

日本質的心理学会 第22回大会

架橋する



日時：2025 年 10 月 18 日（土） 19 日（日）

会場：広島大学 東広島キャンパス 教育学部

準備・実行委員長：中坪史典（広島大学）

開催のご挨拶

日本質的心理学会第22回大会は、2025年10月18～19日の両日、広島大学教育学部（東広島キャンパス）で開催します。広島大会は、2011年11月、安田女子大学で開催された第8回大会以来、14年ぶりとなります。特に、昭和100年、戦後80年という節目の年に広島の地で再び大会を開催できますこと、感慨深く思います。

ご承知の通り、日本質的心理学会は、心理学分野に限らず、教育学、保育学、看護学、社会学など、多様な領域の研究者が集うのが特長です。この点を踏まえて、第22回大会のテーマを「架橋する」としました。字義的に言えば「橋をかけること」。私たちはこの言葉に、質的研究を介して、理論と実践、研究と実践、研究者と実践者、調査者と研究協力者、異分野の研究者の間に「橋をかけたい」・・・そんな願いを込めています。

これまで、理論と実践、研究と実践、研究者と実践者は、ともすると相容れないものとして捉えられることがありました。例えば、「確実性や法則性を求める理論 vs. 不確実性や文脈依存性を伴う実践」「データと向き合う研究 vs. 現実の課題と向き合う実践」「疑うことを常とする研究者 vs. 自らを信じて実践を営む実践者」などです。質的研究は、こうした両者の間を「架橋する」ことで、対話や協働を促す可能性を有しているのではないのでしょうか。質的研究を通して、これら二つの世界を往還することの意味を今一度考えたい・・・そんな思いで私たちは、広島大会を開催します。

学会の発展において年次大会の充実は、不可欠な要素です。言うまでもなく年次大会は、様々な専門性を有する研究者、実践者が同じ場所に集い、自身の研究を発信し、相互に対話する貴重な機会に他なりません。それぞれの専門は違っていても、質的研究方法論を基軸にして参加者同士が議論するような年次大会は、数ある学会の中でも特徴的なのではないのでしょうか。みなさんにとっても、この大会でしか顔を合わせることのない研究者、実践者との対話は、他学会の大会とは異なる有意義な時間となるはずです。

第22回大会は、主に5つの魅力的な要素で構成されます。(1) 質的データ分析手法 SCAT (Steps for Cording and Theorization) の開発者として名高い大谷尚先生（名古屋経済大学）をお迎えして招待講演を開催します。(2) 複数の大会準備・実行委員会企画シンポジウムを開催します。開催地の広島や大会テーマの「架橋する」を意識した内容で構成します。(3) 学会委員会企画シンポジウムや常任理事会主催シンポジウムを開催します。(4) 一般セッションと優秀賞選考セッションによるポスター発表を開催します。現在、会員のみなさんが取り組んでいる質的研究の成果をどうぞご発表ください。(5) 会員企画シンポジウムを開催します。会員のみなさまに自主的にテーマを設定して頂き、シンポジウムを運営して頂きます。

広島大学教育学部（東広島キャンパス）がある東広島市は、広島県中央部に位置する学園都市です。中心市街地の西条は、銘醸地として知られる日本有数の日本酒の産地です。JR 西条駅周辺に酒蔵が連なる「西条酒蔵通り」は、明治・大正から昭和初期の建物など独特の景観を楽しむことができます。微力ではありますが、実り多き大会となるよう、大会実行委員一同、協力して準備を進めてまいります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本質的心理学会 第22回大会準備・実行委員会委員長
中坪史典（広島大学）

目次

1. 大会参加者へのご案内.....	1
2. アクセス.....	4
3. 会場案内.....	5
4. スケジュール.....	9
5. 大会企画概要.....	11
6. 大会プログラム	12
招待講演.....	12
シンポジウム（委員会等企画・会員企画）	12
一般研究発表（ポスター）	20
7. 抄録.....	42
招待講演.....	42
シンポジウム（委員会等企画・会員企画）	44
一般研究発表（ポスター）	102
一般発表セッション.....	102
優秀賞選考セッション	132
大会参加者索引	
出版社広告	
大会準備・実行委員会等一覧	

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

大会テーマ 「架橋する」

会期： 2025 年 10 月 18 日（土）～19 日（日）

場所： 広島大学 東広島キャンパス 教育学部

<第 22 回大会ホームページ>



<大会 SNS>

X

アカウント：@jaqpconference



Facebook

<https://www.facebook.com/profile.php?id=61576767002669>



*大会初日の開始時間前後は、受付が混雑することが予想されます。時間にはゆとりをもってお越しくださいますようお願い致します。

*大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示板及び大会 SNS にてご案内します。

*期間中、日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種お問い合わせは、こちらにお願いします。

<重要事項>

大会の発表・参加においてトラブル等が生じた場合には、日本質的心理学会および大会準備・実行委員会はその責任を負いません。特に、プレゼンテーションにおける著作権、肖像権、個人情報の取り扱いについては十分にご注意ください。大会当日の写真撮影等については、大会スタッフの指示に従ってください。

2) 大会参加について

受付場所： 教育学部 L 棟 1 階ロビー

受付時間： 両日ともに 8:30～

(1) 事前申し込みの方

事前申し込みにて入金済みの方には、すでに大会抄録集、参加証と領収書が発行されています。ご自身で印刷した参加証を名札フォルダーにてご提示の上、各会場へお越してください。(今大会では、参加証の郵送及び名札フォルダーの配布は行っておりません。)

(2) 当日参加申し込みの方

当日参加の方は、**HP** より参加費等の支払い手続きを行ってください。参加証は受付にてご記入いただくようになります。名札フォルダーはご自身でお持ちください。(今大会では、名札フォルダーの配布は行っておりません。)

当日の大会参加費は下記の通りです。

		一般	大学院生	学部生	税区分
大会参加費	会員	10,000 円	6,000 円	2,000 円	不課税
	非会員	12,000 円	8,000 円	2,000 円	不課税

3) クロークについて

大会期間中、教育学部 L 棟 1 階 108 講義室にクロークを設け、みなさまのお荷物をお預かりします。ご利用の際には、必ず、係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品については、お預かりできませんので、個人で管理していただきますよう、お願い致します。

受付時間 10/18 (土) 8:30 ～ 18:00

10/19 (日) 8:30 ～ 18:00

4) 学内 Wifi の利用について

会場内では、eduroam を利用することが可能です。eduroam への接続方法については、eduroam JP の「利用の手引き」をご覧ください。https://www.eduroam.jp/for_users

5) 懇親会について

大会 1 日目 10/18 (土) 18:00 から、学士会館 1 階ラ・ボエームにて懇親会を開催します。参加は事前予約制となっており、定員に達したため、申し込みはすでに締め切らせていただいております。

懇親会参加費は、当日の受付または懇親会会場にて現金でお支払いください (ご予約済の方のみ)。お支払いいただいた方には参加証に印をつけますので、忘れずにお立ち寄りください。

<懇親会参加費> 学生以外:5,000 円(税込) / 学生(非会員問わず):4000 円(税込)

6) 昼食について

大会会場周辺には昼食をとれる場所が限られているため、事前のご準備をおすすめします。大会 1 日目 (10/18・土) は、広島大学内の「北 1 食堂」と「北 1 コープショップ」が営業しています (営業時間:11:00～14:00)。「北 1 コープショップ」ではお弁当やパン、飲み物などを販売しています。両施設は教育学部キャンパスから徒歩約 10 分の場所にあります。また、近隣のスーパーやコンビニエンスストアは、教育学部から徒歩約 15 分の距離にあります。

ます。また、大会 2 日目 10/19（日）に開催される総会においては、お弁当を準備いたします。

7) 飲食・禁煙について

お食事をとられる場合は、L 棟 2 階 L202 講義室（休憩室）をご利用ください。なお、ゴミについては、なるべくお持ち帰りくださいますよう、お願いします。飲み物の自動販売機は、「3. 会場案内」の教育学部キャンパスマップをご参照ください。

また、広島大学では 2020 年 1 月から全面禁煙となっておりますので、ご協力のほど、よろしくお願いします。

8) 会員控室について

L 棟 2 階 L202 講義室を休憩室としておりますので、ご自由にご利用ください。

9) 書籍の展示・販売、企業展示について

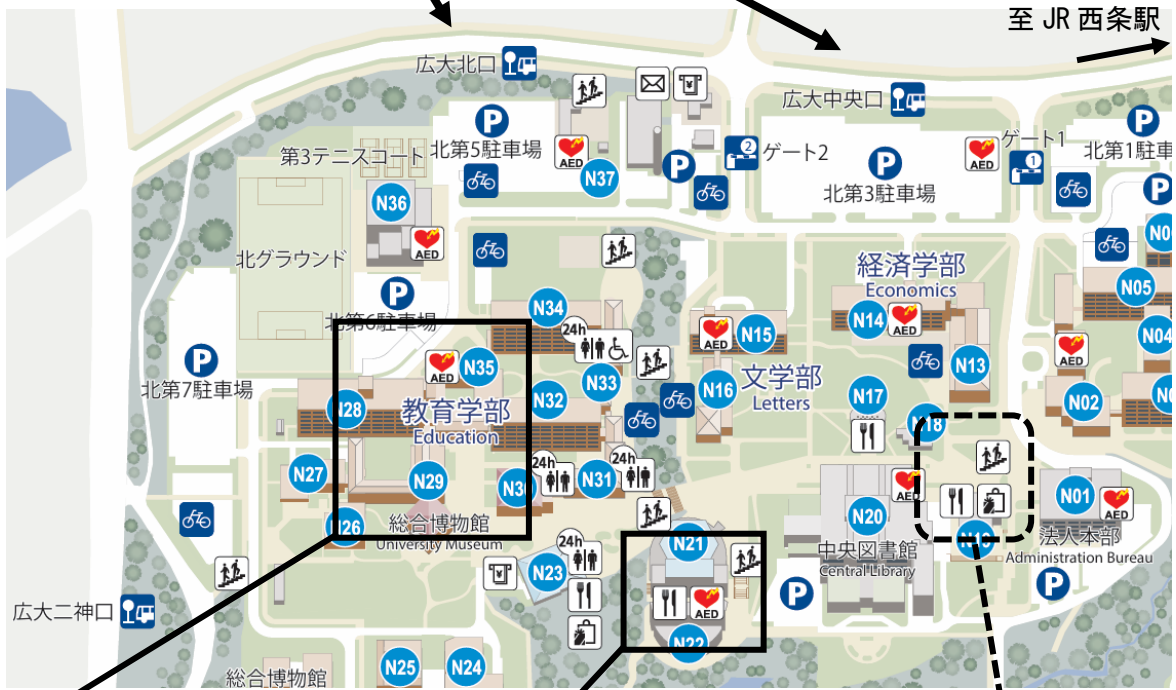
10/18（土）、19（日）に、教育学部 L 棟 2 階ロビーにおいて出版社の書籍の展示・販売、L 棟 202 講義室において企業の商品展示があります。ぜひご利用ください。

2. アクセス

1) 所在地

〒739-8524 広島県東広島市鏡山1丁目1-1 広島大学 教育学部（東広島キャンパス）

教育学部の最寄りバス停は「広大北口」か「広大中央口」です。



【教育学部管理棟／L棟】
 受付、クローク、書籍等販売
 招待講演
 委員会企画シンポジウム
 会員企画シンポジウム
 ポスター発表（一般・優秀）
 総会

【学生会館1階】
 ラ・ボエーム
 懇親会

昼食 北1食堂
売店 北1コープショップ
（18日のみ）

2) 交通

JR 西条駅からバスで約15分で「広大中央口」 JR 八本松駅からバスは土日運休

[路線のご案内 | 芸陽バス株式会社](#) * 西条営業所・豊栄営業所管内>時刻表>西条管内 No.3>おもて PDF

※2024年3月31日をもって高速バス「グリーンフェニックス」（広島大学行）は廃止されました。

東広島キャンパス



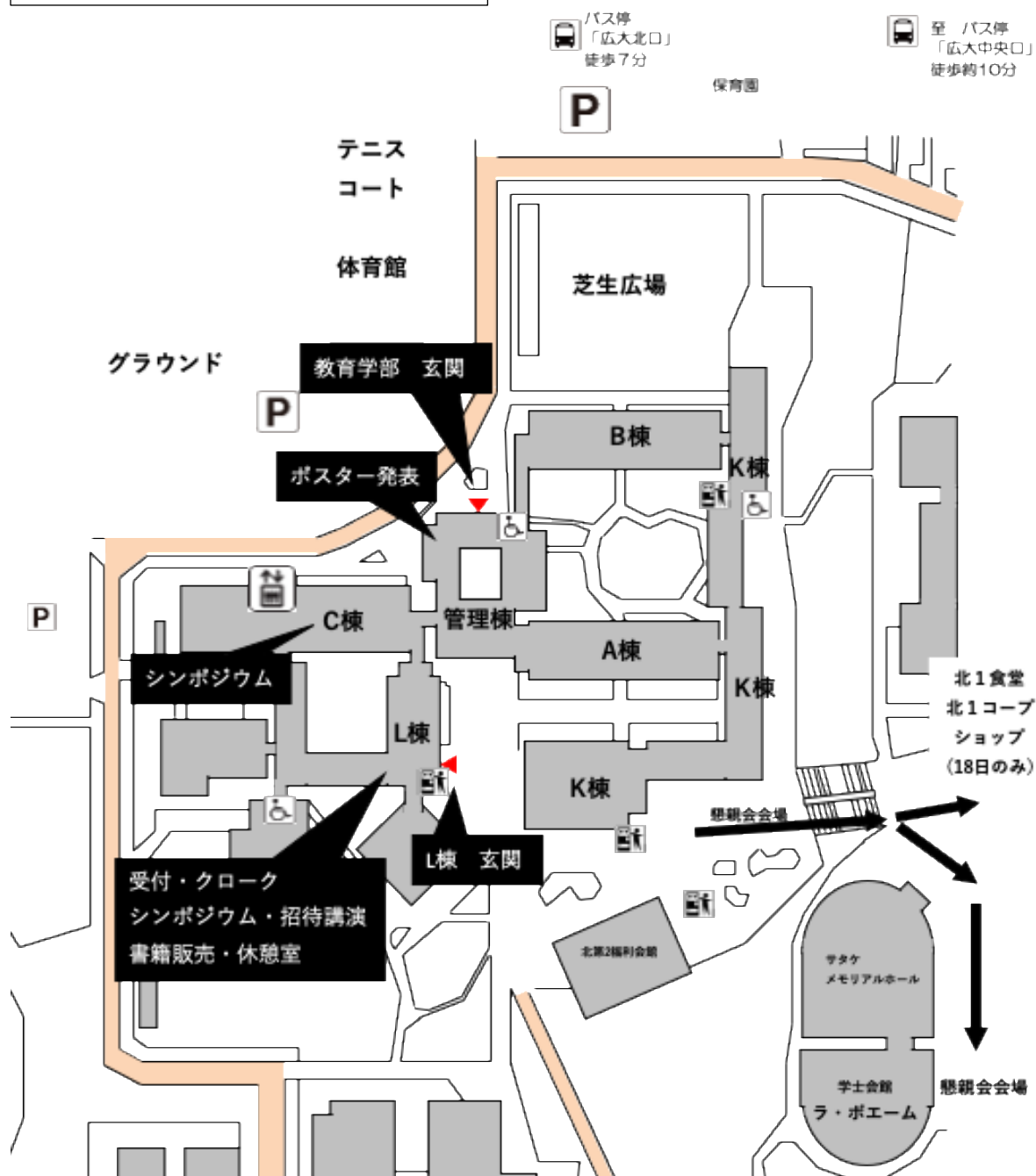
3. 会場案内

会場：教育学部・学生会館（懇親会）

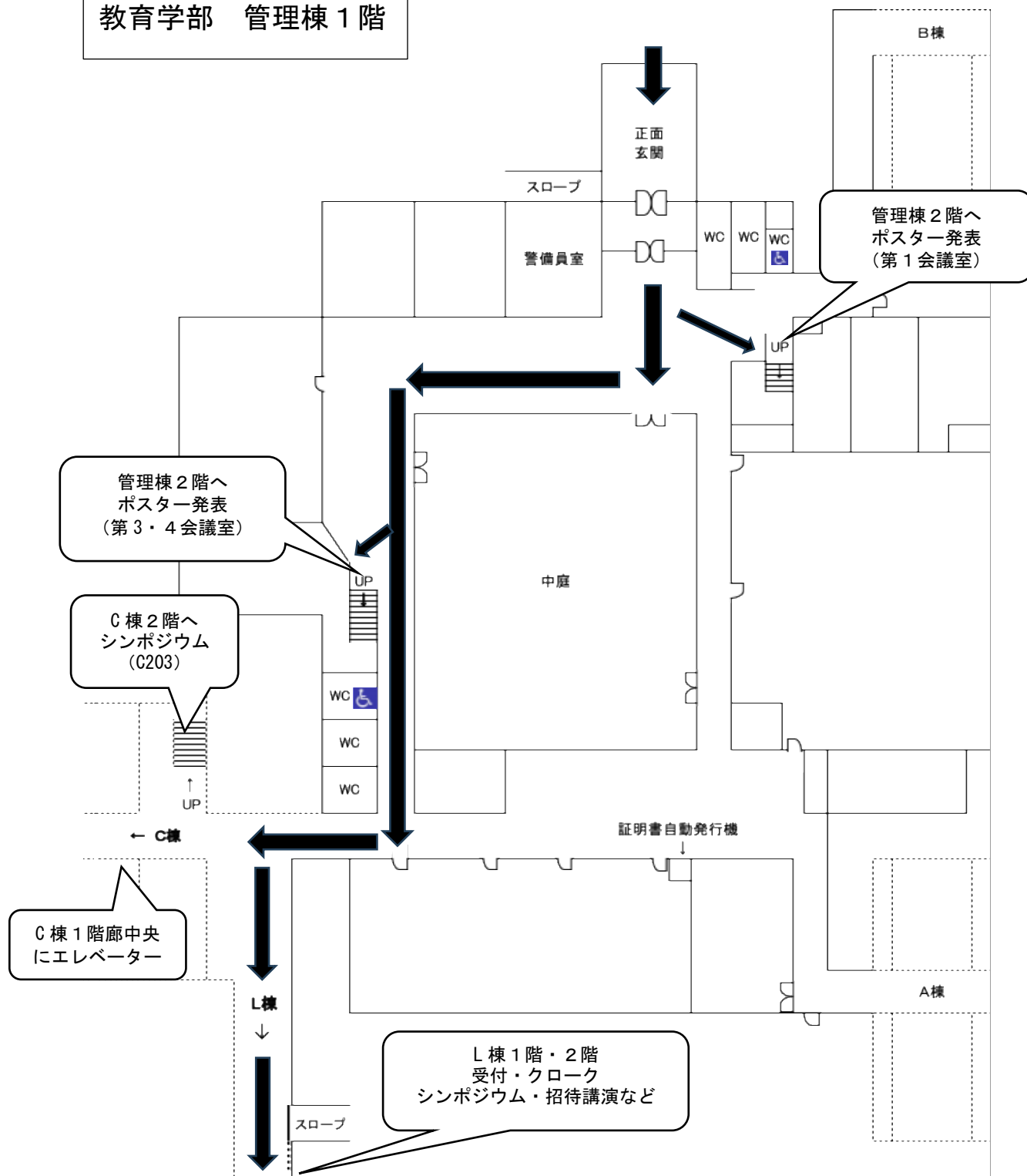
受付：L 棟 1 階ロビー（L 棟玄関入ってすぐ）

※教育学部玄関から入場できます

教育学部 キャンパスマップ

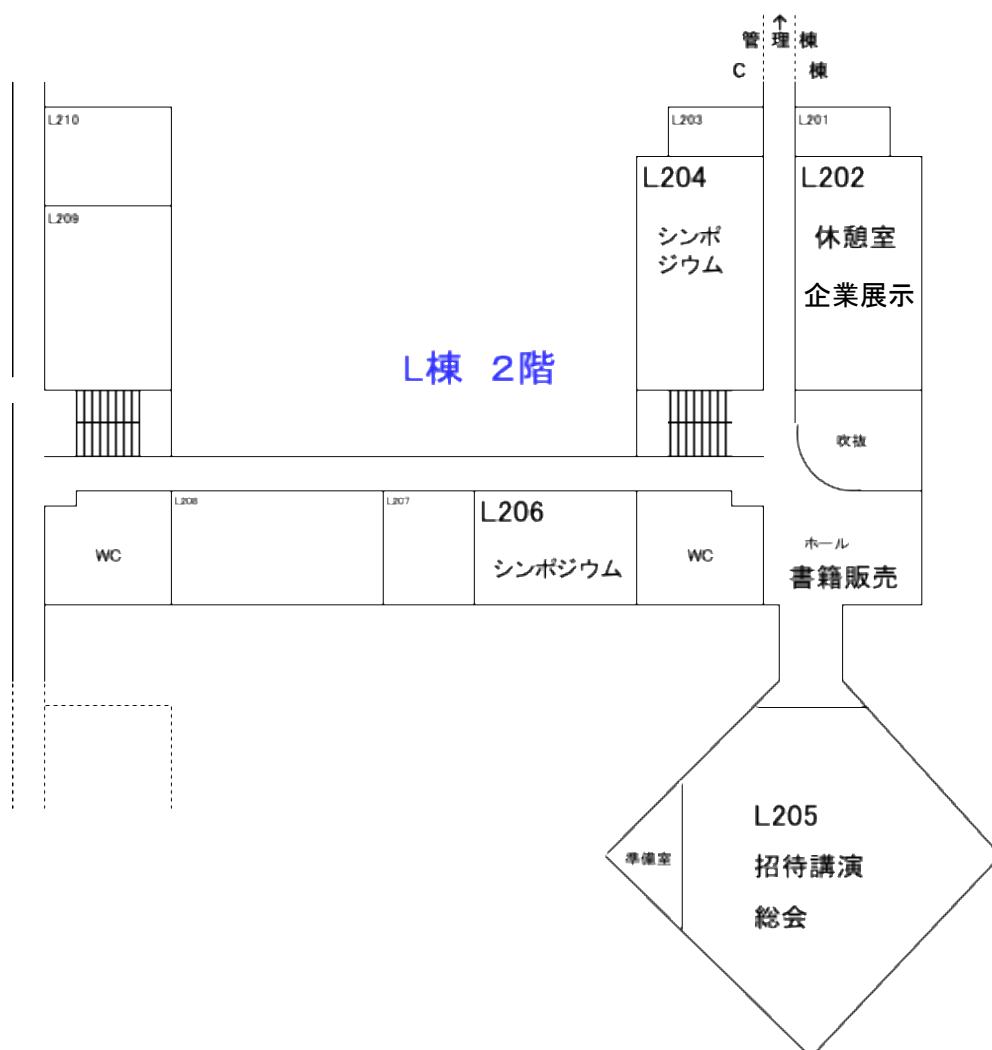
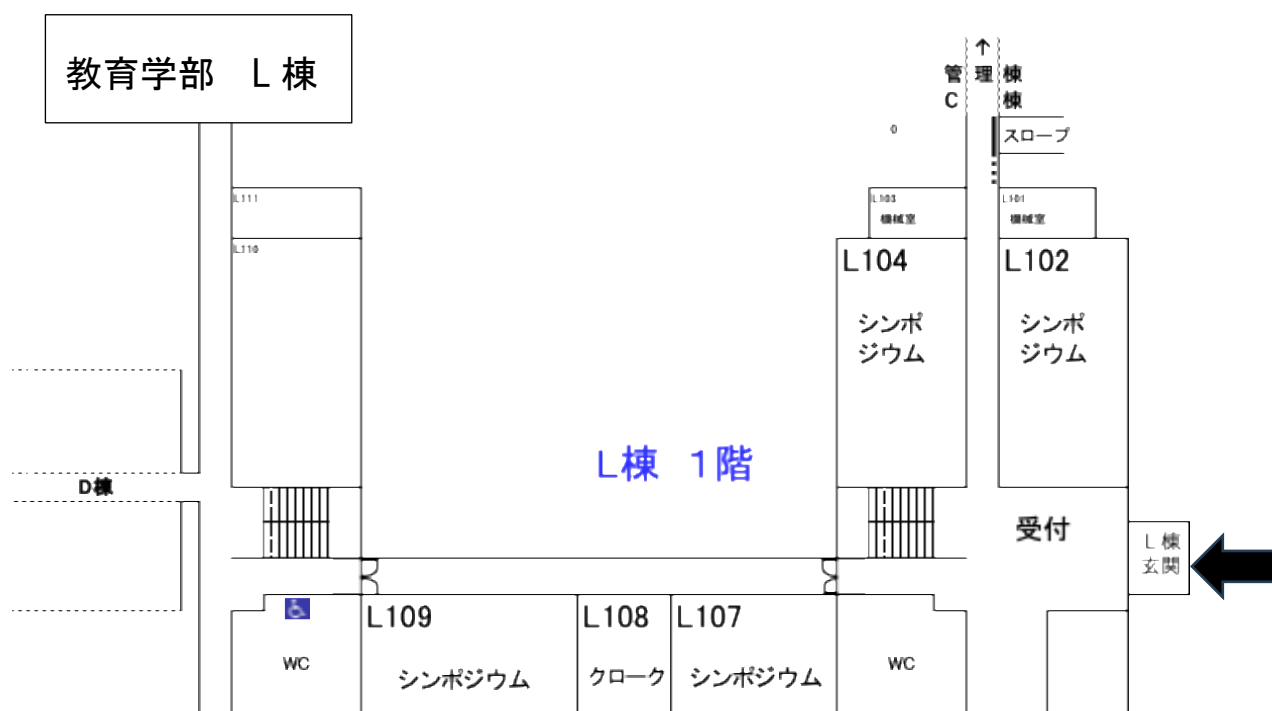


教育学部 管理棟 1 階



教育学部 管理棟・C棟 2階





4. スケジュール

1日目 10月18日（土）

	招待講演・総会 L棟205	シンポジウム L棟204	シンポジウム L棟206	シンポジウム L棟102	シンポジウム L棟104	シンポジウム L棟107	シンポジウム L棟109	ポスター管理棟2階 第一会議室	ポスター管理棟2階 第三・四会議室
8:30	受付開始								
9:00									
9:30									
10:00									
10:30									
11:00									
11:30									
12:00									
12:30									
13:00	招待講演								
13:30	質的研究 —経験から経験へと 架橋する物語りの科学—								
14:00									
14:30	講演者：大谷 尚								
15:00									
15:30									
16:00									
16:30									
17:00									
17:30									
18:00	* 1								

質的心理学研究編集
委員会企画シンポジウム

「アート」に基づいた
質的研究
—研究と実践・芸術と社
会の混交へのまなざし—
企画：鮫島輝美
山口祥典

会員企画
シンポジウム 1

ビジュアル・ナラティヴ
とは？
—質的研究の新天地—
企画：横山草介
やまだようこ

会員企画
シンポジウム 2

データセッション
への招待
—東京ディスコース
研究会の実践から—
企画：綾城初穂
大橋靖史
能智正博

会員企画
シンポジウム 3

AIが質的研究を
どう変えていくか
—その③—
企画：薛 海升

ポスター
(一般発表セッション)
P18A-1 ~ P18A-29

(優秀賞選考セッション)
P18B-1 ~ P18B-10

ポスター
(優秀賞選考セッション)
P18B-11 ~ P18B-47

準備・実行委員会
企画シンポジウム

職業的アイデンティティ
を架橋する
—人材育成の研究と実践
を通して—

質的心理学フォーラム編集
委員会企画シンポジウム

「ケア」を考える
—社会学・心理学・
看護学の視点から—
企画：加戸友佳子
奥田紗史美
玉置佑介
細野知子

会員企画
シンポジウム 4

現象学的研究成果と
実践者との架橋
—実践可能性と困難さ—
企画：棚川綾子
坂井志織
小林道太郎

会員企画
シンポジウム 5

ABRで「土地の力」を
描き出す
—映像とその制作
プロセスの探求—
企画：村本邦子

会員企画
シンポジウム 6

技術と人間が織りなす
「学び」を質的に
探究する
—生成AI、ロボット、ス
マートフォンを例に—
企画：水上拓哉

会員企画
シンポジウム 7

慧眼か凡眼か、
見識か不見識か、
その狭間を
葛藤とともに歩む
企画：本山方子
横山草介

* 1 懇親会：時間は18:00～ 会場は「学士会館 1 階ラ・ボエーム」

2日目 10月19日（日）

	招待講演・総会 L棟205	シンポジウム L棟204	シンポジウム L棟206	シンポジウム L棟102	シンポジウム L棟104	シンポジウム L棟107	シンポジウム L棟109	ポスター管理棟2階 第一会議室	ポスター管理棟2階 第三・四会議室						
8:30	受付開始														
9:00															
9:30															
10:00															
10:30															
11:00															
11:30	総会 (11:45-12:45)														
12:00															
12:30															
13:00															
13:30		準備・実行委員会 企画シンポジウム	学会賞選考 委員会企画シンポジウム	会員企画 シンポジウム 1 2	会員企画 シンポジウム 1 3	会員企画 シンポジウム 1 4	会員企画 シンポジウム 1 5	会員企画* 3 シンポジウム 1 6							
14:00		戦争・被爆・災害の記憶 を架橋する ―集合的トラウマに 触れる、多様な実践と まなざし―	質的研究の明日のために ―『質的心理学研究』 第22・23号優秀論文賞 選考のフィードバック― 企画：沖潮満里子 松本光太郎 山田富秋 樫田美雄 勝浦真仁	コミュニティを变える力 ―活動理論における Transformative agency 概念を手がかりに― 企画：保坂裕子 青山征彦	自然物を用いて複線径路 を描くhana+TEMの 発展可能性 ―保育・看護・教育領域 での応用を考える― 企画：中本明世	複線径路等至性 アブローチ（TEA）と Triple Gegenstand理論 の新たな接合可能性を 探る 企画：田中千尋	「居場所」の意義と 多様性 ―多文化社会における 架橋として― 企画：鈴木一代 有川友子	参与構造を軸にしたメディア の相互行為分析 企画：高梨克也							
14:30															
15:00															
15:30		常任理事会主催* 2 国際シンポジウム	会員企画 シンポジウム 1 7	会員企画 シンポジウム 1 8	会員企画 シンポジウム 1 9	会員企画 シンポジウム 2 0	会員企画 シンポジウム 2 1	会員企画* 3 シンポジウム 2 2							
16:00		「円卓シネマ」から20年 私たちは 何をなした、これから 何をしていくのか 企画：伊藤哲司 山本登志哉 中坪史典	伝統的日本文化の啓発と 創発に向けて ―継承と生成の分岐点― 企画：木戸彰恵	パフォーマンスが／で ひらくアートベース・ リサーチの可能性 ―意味の生成と多義性を めぐって― 企画：青山征彦	文化の中で揺れる〈私〉 ―ヤーン・ヴァルシナー の文化心理学に基づく 「矛盾」の質的探究― 企画：番田清美	質的研究法としての パターン・ランゲージ ―よい実践の本質／ 経験則を言語化し 共有する方法― 企画：井庭 崇	歴史を見据える フィールドワーク ―農と食と心理学7― 企画：石井宏典	アートを介して「知る」とは ―音楽療法士による アートベースト「リサーチ」 体験型シンポジウム― 企画：生野里花							
16:30															
17:00															
17:30															

* 2 大会に参加しない学会員も、事前登録によってオンラインでの参加が可能です(参加費は不要です)。参加登録の方法は、質心メールマガジン(2025年9月号)をご覧ください。

* 3 13時からの会員企画シンポジウム16、15時半からの会員企画シンポジウム22の会場は、「C棟203」です。

会員企画シンポジウム16、22に参加予定の方は、会場の場所をご確認の上、お間違いないようにご移動をお願いします。

5. 大会企画概要

本大会では、招待講演、シンポジウム、一般研究発表（ポスター）を下記の通り、企画しています。

招待講演

大会 1 日目 10 月 18 日（土）に大谷尚氏（名古屋経済大学）をお招きして、「質的研究—経験から経験へと架橋する物語りの科学—」というテーマにてご講演をいただきます。時間は 13:00 から、会場は L棟205 になります。

シンポジウム

本大会では、準備・実行委員会企画シンポジウム 2 件、常任理事会・委員会企画シンポジウム 5 件、会員企画シンポジウム 22 件を開催します。詳細は、大会スケジュール及びシンポジウムの抄録をご参照ください。

「4. スケジュール（2日目）」にある注2の通り、「常任理事会主催国際シンポジウム」は、大会に参加しない学会員も、事前登録によってオンラインでの参加が可能です（参加費は不要です）。参加登録の方法は、質心メールマガジン（2025年9月号）をご覧ください。

一般研究発表（ポスター）

ポスター発表は、10 月 18 日（土）午前、19 日（日）午前に開催します。「優秀賞選考セッション」は管理棟2階第一会議室（両日1番から10番まで）と第三・四会議室（両日11番以降）、「一般発表セッション」は管理棟 2 階第一会議室が会場となります。発表者は、各自の番号を確認し、該当する会場にて準備・対応をお願いします。

8 : 30～	ポスター貼付
9 : 30～11:30	ポスター発表（責任発表時間）
15 : 30 までに	ポスター撤去・回収（ポスターは各自持ち帰り下さい）

ポスター発表会場には、専用のボード（縦 210cm、横 90cm）が設定されています。ボードのサイズにおさまるポスターの準備をお願いします。

ポスターの貼付にあたっては、会場内に画びょうを準備していますので、ご利用ください。

～大会優秀賞について～

今年度のポスター発表では、発表申込時の抄録と自身の研究の卓越性についてのアピールをもとに、大会当日「優秀賞選考セッション」を設定し、研究発表について審査を行って優秀賞を選出します。対象はこれまでの大会で受賞経験のない方です。自薦制になっております。

6. 大会プログラム

【招待講演】

10 月 18日（土） 13:00-15:00	L棟205
-------------------------	-------

質的研究

—経験から経験へと架橋する物語りの科学—

講演者： 大谷 尚（名古屋経済大学）

【準備・実行委員会企画シンポジウム】

1日目

10 月 18 日（土） 15:30-17:30	L棟204
--------------------------	-------

職業的アイデンティティを架橋する

—人材育成の研究と実践を通して—

2日目

10 月 19 日（日） 13:00-15:00	L棟204
--------------------------	-------

戦争・被爆・災害の記憶を架橋する

—集合的トラウマに触れる、多様な実践とまなざし—

【常任理事会主催国際シンポジウム】

10 月 19 日（日） 15:30-17:30 L棟204

「円卓シネマ」から20年、私たちは何をなしえ、これから何をしていくのか

企 画： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
山本登志哉（発達支援研究所）
中坪史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム】

10 月 18 日（土） 9:30-11:30 L棟206

「アート」に基づいた質的研究
—研究と実践・芸術と社会の混交へのまなざし—

企 画： 鮫島輝美（関西医科大学看護学部）
山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）

【質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム】

10 月 18 日（土） 15:30-17:30 L棟206

「ケア」を考える
—社会学・心理学・看護学の視点から—

企 画： 加戸友佳子（摂南大学現代社会学部）
奥田紗史美（大阪教育大学健康安全教育系）
玉置佑介（明星大学教育学部）
細野知子（日本赤十字看護大学看護学部）

【研究交流委員会企画シンポジウム】

10 月 18日（土） 13:00-15:00	L棟102
-------------------------	-------

ビジュアル ⇄ ナラティブ ⇄ フィールドの往還と地域づくり

企 画： 杉浦彰子（J A共済総合研究所）
杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）
香曾我部 琢（宮城教育大学教職大学院）
高森順子（情報科学芸術大学院大学産業文化研究センター）
李 勇昕（立正大学人文科学研究所）
河原智江（共立女子大学看護学部）

【学会賞選考委員会企画シンポジウム】

10 月 19日（日） 13:00-15:00	L棟206
-------------------------	-------

質的研究の明日のために

— 『質的心理学研究』第22・23号優秀論文賞選考のフィードバック—

企 画： 沖潮満里子（青山学院大学教育人間科学部）
松本光太郎（茨城大学人文社会科学部）
山田富秋（NPO社会理論・動態研究所）
檜田美雄（摂南大学現代社会学部）
勝浦眞仁（同志社女子大学現代社会学部）

【会員企画シンポジウム】

会員企画シンポジウム 1	10 月 18 日 (土)	9:30-11:30	L棟102
--------------	---------------	------------	-------

ビジュアル・ナラティヴとは？
—質的研究の新地平—

企 画： 横山草介（東京都市大学人間科学部）
やまだようこ（立命館大学OIC総合研究機構）

会員企画シンポジウム 2	10 月 18 日 (土)	9:30-11:30	L棟104
--------------	---------------	------------	-------

データセッションへの招待
—東京ディスコース研究会の実践から—

企 画： 綾城初穂（駒沢女子大学共創文化学部）
大橋靖史（淑徳大学総合福祉学部）
能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

会員企画シンポジウム 3	10 月 18 日 (土)	9:30-11:30	L棟107
--------------	---------------	------------	-------

AIが質的研究をどう変えていくか
—その③—

企 画： 薛 海升（東京大学大学院教育学研究科）

会員企画シンポジウム 4	10 月 18 日 (土)	15:30-17:30	L棟102
--------------	---------------	-------------	-------

現象学的研究成果と実践者との架橋
—実践可能性と困難さ—

企 画： 栩川綾子（日本赤十字豊田看護大学看護学部）
坂井志織（東京都立大学健康福祉学部）
小林道太郎（大阪医科薬科大学看護学部）

会員企画シンポジウム5 10月18日(土) 15:30-17:30 L棟104

ABRで「土地の力」を描き出す
—映像とその制作プロセスの探求—

企画： 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

会員企画シンポジウム6 10月18日(土) 15:30-17:30 L棟107

技術と人間が織りなす「学び」を質的に探究する
—生成AI、ロボット、スマートフォンを例に—

企画： 水上拓哉（新潟大学）

会員企画シンポジウム7 10月18日(土) 15:30-17:30 L棟109

慧眼か凡眼か、見識か不見識か、その狭間を葛藤とともに歩む

企画： 本山方子（白梅学園大学子ども学部）
横山草介（東京都市大学人間科学部）

会員企画シンポジウム8 10月19日(日) 9:30-11:30 L棟102

多元的な〈現実〉と質的研究をつなぐ
—ろう者・手話・コード・聾学校・聴覚障害の領域の研究から考える—

企画： 中津真美（東京大学多様性包摂共創センター）
中井好男（大阪大学大学院人間科学研究科）
西垣正展（立命館大学大学院人間科学研究科）
広津侑実子（東京都公立学校スクールカウンセラー）

会員企画シンポジウム 9 10 月 19 日（日） 9:30-11:30 L棟104

現象学的・エスノメソドロジー的研究方法と
アクターネットワークセオリー・状況的学習論的なものの見方

企 画： 海老田大五朗（新潟青陵大学福祉心理子ども学部）

会員企画シンポジウム 10 10 月 19 日（日） 9:30-11:30 L棟107

一つの経験を複数の方法で分析することの意義
—記号力学的文化心理学の方法論から方法へ—

企 画： 廣瀬太介（立命館大学人間科学研究科）

会員企画シンポジウム 11 10 月 19 日（日） 9:30-11:30 L棟109

TEMにおける時期区分の真正性向上
—個体化理論に基づくクロスチェック表の実践的活用—

企 画： 福山未智（立命館大学人間科学研究科）
サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

会員企画シンポジウム 12 10 月 19 日（日） 13:00-15:00 L棟102

コミュニティを変える力
—活動理論におけるTransformative agency概念を手がかりに—

企 画： 保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）
青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

会員企画シンポジウム 13 10 月 19 日（日） 13:00-15:00 L棟104

自然物を用いて複線径路を描く hana-TEM の発展可能性
— 保育・看護・教育領域での応用を考える —

企 画： 中本明世（甲南女子大学看護リハビリテーション学部）

会員企画シンポジウム 14 10 月 19 日（日） 13:00-15:00 L棟107

複線径路等至性アプローチ（TEA）と
Triple Gegenstand 理論の新たな接合可能性を探る

企 画： 田中千尋（帝京大学福岡医療技術学部）

会員企画シンポジウム 15 10 月 19 日（日） 13:00-15:00 L棟109

「居場所」の意義と多様性
— 多文化社会における架橋として —

企 画： 鈴木一代（埼玉純真短期大学）
有川友子（大阪大学国際機構）

会員企画シンポジウム 16 10 月 19 日（日） 13:00-15:00 C棟203

* 会場案内図をご覧ください

参与構造を軸にしたメディアの相互行為分析

企 画： 高梨克也（滋賀県立大学人間文化学部）

会員企画シンポジウム 17 10 月 19 日（日） 15:30-17:30 L棟206

伝統的日本文化の啓発と創発に向けて
— 継承と生成の分岐点 —

企 画： 木戸彩恵（関西大学文学部）

会員企画シンポジウム18 10月19日(日) 15:30-17:30 L棟102

パフォーマンスが／でひらくアートベース・リサーチの可能性
—意味の生成と多義性をめぐって—

企画： 青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

会員企画シンポジウム19 10月19日(日) 15:30-17:30 L棟104

文化の中で揺れる〈私〉
—ヤーン・ヴァルシナーの文化心理学に基づく「矛盾」の質的探究—

企画： 番田清美（人間環境大学総合心理学部）

会員企画シンポジウム20 10月19日(日) 15:30-17:30 L棟107

質的研究法としてのパターン・ランゲージ
—よい実践の本質／経験則を言語化し共有する方法—

企画： 井庭 崇（慶應義塾大学総合政策学部）

会員企画シンポジウム21 10月19日(日) 15:30-17:30 L棟109

歴史を見据えるフィールドワーク
—農と食と心理学7—

企画： 石井宏典（茨城大学人文社会科学部）

会員企画シンポジウム22 10月19日(日) 15:30-17:30 C棟203

* 会場案内図をご覧ください

アートを介して「知る」とは
—音楽療法士によるアートベースト“リサーチ”体験型シンポジウム—

企画： 生野里花（お茶の水女子大学基幹研究院）

【一般研究発表（ポスター）】

10 月 18 日（土）	一般発表セッション	管理棟2階第一会議室
--------------	-----------	------------

P18A-1 「防災意識を高める」とはどういうことか？—テキストマイニングによる調査をもとに

宮前良平（福山市立大学都市経営学部）

P18A-2 聴覚障害のある人の心理的支援における専門性

広津侑実子（東京都公立学校）

P18A-3 訪問介護における注意共有の達成過程—インターフェースとしての冷蔵庫—

細馬宏通（早稲田大学文学学術院）

八木裕子（東洋大学福祉社会デザイン学部）

P18A-4 糖尿病診療場面におけるモニタリングを介したコミュニケーション—1型糖尿病患者—医療者間でのデータ活用方法の相違

細野知子（日本赤十字看護大学看護学部）

海老田大五朗（新潟青陵大学福祉心理子ども学部）

P18A-5 発達障害傾向のある5歳児に対する保育士のかかわり

角南なおみ（帝京大学文学部）

前垣義弘（鳥取大学医学部）

P18A-6 予言される災害と〈信じる／信じない〉の間—日本と台湾における語りの比較

李 勇昕（立正大学人文科学研究所）

P18A-7 ことばの教育が「共に生きる」に貢献するには—日本語教育従事者による協働オートエスノグラフィーをもとに—

中井好男（大阪大学人間科学研究科）

中山亜紀子（広島大学人間社会科学研究科）

高 智子（日本国際協力センター）

P18A-8 住民主体の防災活動に関する質的分析と予測モデルの接続

杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

棚橋莉沙子（九州大学統合新領域学府）

P18A-9 幼稚園5歳児における生活準拠型の生活発表会の形成プロセスと意味—発表会「わくわくだんのロボットランド」の事例的検討—

松原未季（大阪信愛学院大学教育学部）

P18A-10 対話型鑑賞が年長児に与える教育的効果—質的データから見る成長の瞬間

猿渡敬志（花王株式会社研究戦略・企画）

山口紀子（花王株式会社研究戦略・企画）

P18A-11 商店街における多文化コミュニティ形成の現状と課題—東京都台東区上野アメ横における経営者の語りに着目して—

張 富麟（茨城大学人文社会科学研究科）

P18A-12

（発表取り下げ）

P18A-13 ホログラフィートークで起こること—セラピストへのインタビューを通して—

加藤嘉明（青山学院大学教育人間科学研究科）

沖潮満里子（青山学院大学教育人間科学部）

P18A-14 ビジュアルナラティブにおける創造性と正統性—制作物における語りと騙り

竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

P18A-15 成人形成期(emerging adulthood) きょうだい児の心理的現象

ヤン ダンビ（立命館大学総合心理学部）

P18A-16 血液透析患者の穿刺時の痛みに着目した学生の学び

石井俊行（兵庫大学看護学部）

P18A-17 特別支援学級で学校支援ボランティアを行う大学院生の内的変容過程—Auto-TEMを用いた質的分析—

境 悠太朗（広島大学大学院人間社会科学研究科）

朝岡寛史（広島大学大学院人間社会科学研究科）

P18A-18 解釈的現象学的分析拡充版（Interpretative Phenomenological Analysis-improved）の開発に関する研究—生き直しを語る女性と研究者の共同構築の世界を目指して—

吉田弘美（法政大学大学院人間社会研究科）

P18A-19 「若者ケアラー」のキャリア選択—ケア体験の意味づけと人生への統合に着目して—

村上めぐみ（東京都）

P18A-20 入院中の脳卒中者における上肢の物語性—リハビリテーションに取り組む二症例に基づく検討—

三枝信吾（東海大学文明研究所）

P18A-21 教育学部で特別支援教育を専攻する大学生の教職志望度と障害観に関する調査研究

下中村 武（岡山大学学術研究院教育学域）

P18A-22 1事例における青年期のアイデンティティ危機の様相から得られるもの—居場所アイデンティティグラムを用いて—

小沢一仁（東京工芸大学教職課程）

P18A-23 聞こえの多様性の可視化を目指した当事者研究の実践

勝谷紀子（東京大学先端科学技術研究センター／放送大学大学院）

麻野美和（きこいろ片耳難聴のコミュニティ）

江連紀子（特定非営利活動法人愛知県難聴・中途失聴者協会）

佐野智子（国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部）

高宮明子（（株）愛真美）

渡邊欽忠（近畿LiD/APD当事者会）

P18A-24

（発表取り下げ）

P18A-25 自傷行為する子どもの支援のイメージ—教育関係機関で支援した経験のある心理職が用いたレトリックの分析から

新井素子（立教大学文学部）

P18A-26

(発表取り下げ)

P18A-27 授業の合意形成場面における聞き手の意見の多様性—聞き手の理由付けに着目して—

横山 愛 (埼玉大学教育学部)

P18A-28 Bridging the gap between expectations and reality: The use of emotion regulation strategies by university English teachers

菅野雅代 (仙台高等専門学校)

P18A-29 飛行操縦訓練の継続意志に関連する諸要因の探索的研究—ワークモチベーションの観点から—

佐藤暁子 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

10 月 18 日 (土)	優秀賞選考セッション	管理棟2階第一会議室
---------------	------------	------------

P18B-1 「悩めなさ」についての考察—マンガ作品の登場人物に見られる葛藤の抱

えられなさを例にして—

鳥本大貴（愛知学院大学心理臨床センター）

P18B-2 ワークショップ「ナンセンス・エスノグラフィ」の方法と結果

楠見友輔（信州大学教育学部）

P18B-3 刑務所における対話実践の特性—対話実践のやりとりと職員へのインタビュー調査から—

川崎 隆（別府大学）

北村篤司（昭和音楽大学）

齊藤哲也（別府大学）

P18B-4 現代大学生の人生の目的と意味の特徴

櫻井香乃（別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻）

川崎 隆（別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻）

P18B-5 質的研究はどのような経験を扱うのか？—移境態(liminality)における経験—

廣瀬太介（立命館大学人間科学研究科）

P18B-6 ICTの活用はどのように子ども同士の対話を促すのか—複線径路等至性モデリング (TEM) を用いた分析から—

大道香織（広島大学大学院人間社会科学研究科）

石川 徹（広島大学大学院人間社会科学研究科／高崎健康福祉大学）

渡邊真帆（福山市立大学）

李 睿苗（広島大学大学院人間社会科学研究科）

田島美帆（広島大学大学院教育学研究科）

清水憲志（広島大学大学院人間社会科学研究科／中国短期大学）

岸本有紀子（広島大学大学院人間社会科学研究科）

玉城美千子（広島大学大学院人間社会科学研究科／あおぞら幼稚園）

周 偉傑（広島大学大学院人間社会科学研究科）

ニフユス美冬（スマートエデュケーション）

下川功喜（スマートエデュケーション）

宮島衣瑛（広島大学大学院）

中坪史典（広島大学大学院）

P18B-7 森での保育活動は子どもに何を与えるのか

加藤 望（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）

肥田 武（一宮研伸大学看護学部）

内田千春（東洋大学福祉社会デザイン学部）

ポーター倫子（北陸学院大学教育学部）

中坪史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）

P18B-8 「原爆」「被爆者」を体験者はどのように意味づけるのか―「生きる」を支える2つの方法―

松尾純子（千葉県スクールカウンセラー）

P18B-9 日中韓アナウンサーの顔写真にみる共通性と文化的差異

木戸彩恵（関西大学文学部）

李 心庭（関西大学心理学研究科）

高野眞生（関西大学心理学研究科）

P18B-10 創作的実践における参加と正統性の構造に関する一考察

新田一洋（青山学院大学社会情報学研究科）

10 月 18 日（土）	（続き）優秀賞選考セッション	管理棟2階第三・四会議室
--------------	----------------	--------------

P18B-11 幼稚園5歳児の学級談話における発表者への質問の形成―聞き手による

「言い換え」に着目して—

西井宏之（白梅学園大学大学院）

P18B-12 家族関係が悪化する過程と現在の病状に対する意味づけの検討—双極症患者の生活史から

松元 圭（新潟医療福祉大学社会福祉学科）

三品拓人（筑波大学人文社会系）

P18B-13 オーケストラ演奏の現場にみる「意味を創り、共有する」実践—指揮者の身体技法と言語的指示の特徴に着目した事例研究—

丸山 慎（駒沢女子大学共創文化学部）

P18B-14 人の育ちにおける「目に見えないもの」の意義を探る（第二報）—サンタクロースの「贈り物」とは何なのか—

藤井真樹（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）

西村美佳（金城学院大学人間科学部）

勝浦眞仁（同志社女子大学現代社会学部）

P18B-15 降園の時間帯において子どもたちはどのように遊ぶのか—環境の不安定さに着目して—

渡邊真帆（福山市立大学教育学部）

P18B-16 心理専門職における相互的な継承プロセス—語り合いを用いた検討

依田尚也（駒沢女子大学）

P18B-17 パーソナリティを取り戻す—渡邊芳之のパーソナリティ観の批判的継承—

仲嶺 真（荒川出版会／国際経済労働研究所）

P18B-18 親からのガスライティングを経験し立ち直るプロセスへの探求—TEAを用いて—

KONG MINGXI（立命館大学人間科学研究科）

安田裕子（立命館大学総合心理学部・人間科学研究科）

P18B-19 アートベース・リサーチによる“纏う”の探究

古屋千紘（筑波大学情報学群知識情報・図書館学類）

遠藤友咲（筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群情報学学位プログラム）

松原正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

P18B-20 日本国内企業で長期就業するムスリムの葛藤—複線径路等至性アプローチ（TEA）による分析

小山多三代（立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程）

安田裕子（立命館大学総合心理学部）

P18B-21 リーダーシップ発揮に影響を与える自己認識の変化に関する定性的研究

城石ゆかり（ngoro-ngoro）

P18B-22

（発表取り下げ）

P18B-23 不適切な保育が発生する構造—うえの式質的分析法を用いた第三者委員会報告書の分析—

濱名 潔（立花愛の園幼稚園・名古屋市立大学人間文化研究科研究員）

P18B-24 子どもの独立性と協調性について日本の母親が語る「期待」と「しんどさ」のアンビバレンス

吉川康太（広島大学人間社会科学研究科）

梅村比丘（広島大学人間社会科学研究科）

P18B-25 紙芝居上演実践における社会包摂の可能性について

澤屋真樹（広島文化学園大学人間健康学部）

P18B-26 防災教育と社会認識を架橋する—2023年カフラマンマラシュ地震におけるハタイ県の災害経験と知識構築に関するディスコースに着目して—

永田真子（筑波大学大学院人文社会科学研究群）

P18B-27 死別経験者がグリーフに関する教育を行う際の負担感と対処—当事者同士の対話を通じた質的研究—

加藤美千代（中京大学大学院心理学研究科・一般社団法人日本グリーフケアギフト協会）

石森恵美

川島大輔（中京大学心理学部）

P18B-28 学びの姿勢の獲得を目指す支援をととして、レジリエンスを涵養するプロセスについて

濱田 香（株式会社MyStep）

寒川美紀（株式会社MyStep）

野村栄太（豊中市役所こども未来部）

P18B-29 フィールドにおける〈私〉の意味—フィールドとの対話をととして—

武島千明（広島大学人間社会科学研究科）

P18B-30 畏敬の念の意味づけプロセスにおけるAIチャットボットの役割—語りに基づく予備的検討—

栗原慎太郎（情報科学芸術大学院大学）

P18B-31 発達障害をもつ看護師が看護学生時代に体験したこと—今後の看護学生への合理的配慮のために—

徳光 薫（園田学園大学人間看護学部）

蔡 小瑛（園田学園大学人間看護学部）

P18B-32 食料品アクセス困難地域における後期高齢者の食料品調達手段に関する質的検討—TEM図による可視化を通して—

玉木志穂（農林水産省農林水産政策研究所）

丸山優樹（農林水産省農林水産政策研究所）

P18B-33 小児がん、AYA世代がん経験者の就職困難に関する質的調査

奥村哲朗（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

P18B-34 コミュニティとの関わりから再考するニューカマー第二世代のアイデンティティ形成—在日日系ペルー人第二世代を事例に—

貞安 薫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

P18B-35 無認可幼児教育類似施設の存続をめぐる「余地のない選択」—施設長による信念とマネジメントの語りから

西島 功（白梅学園大学大学院子ども学研究科子ども学専攻博士課程）

P18B-36 心理カウンセリングに対する主観的価値の構成—カウンセリング経験者の意味づけ—

加藤碧子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

P18B-37 容姿の悩みが和らいでいく心理的過程の検討—成人期女性との語り合いをもとに—

岸本華穂（奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科）

町田奈緒士（奈良女子大学大学院人文科学系）

P18B-38 TASモデルにおけるサポーターの役割とは—サポーターMのストラテジーと葛藤—

駒 久美子（千葉大学教育学部）

目戸郁衣（帝京大学）

P18B-39 Designing a Qualitative Research Protocol to Examine Associations between Study Abroad Experiences and Mental Health Factors: Adapting Instruments for Collaborative Interview Studies in Japan

カビール ラッセル サーワー（広島大学教育学部）

ハーベル＝ボーマン リンジー（School of Communication Studies, James Madison University）

ベイツ ソフィア（College of Humanities and Social Sciences, George Mason University）

稲谷 颯（広島大学教育学部）

石津 空（広島大学教育学部）

P18B-40 「つくり方」がつくられるとき—TEM／TLMGによる漫画家・荒木飛呂彦氏の「漫画術」形成プロセスの分析—

田中宏明（慶応義塾大学大学院政策メディア研究科）

井庭 崇（慶應義塾大学総合政策学部）

P18B-41 保育者志望者が他職種を経て保育職に「回帰」するプロセス

境 愛一郎（共立女子大学児童学科）

P18B-42 情報認識・取得・活用におけるADHD者の困難に関する研究—ADHD者のための情報保障に向けて—

佐藤 碧（筑波大学情報学学位プログラム）

P18B-43 患者経験のオートエスノグラフィとしての「さかさま事例分析」—精神医療における主客を反転しながら架橋する—

大野美子（大阪大学大学院人間科学研究科）

P18B-44 語られたつもりの行動に耳を澄ます—「共在対話」による発達支援の試み—

大内雅登（Care-Media Labo）

吉村優一（Care-Media Labo）

P18B-45 まちづくりに取り組んでいる人々のライフストーリー—福島県檜葉町に関わる「関係人口」を事例に—

劉 毓禧

P18B-46 認知症共生社会実現を目指した「認知症双六」の効果に関する初期検討

村木志帆（神奈川県立横須賀高等学校）

後藤真衣（神奈川県立横須賀高等学校）

小野明日香（NTT株式会社人間情報研究所）

山中綾華（NTT株式会社人間情報研究所）

笹川真奈（NTT株式会社人間情報研究所）

瀬古俊一（NTT株式会社人間情報研究所）

P18B-47 園舎移転をめぐる行政—園—PTAの組織間調整—問題発覚から移転までのマネジメントの交差—

平原 藍（白梅学園大学大学院）

10 月 19 日（日）	一般発表セッション	管理棟2階第一会議室
--------------	-----------	------------

P19A-1 イメージ画にみる父子関係

久保田 楓（帝京平成大学大学院臨床心理学研究科専門職学位課程）

莊島幸子（帝京平成大学健康メディカル学部心理学科）

P19A-2 「川の記憶」とまちづくりのナラティブ（２）—地域実践をとおして育んだ質的研究手法の可能性—

杉浦彰子（JA共済総合研究所）

奥村かえで（茨城大学人文社会科学部）

李 勇昕（立正大学人文科学研究所）

安斎聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学部）

小木 貢（東京大学産学協創部）

伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

P19A-3 がん患者支援におけるオンラインヨガの可能性

菅森朝子（立教大学社会学部）

P19A-4 保育者と子どもの共主体 (Co-Agency) を可視化する試み

上村 晶（桜花学園大学教育保育学部）

P19A-5

（発表取り下げ）

P19A-6 女子大学生における美容医療選択の心理的プロセス—TEMを用いた質的分析—

高野眞生（関西大学大学院心理学研究科）

P19A-7 ベルクソンの時間論とTEA—分岐点に焦点をあてた理論的展開

宮下太陽（立命館大学、株式会社日本総合研究所）

安田裕子（立命館大学）

平井靖史（慶應義塾大学）

P19A-8 在日中国人女子留学生の化粧行動の変容と異文化環境とのせめぎ合い

李 心庭（関西大学心理学部）

P19A-9 It' s Japan not Japanese Students that Discourages Study Abroad Participations

ポーター倫子（北陸学院大学）

ポーター リチャード（北陸学院大学）

P19A-10 「居場所」支援の手前を捉える——〈人と場所をつなぐ〉とは別の回路から

河南真衣（大阪大学大学院人間科学研究科）

P19A-11 名前復唱の失敗が引き出す人の応答行動：対話型ロボットとのやりとりにおける受容度との関連

駒崎俊剛（東京医療保健大学医療保険学部医療情報学科）

P19A-12 働く母親は子の不登校をどう語るのか—不登校初期の「働くこと」の意味づけに着目して—

斉藤明子（東京大学大学院教育学研究科）

P19A-13 外国人ビジネスパーソンにおけるコンフリクトの意味づけの変遷—日系企業の新入社員に対する縦断的なインタビュー調査から—

立川真紀絵（大阪大学日本語日本文化教育センター）

P19A-14 音楽の協働的な創造場面における芸術的目的の再構成—作曲家をめぐるコミュニケーションに着目して—

眞崎光司（明治大学国際日本学部）

P19A-15 障害のある子どもの保育における「わからなさ」の意味—X特別支援学校での自由な「遊び」に着目して—

加藤夢子（東京大学教育学研究科）

P19A-16 原発事故による長期避難の体験—若者の語りから—

佐藤 星（東京大学大学院教育学研究科）

P19A-17 学習支援における大学生支援者のコミットメント—大学生支援者の活動の意味づけに着目して—

三井小波（北海道大学大学院教育学院）

P19A-18 「教師を真に支援する」とは何か—PAC分析が明らかにする若手英語教師の葛藤と成長—

伊藤仁美（環太平洋大学次世代教育学部）

P19A-19 教室における差異を包摂した民主的な秩序形成の過程—多様な子どもたちの参加を準備し協働を創造する教師の実践分析から—

金田裕子（宮城教育大学教職大学院）

P19A-20 「食べること」の意味—拒食や過食経験者の語りから—

小竹 栞（東京大学教育学研究科）

P19A-21 生成AIテキストを用いた図書館レファレンス・サービスの可能性

辻 高明（立命館大学文学部）

P19A-22 高齢期において多様な社会参加活動の中から子育て支援を選択する背景要因の検討

田中元基（淑徳大学人文学部）

徳永聖子（常葉大学保育学部）

P19A-23 沖縄の保育はどのように研究されてきたのか

天願順優（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

P19A-24 日本質的心理学会第21回大会のサインデザインの実践と考察

小池星多（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

露木亜海（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

平井爽乃（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

山口琉生音（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

P19A-25 義手をめぐる身体受容と意識活動

久保田真弓（元関西大学総合情報学部）

P19A-26 小学校における算数の協働的な学習場面の分析—スロー・ルッキングを手がかりに—

司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）

小森国雄（那珂川町立馬頭東小学校）

P19A-27 保育者の対応はどんな文脈に支えられているのか？—3歳未満児クラスの給食場面に着目して—

曾 玉儒（広島大学大学院）

P19A-28 「文化的越境」の再考—重篤な疾病を抱える海外在留邦人を支える家族の
葛藤と経験を事例に—

市川章子（国立国語研究所）

10 月 19 日（日）	優秀賞選考セッション	管理棟2階第一会議室
--------------	------------	------------

P19B-1 メタバースにおける居場所感に関する研究

岡田羽叶（立命館大学総合心理学部）

サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

P19B-2 非致死性のトラウマのオートエスノグラフィー「避けられている」感覚に着目して—

有賀 光（信州大学総合人文社会科学研究科）

楠見友輔（信州大学教育学部）

P19B-3 定年退職とアルコール依存症に関する新聞記事のテキストマイニング—報道の特徴と依存症の背景要因を探る—

五百竹亮丞（広島文化学園大学人間健康学部）

井川純一（東北学院大学人間科学部）

恒松美輪子（広島大学大学院）

P19B-4 絵本環境コーディネーター研修プログラム第1版の開発研究Ⅰ—インタビュー調査から捉える研修前後における参加者の意識および行動の変容—

小屋美香（育英短期大学保育学科）

仲本美央（白梅学園大学子ども学部子ども学科）

P19B-5 スポーツにおける対人暴力の被害経験をめぐる対話的自己エスノグラフィ（1）—「被害者」から「研究者」へ—

豊田 隼（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）

堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）

P19B-6 研究についての対話は何をもたらしたか—デュオエスノグラフィーによる意味の探究—

八木真奈美（東京女子大学現代教養学部）

藤原京佳（大阪大学国際機構）

P19B-7 事件について「語ること」と「語らないこと」—地下鉄サリン事件の被害者とその家族へのインタビュー調査から—

北本遼太（静岡産業大学経営学部）

仲嶺 真（荒川出版会）

藤田浩之（京都大学大学院）

P19B-8 劇場における鑑賞と対話〈シアターダイアログ〉の試み

中山佐代（立命館大学人間科学研究科）

川野健治（立命館大学総合心理学部）

P19B-9 心理面接における同性愛者の自己像とその共同生成過程—スティグマ体験をめぐって—

太齋 慧（東京大学大学院教育学研究科）

P19B-10

（発表取り下げ）

10 月 19 日（日） （続き）優秀賞選考セッション 管理棟2階第三・四会議室
--

P19B-11 コミュニティミュージックの場における多面的な経験とその感じられ方—フォトボイスを通して—

南 摩周（任意団体yoriai.）

角 亮典（任意団体yoriai.／早稲田大学大学院文学研究科）

P19B-12 レビュー論文作成に複線径路等至性モデリング（TEM）を用いることの可能性と課題—保育における子どものICT活用に関する文献レビューから—

田島美帆（広島大学大学院教育学研究科）

大道香織（広島大学大学院人間社会科学研究科）

李 睿苗（広島大学大学院人間社会科学研究科）

渡邊真帆（福山市立大学）

中坪史典（広島大学）

P19B-13 大学内に設置された「居場所」におけるスタッフや利用者の体験—多様性との両立という観点から—

稲田真子（東京大学大学院教育学研究科）

P19B-14 Autoethnography as Epistemic Action: A Free Energy Principle Perspective

金澤 佑（大阪大学）

P19B-15 スタンプから読む「非言語以上、言語未満」の共同性—Discordを利用した会員制オンライン・コミュニティにおける検証

尾石智美（九州大学大学院統合新領域学府）

杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

P19B-16 いじめ傍観者体験に関する質的研究—当事者へのインタビューの分析—

竹原奈成（駒沢女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻）

依田尚也（駒沢女子大学）

P19B-17 スポーツにおける対人暴力の被害経験をめぐる対話的自己エスノグラフィ（2）—「対話者」として聴く—

堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）

豊田 隼（東京大学大学院教育学研究科，日本学術振興会）

P19B-18 障がい者福祉施設への訪問と交流を促進する学習環境デザインの分析

大本 航（九州大学大学院統合新領域学府）

迎 拓真（九州大学大学院統合新領域学府）

杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

**P19B-19 被災地における農業の持続可能性と継続要因：山形県酒田市「へらへらで
ゆーな」の事例から**

鈴木ミチル（九州大学共創学部）

杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

P19B-20 物語の断片を創ることの一人称研究

宮下 怜（筑波大学情報学群知識情報・図書館学類）

松原正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

**P19B-21 医療的ケアが必要な重症心身障碍児の＜主体＞の芽生えとそだち—ある
乳幼児と母親，支援者との関わりのエピソード記述から—**

佐々木由佳（大阪大学大学院人間科学研究科）

**P19B-22 「語り合い」において、語ることを可能にするのはいかなる仕組みか—協
力者ととともに語り合った経験の質感に着目して—**

水野唯衣（大阪大学大学院人間科学研究科）

P19B-23 発達障害の診断を受けることの意味に関する当事者研究

塚本薫平（大阪大学大学院人間科学研究科）

P19B-24 自閉スペクトラム症幼児の家族相互行為参加の変容過程

高橋ゆう子（大妻女子大学家政学部）

**P19B-25 実践知の言語化によるキャリア支援の探究—航空会社客室乗務員を対象
としたアクション・リサーチ—**

田村美香（早稲田大学大学院人間科学研究科）

**P19B-26 周産期喪失を経ての次の妊娠・出産をした母親の経験—TEMを用いた分析
—**

管生聖子（大阪大学大学院人間科学研究科）

**P19B-27 異なる意見の統合にビジュアルが与える影響—グラフィックファシリテ
ーション実践を対象とした相互作用分析—**

仲沢実桜（東京大学大学院教育学研究科）

P19B-28 触覚と詩的言語の往復—ニットジャーナルを用いたオートエスノグラフィ—

荒木奈美（札幌大学地域共創学群）

P19B-29 脳腫瘍患者の語る病いの体験—「わからなさ」に着目して—

梁 瀛迪（東京大学大学院教育学研究科）

P19B-30 翻訳者による翻訳実務と生成AIについての認識の変容

単 凱（東京科学大学環境・社会理工学院）

P19B-31 訪問看護という営みを生きる看護師のライフストーリー研究—心的構えの変容に着目して—

渡邊優那（広島大学大学院人間社会科学研究科）

P19B-32 中小企業オーナー経営者の認知の変容と組織への影響—経営者の自己受容とナラティブアプローチによる組織分析—

鎌苅慧哉（株式会社suiten）

P19B-33 地方自治体の虐待担当として働く行政一般職の心的負担についての検討—保健師職に焦点を当てて—

金 葵（川村学園女子大学大学院人文科学研究科心理学専攻）

P19B-34 「推し」から離れるとき、離れのあと—青年期女性の応援プロセスと意味づけに着目して—

河原聡希（大阪大学人間科学部人間科学研究科）

P19B-35 成人期・中年期のADHD者における自己や環境の個別最適化プロセス

芝崎文子（筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局）

P19B-36 ポピュラー音楽の創作現場におけるミュージシャンの音楽的知識の活用—TEAアプローチによる分析を通して—

木下和彦（宮城教育大学教職大学院）

中村昭彦（国士舘大学文学部）

P19B-37

（発表取り下げ）

P19B-38 あるホスピス住宅におけるスタッフの看取り観—パーソナル・コンストラクト理論を用いた質的研究試論—

火ノ口史野（九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻）

P19B-39 ADHD特性における質的差異

河原希美（京都大学人間・環境学研究科）

P19B-40 コロナ特例貸付アンケート調査の自由記述から見る借受人の感情の様相—年代別の比較

村山 陽（東京都健康長寿医療センター研究所社会参加とヘルシーエイジング研究チーム）

P19B-41 まちづくりの主体形成のための空間の意味付けに関する研究

内山志保（大阪大学人間科学研究科）

P19B-42 大学進学時のより良い学部選択につながる自発的学習を引き起こす契機となる経験の分析—大学院進学時に学部時から専攻を変えて進学した人の語りをもとに—

近藤百玲（青山学院大学大学院教育人間科学研究科）

益川弘如（青山学院大学教育学部）

P19B-43 「夕方時間帯の保育」で感じられる雰囲気とはどのようなものなのか—THINKING AT THE EDGE（TAE）によって見出されたフェルトセンスを手掛かりに—

石川 徹（広島大学大学院人間社会科学研究科／高崎健康福祉大学人間発達学部）

P19B-44 ADHD当事者が服薬経験を語る場の創出と語りの検討—オンライン・グループインタビューを用いて—

山口莉絵（山梨大学大学院医工農学総合教育部）

井潟瑞希 (SOAS MA Medical Anthropology and Mental Health)

P19B-45 タイ人留学生が小学校で自文化を伝える経験から生じた内的変容の質的分析

磯本崇仁 (立教小学校)

P19B-46 質的方法の知識の正当化プロセスの顕在化にリフレクティビティを導入する—論理ベイズ主義を踏まえて—

岡田 心 (大阪大学大学院生命機能研究科、CiNet)

P19B-47 生成AIにおける他者性の技術的条件—オートエスノグラフィによる対話論的考察—

河野未来

7. 抄録

招待講演	10月18日 (土)	13:00-15:00	L 棟 205
------	------------	-------------	---------

質的研究—経験から経験へと架橋する物語りの科学—

大谷 尚（名古屋経済大学特任教授，名古屋大学名誉教授）

大谷尚先生は、日本の質的研究をリードする研究者です。特に、大谷（2008）において提案された質的データ分析手法 SCAT（Steps for Coding and Theorization）は、収集した膨大なインタビューデータを前に、何からどう分析したらよいのかと途方に暮れ、茫然自失に陥る私たちに大きな光を与えてくれました。その後、分析手法は大谷（2011）によって洗練され、『質的研究の考え方-研究方法論から SCAT による分析まで-』（大谷 2019）へと結実します。この本は、質的研究を志す人々にとって必読書と言えるでしょう。



生成的コーディング（generative coding）を用いる SCAT は、もともとゼミに参加する大学院生が困難なく質的データ分析に取り組めるようにと開発されたものであり、「明示的で段階的な分析手続きを有する」「比較的小規模のデータに適用可能である」「初学者にも着手しやすい」などの特長を有します（大谷，2019）。今日では、心理学、教育学、医学、看護学、薬学、社会学、作業療法学、認知科学、経営学、土木工学、航海学など、多様な分野で SCAT を用いた研究が展開されており、その成果は、国内外の学術雑誌に多数掲載されています。分析者が付すコードの全てが思い付いた経緯を痕跡として残しながらワークシート上に可視化されることから、その都度あるいは後から遡って、コードの妥当性を検討しやすい点が大きな魅力と言えるでしょう。

関連書籍・論文

主な著書

大谷尚（2019）『質的研究の考え方 -研究方法論から SCAT による分析まで-』名古屋大学出版会

大谷尚（2008）無藤隆・麻生武 編。『質的心理学講座 第1巻』。担当 第9章「学校文化と『神の微笑モデル』-テクノロジーと教授・学習文化とのコンフリクト-」。東大出版会。233-266

大谷尚（1997）平山満義 編。『質的研究法による授業研究 -教育学・教育工学・心理学からのアプローチ-』担当「教育工学からみた質的授業研究」。北大路書房。123-181

主な論文

大谷尚（2021）「質的研究と SCAT について」。『社会と調査』。26. 100-105

大谷尚（2019）「教育におけるテクノロジー研究と質的研究方法論」。『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』。65(2): 1-28

大谷尚（2017）「質的研究とは何か」。『薬学雑誌』。137(6): 653-658

- 大谷尚 (2017)「質的研究はどのように進めれば良いのか -しばしばなされる質問にもとづいたいくつかの具体的なガイド-」.『学校健康相談研究』. 14(1): 4-12
- 大谷尚 (2016)「質的研究とは何か -実践者に求められるその本質的で包括的な理解のために-」.『学校健康相談研究』. 13(1): 2-13
- 大谷尚 (2016)「質的研究とは何か -その意義と方法-」.『歯科医師会雑誌』. 68(12): 15-24
- 大谷尚 (2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization -明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」.『感性工学』. 10(3): 155-160
- 大谷尚 (2008)「質的研究とは何か -教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」.『教育システム情報学会誌』. 25(3): 340-354
- 大谷尚 (2008)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 -着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-」.『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』. 54(2): 27-44
- 大谷尚 (2006)「教育と情報テクノロジーに関する検討 -ハイデッガーの『技術への問い』をてがかりとして-」.『教育学研究』. 173(2) (別冊) . 14-28
- 大谷尚 (2005)「質的アプローチは研究に何をもたらすか」大谷尚・無藤隆 他: 質的心理学が切り開く地平.『質的心理学研究』. 4. 16-36
- 大谷尚 (1999)「「質的研究」の文脈からみた日本の授業研究の位置づけに関する試論 -研究成果の交流と共有を展望して-」.『教育方法学研究』. 24: 29-37
- 大谷尚 (1995)「学校教育におけるコンピュータ利用を対象とした質的研究のためのコードワードの機能と特性の検討」.『名古屋大学教育学部紀要 -教育学科-』. 42(1): 109-128
- 大谷尚 (1995)「コンピュータを用いた授業を対象とする質的研究の試み」.『日本教育工学雑誌』. 18(3/4): 189-197

職業的アイデンティティを架橋する

—人材育成の研究と実践を通して—

企 画： 日本質的心理学会第 22 回大会準備・実行委員会

司 会： 宗田直子 （福山大学人間文化学部）

話題提供： 安部主晃 （広島大学人間社会科学研究科）

話題提供： 今井多樹子（香川大学医学部）

話題提供： 上田敏文 （名古屋市立大学人間文化研究科）

指定討論： 白井利明 （大阪教育大学名誉教授）

企画趣旨

心理学、教育学、保育学、看護学、社会学など、多様な領域において、高度専門職養成が行われている。人材育成では、各領域における専門家としての職業的アイデンティティを確立していくことが重要である。さらに、多職種連携が求められる昨今では、互いの共通項を土台として尊重し合うとともに、異分野との差異から自らの専門性を改めて問い直し、深く追求していくことが求められる。そこで本シンポジウムでは、心理、看護、保育、教育の分野で専門職養成の研究・実践に携わる登壇者から話題提供と討論を行う。多様な職業的アイデンティティを架橋し、私たちの共有する地を広げるとともに、自らの形をも模索する場としたい。

話題提供 1：心理職の職業的アイデンティティと倫理（安部 主晃）

昨今、心理職に対する社会的要請の増加・多様化に伴い、心理職の取り組みは拡大の一途を辿るとともに、混乱の最中にもある。社会からの要請が多様化することは、同時に職業的アイデンティティを問い直す重要な契機でもある。心理職の人材養成においても、専門職としての心理士・師のイメージは多様化しており、心理職を目指す者が何を土台として、どのように専門性を身につけていくのかを問い直す試みが必要である。心を見て、心に関わるという心理職の専門性はいかにして身につけられるのだろうか。本シンポジウムでは、倫理という観点から浮かび上がる心理職の土台について話題提供を行い、同じく人との関わりそのものを土台とする他領域の方々と議論することで、職業的アイデンティティの醸成に求められる共通項を探りたい。

話題提供 2：患者ケアに根差した職業的アイデンティティの再構築に寄与する要因：新人看護師の臨床実践の質的分析から（今井 多樹子）

看護学において、職業的アイデンティティの形成は、看護実践能力の向上に不可欠であり、質の高い医療・看護の提供に資する教育的・実践的意義をもつ。看護師の職業的アイデンティティの形成は、基礎看護学実習など、学生期の臨床経験に遡り、Hershenson（1968）の職業的発達理論とも一致する。しかし、看護学生の職業的アイデンティティは、1 年次に高得点を示すものの、学年進行に伴い一時的に低下する傾向があり、未成熟な側面もみられる。新人看護師は、学生期とは異なる臨床実践を通してリアリティショックや、教育・実践の構造的な乖離を

経験する中で、困難を乗り越えながら職業的アイデンティティの再構築を図る。本シンポジウムでは、新人看護師が臨床で直面する困難とその対応過程を質的に分析し、教育的・社会文化的・個人的・組織的側面から職業的アイデンティティの再構築に寄与する要素を考察する。

話題提供3：保育職における職業アイデンティティを再考する（上田 敏文）

本シンポジウムにおいて、3つの視点から話題提供を行いたい。

第一に、保育における職業アイデンティティ形成に関してである。保育職に対して、労働環境の厳しさや不適切保育など、社会的な風当たりが厳しい中においても、本職は小学生のなりたいたい職業アンケートではランクインされている。従って保育者養成校には、幼い頃から、「子どもが好き」「先生への憧れ」で何となくなりたいたいというイメージで入学する学生が多い。一方、養成課程における実習等の経験から、「リアリティ・ショック」を受け保育職に就かない選択をする学生も多い。どのように保育者に「なる」のだろうか。

第二に、保育者に「なった」者の職業アイデンティティはどのようなものなのか。職業アイデンティティに関する先行研究は主として統計学的手法を用いたものを中心となっている。これらを俯瞰するとともに、質的に職業アイデンティティとしての「実感」がどこにあるのかについて報告する。

第三に、保育という多職種連携が求められる場において、多様な専門家が保育を語り合うことの意味と課題について捉え直したい。これらの視点を踏まえ、フロアを含めて闊達に議論したいと考える。

指定討論：白井 利明

大阪教育大学名誉教授。教育学博士。時間的展望の生涯発達心理学、青年期から中年期にかけてのアイデンティティの発達に関する長期縦断研究、キャリアの生涯発達心理学等、長年の質的観点からの研究活動を行う。時間的展望法、変容確認法、前方視的再構成法を開発。34年に渡る縦断研究を継続し、面接による膨大な質的データを分析、青年期から老年期に至る人格発達の原理を追及している。職業的アイデンティティの形成に造詣が深く、本シンポジウムの議論をリードする。心理、看護、保育の領域における職業的アイデンティティの生成に加え、教育の観点から、キャリアとアイデンティティの発達について示唆をいただく。

Bridging Professional Identities

Through Research and Practice in Human Resource Development

Naoko Sota (Fukuyama University)、Moderator

Kazuaki Abe (Hiroshima University)、Presenting Author

Takiko Imai (Kagawa University)、Presenting Author

Harutomo Ueda (Nagoya City University)、Presenting Author

Toshiaki Shirai (Emeritus Professor of Osaka Kyoiku University)、Discussant

Language: Japanese

準備・実行委員会企画シンポジウム 10月19日（日） 13:00-15:00 L棟204

戦争・被爆・災害の記憶を架橋する

ー集合的トラウマに触れる、多様な実践とまなざしー

企画：日本質的心理学会第22回大会準備・実行委員会

司会：上手由香（広島大学大学院人間社会科学研究科）

話題提供：二川一彦（原爆胎内被爆者全国連絡会）

話題提供：中村 平（広島大学大学院人間社会科学研究科）

話題提供：宮前良平（福山市立大学都市経営学部）

指定討論：村本邦子（立命館大学人間科学研究科）

企画趣旨

本シンポジウムでは、「集合的トラウマ」の視点から、戦争・被爆・災害といった大規模な歴史的出来事がもたらす深い傷と、それに触れようとする多様な実践を取り上げる。異なる背景とフィールドに立つ三名の話題提供者を迎え、それぞれの実践において現れてきた「語ること／語られないこと」「当事者性／非当事者性」「記憶の継承と再構成」といったテーマを共有しながら、戦争と災害に関わる集合的トラウマと、それに触れる営みの可能性を検討する。指定討論者には、虐待、DVなどジェンダーと暴力に関わる心理臨床を続けながら、中国と日本の若者をつなぐ南京での実践や、東日本大震災以降「被災と復興の証人になる」ことを掲げ、東北への訪問を継続してきた村本邦子氏を迎える。戦争と災害、それぞれの境界に橋を架ける営みについて、多様な視点から議論を深めていきたい。

話題提供1：被爆80年・生まれた時から被爆者：胎内被爆者の想い、次世代に託すもの（二川一彦）

原爆投下から8か月後、二川氏は母親の胎内で被爆した“胎内被爆者”として誕生した。父と長姉を原爆で亡くし、生き残った母は、生涯原爆について語ることはなかった。二川氏自身も、被爆者であることを長く語らなかったが、2014年、亡き母の筆筒から姉の形見を見つけたことを契機に証言活動を開始。現在は原爆胎内被爆者全国連絡会の代表として、原爆体験の継承に取り組んでいる。被爆者の高齢化が進む中、胎内被爆という立場で語り継ぐことの意味や、「語る資格」をめぐる葛藤を抱えながら、次世代へ何を手渡せるかを模索している。当時の記憶を持つ当事者が次第に不在となる中で、体験をいかに次世代へ継承していくかについて検討したい。

話題提供2：戦争トラウマと集合的記憶：復員日本兵と孫、台湾先住民、加害の責任（中村 平）

私は近年、中国からの復員日本兵であった祖父の戦争トラウマと、その家族への影響について語りはじめている。一方で私は大学卒業後に日本を飛び出し、台湾高地先住民への日本植民主義(Japanese Colonialism)の聞き書きに没頭してきた。後に博士論文を「到来する暴力の記憶の分有」(2006)とし単著を『植民暴力の記憶と日本人』(2018)としてまとめたが、その背景には、祖父の戦争トラウマと家族史における暴力の内旋のような事態があった。殖民地台湾と

台湾高地先住民への殖民暴力は、実は祖父が行使させられた中国での暴力と繋がっているものであった。こうした日本殖民主義の暴力の連鎖の問題を、加害の責任がどう取られていくのかという戦争責任と殖民地責任論の磁場において具体的に語りたい。それは同時に、戦争トラウマが集合的記憶として現在の日本社会で立ち上げられている状況にパフォーマンスティブに介入するものである。

話題提供 3 : すべてを失うということ : 自然災害と復興における集合的トラウマ (宮前良平)

大規模な災害に被災するということは、すべてを失う経験でもある。それは、コミュニティ全体が傷を負い、人と人のあいだにあるつながりが絶たれることを意味する。このような災害による共同性の損傷によるトラウマのことを集合的トラウマ (Collective Trauma, エリクソン 1976=2021) と呼び、個人トラウマの集積 (Collected Individual Trauma) とは区別する。そのうえで、戦争や被爆、被災がどのように集合的トラウマを引き起こすのか、また、その後の復興過程によってさらなる集合的トラウマが生じるメカニズムを報告する。くわえて、私が携わってきた被災写真返却活動でのフィールドワークならびにいくつかのインタビューをもとに、復興が「第二の喪失」と呼ぶべき徹底的な喪失感を生むことを紹介する。最後に、集合的トラウマから回復するための道すじを治療共同体論をもとに論じる。

Bridging Memories of War, Atomic Bombing, and Disaster

Diverse Practices and Perspectives on Collective Trauma

Yuka Kamite (Hiroshima University), Moderator

Taira Nakamura (Hiroshima University), Presenting Author

Kazuhiko Futagawa (The Japan In-Utero Hibakusha Network), Presenting Author

Ryohei Miyamae (Fukuyama City University), Presenting Author

Kuniko Muramoto (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

常任理事会主催国際シンポジウム 10 月 19 日 (日) 15:30-17:30 L 棟 204

「円卓シネマ」から 20 年

私たちは何をなしえ、これから何をしていくのか

- 企 画： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
山本登志哉（発達支援研究所）
中坪史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）
- 司 会： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
- 話題提供： 呉宣児（共愛学園前橋国際大学国際社会学部）
- 話題提供： 沈炫普（慶熙大学校大学院国語国文学科）
- 話題提供： 山本登志哉（発達支援研究所）
- 指定討論： 能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

企画趣旨

常任理事会主催の国際シンポジウムである。このシンポジウムは、学会の正会員であれば、大会に参加していなくても、オンラインでの参加が可能である（オンライン参加方法は別途メルマガでお知らせする）。なお韓国人研究者が2人登壇するが、両者とも日本語が堪能であり、この国際シンポジウムはすべて日本語で行う。

私たちが「円卓シネマ」を標榜し、日韓中越の仲間と共同実践し出版した『アジア映画をアジアの人々と愉しむ：円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界』（2005年・北大路書房）からちょうど20年が経過した。同書の韓国語版出版に続いて、2冊目の「円卓シネマ」本となった『日韓 傷ついた関係の修復：円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界2』（2011年・北大路書房）は、現在韓国語版の出版準備が進んでいる。漢字文化圏の研究者による対話を促してきたこの円卓シネマによって、私たちは何をなしえてきたのか。そしてこれからさらに何をしていこうとしているのか。また質的研究の方法論にどのようなインパクトをもたらしたのか。円卓シネマ立ち上げ時の当初メンバーが顔をそろえ、現在における「新しい対話」の必要性と、質的研究の方法論としてのさらなる展開の可能性について議論する。

なおシンポジウムでは、韓国映画「友へ チング」を題材に対話も行う。この映画は、「円卓シネマ」を始めるきっかけとなったものであり、日本人と韓国人のリアクションの違いが比較的明確に見られることが多いものである。そのためこの映画をあらかじめ視聴の上、この国際シンポジウムに参加して下さることが望ましい。

話題提供 1：20 年間の円卓シネマ式の授業と日韓交流（呉宣児）

私が担当する「東アジア比較文化論」の授業では、20年間にわたり「円卓シネマ」方式による実践を行ってきた。日本の大学生が韓国を訪れ、日韓の大学生が対面で交流し、さらにその中で「円卓シネマ」形式のディスカッションを行うこともあった。私にとっては20年間続けてきた取り組みであるが、学生にとっては毎回は「初めての円卓シネマ」である。半年間の授業を通して、学生たちは、同じ日本人の中にも「当たり前」とされる感覚や考え方が多様である

ことに驚き、さらに韓国・中国・ベトナムとの文化的な違いにも気づいていく。アジア太平洋戦争を題材とした映画を用いた際には、学生自身が衝撃を受けたり、防衛的な反応を示したりすることもある。その過程で、学生は信頼関係に基づき、「相手が自分を受け入れてくれる」「自分も相手を受け入れる」といった気持ちの変化を経験し、「共に生きる」という感覚の共有へとつながっていく。本発表では、こうした20年間にわたる実践活動のプロセスを、あらためて整理してみたい。

話題提供2：YouTube 空間における対話の試み（沈炫普）

私は約5年間、YouTubeを通して韓国の歴史ドラマや映画を紹介しながら、日本人視聴者とコメント欄で意見交換を重ねてきた。同じ作品を見て何を感じたかを語り合う過程は、文化的感覚のズレを発見し、驚きと共に楽しむ「円卓シネマ」の実践に近いと感じている。一方で、コメント欄は匿名性が高く、相互尊重がある反面、直接対話ではなかなか見られないような攻撃的な意見も目立つ。また、近年は偏った情報に触れやすく、異なる視点に耳を傾けにくい傾向も見られる。だからこそ、顔を合わせて語り合う「円卓シネマ」のような実践が、いま改めて必要とされているのではないだろうか。これからのYouTubeをはじめとするオンライン空間における対話の可能性と課題を考えてみたい。

話題提供3：ディスコミュニケーションと対話の普遍性（山本登志哉）

円卓シネマでは「同じものの語りを見ても、その人の文化的な感覚により、どれほどその理解がズレてしまうのか」を発見してそれを驚きと共に楽しむ対話が成立した。なぜズレるのか、ということはコミュニケーション一般の問題であり、その後山本らは科学研究などを通し、「異文化間で相手の視点を理解し、共生を探る対話的授業実践研究」や「自閉スペクトラム症者と定型発達者の見方にどれほど大きなズレがあるか（当事者視点を踏まえた支援と共生）」「供述の信用性評価を巡り、裁判官と心理学者がどれほどズレた認識を持つか（注意則の再検討）」についてそれぞれの立場の人同士の対話的な実践研究に拡げて継続している。この視点の現代的な意味について改めて考えたい。

Twenty years since “Round Table Cinema,” what have we achieved, and what will we do next?

ITO Tetsuji (Ibaraki University), Moderator

YAMAMOTO Toshiya (Developmental Research Support Center), Moderator

NAKATSUBO Fuminori (Hiroshima University), Moderator

OH Sunah (Kyoai Gakuen University), Presenting Author

SIM Hyunbo (Kyung Hee University), Presenting Author

YAMAMOTO Toshiya (Developmental Research Support Center), Presenting Author

NOCHI Masahiro (University of Tokyo), Discussant

Language: Japanese

質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム 10月18日(土) 9:30-11:30 L棟206

「アート」に基づいた質的研究

ー研究と実践・芸術と社会の混交へのまなざしー

企 画： 鮫島 輝美（関西医科大学看護学部）
山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）
司 会： 鮫島輝美（関西医科大学看護学部）
話題提供： 岸磨貴子（明治大学国際日本学部）
話題提供： アサダワタル（近畿大学文芸学部）
話題提供： 山下里加（京都芸術大学美術工芸学科）
指定討論： 山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）

企画趣旨

ABR (Arts-Based Research) とは、従来の質的研究の手法では十分捉えきれなかった側面を、フィクションなどのアート表現を通じて描写することであり、創造的なアートの考え方を研究文脈に用いる、知識構築のための領域横断的アプローチである。そのため、どの領域の研究者であっても、研究のどの段階（研究プログラム生成段階、データおよび内容の生成段階、分析段階、解釈段階、発表段階）でも利用可能な方法論的ツールとして近年注目されている。

こうしたアプローチが注目されるようになった背景として、創作アートセラピーの発展、アートと学習に関する研究の進展、質的研究の発展が貢献している (Leavy, 2018/2024)。具体的には、アート活動を行う実践家が質的研究者になったり、アートを背景に持つ研究者たちが、それぞれの経験を探究活動に持ち込んだりした、とされている。本シンポジウムでは、こうした背景をふまえ、アートと質的研究の関係性について議論し、「アートについて (about arts)」ではなく「アートに基づいた (arts based)」研究の意義を深める機会としたい。

本シンポジウムでは、はじめに明治大学の岸氏から、ABR (Arts-Based Research) について概説いただき、ABR と質的研究の関係について話題提供していただく。次に、実際にアートに基づいた実践を行っている近畿大学のアサダ氏から具体的な実践例について話題提供していただく。最後に、アートと社会・地域創造との関係について研究している京都芸術大学の山下氏に話題提供していただく。指定討論は、企画者の1人であり、2022年にPatricia Leavyを招聘してシンポジウムを開催した立命館大学の山口が担う。

話題提供1：探究の場づくりとしてのABR（岸磨貴子）

ABRは、研究を一人で完結するものではなく、他者との対話や共創を通じて、新たな意味や問いを生み出す営みとして捉え直す実践である。私はこれまで、高校・大学での探究学習、地域コミュニティでの協働、国際的な教育実践などにおいて、アートの手法を取り入れてきた。アートによって生まれる表現は、学術論文のように明確な主張を持つとは限らず、多義的に解釈される。その「わかりにくさ」は、ときに敬遠される一方で、問いや対話を立ち上げるきっかけにもなり得る。本発表では、探究を自己と他者、社会との関係性を問い直す創造的プロセスとして捉え、ABRが教育や地域においてどのように意味の共有や再構築を促すのかを考察する。また、「知ることとは何か」「ABRとアートの違いは何か」「多様に解釈されることが研究と

してどのように評価されるのか」といった、ABR 実践における核心的な問いも取り上げていく。

話題提供 2：アートによる「当事場（とうじば）」の生成（アサダワタル）

私の実践は、音楽やラジオ、映像や展示などのアート活動を媒介として、人々の「生」を支える関係や場を編み直すことに重きを置いてきた。とりわけ福島県いわき市・下神白団地でのアートプロジェクト「ラジオ下神白」などの実践では、被災や困難を抱えた人々と共に「声」を起点にした表現を創出し、そのプロセスを社会に開かれたかたちで共有してきた。こうした活動は、研究と実践、芸術とケアの境界を横断しながら、参加者の内的経験や関係性を質的に記述する試みでもある。本発表では、ABR の文脈において、コミュニティ・デザインやケア領域との接続を踏まえ、アートが人々の多様な当事者性を分かち合う「当事場（とうじば）」を生成し、人々の語りや沈黙に触れるための方法論的装置としてどのように機能し得るのかを具体例をもとに考察する。

話題提供 3：アートを支える現場の声に耳をすます（山下里加）

全国の文化施設やアートプロジェクトの関係者に聞き取り調査を進める中で、しばしば「コト」の本質に直に触れるような言葉に出会うことがある。そうした言葉の多くは、アートの現場を支え、日常を運営するスタッフたち、アートに触れた市井の人によるものである。「自身がなぜアートに関わるのか」「アートがあることでまちはどう変わったのか」「この世界になぜアートが必要なのか」……。自身の実体験から生まれた彼ら彼女らの言葉は、アートから発生した「コト」の存在を私たちに気づかせてくれる。本発表では、アーティストや企画者のように名前が表に出にくい人々の発言を中心に取り扱い、作品批評や経済活性とは異なる視点からアートの存在意義と可能性、課題を報告する。

Qualitative Research and Arts-Based Research

Striking a Balance Between Research and Practice, Arts and Society

Terumi Sameshima (Kansai Medical University), Moderator

Wataru Asada (Kindai University), Presenting Author

Rika Yamashita (Kyoto University of the Arts), Presenting Author

Makiko Kishi (Meiji University), Presenting Author

Hironori Yamaguchi (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム 10 月 18 日(土) 15:30-17:30 L 棟 206

「ケア」を考える

—社会学・心理学・看護学の視点から—

企画： 加戸友佳子（摂南大学現代社会学部）

司会(兼企画)：奥田紗史美（大阪教育大学健康安全教育系）

話題提供： 元橋利恵（津田塾大学国際関係学部）

話題提供： 石田健太郎（明星大学教育学部）

話題提供： 藤原朝洋（社会福祉法人美樹和会）

話題提供： 伊藤麻紀（日本赤十字医療センター看護部）

指定討論(兼企画)：玉置佑介（明星大学教育学部）

指定討論(兼企画)：細野知子（日本赤十字看護大学看護学部）

企画趣旨

「ケア」とは、何かを、誰かを世話すること、大切にすることであり、「ケア」を希求する私たちのニーズは、自立／自律した個人が前提となった現代社会で、行動も健康も自己責任を問われる私たちの疲弊を意味しているのではないか。一方、「ケア」を必要とする弱き姿は、手を差し伸べる「私」を映し出す存在でもある。支え合って存在するしかない人間の本来の姿を前提にしたところから、現代社会を生きる私／私たちの「ケア」を考える。社会学，心理学，看護学が専門の4人の登壇者から話題提供をうけ、古くて新しい「ケア」について、多角的に議論していきたい。

話題提供1：日本におけるポスト母性的状況とオルタナティブな「母」フェミニズムの可能性（元橋利恵）

日本において、フェミニストのケア論は近年議論がなされるようになってきたが、その母性との緊張関係については蓄積がなされていない。本報告では、フェミニストによるケア理論から、母性主義をどのように捉え、オルタナティブなフェミニズムの可能性を見出すことができるかという問いのもと、北米の母親研究と日本社会の現状を架橋することを目的とする。特に、J・スティーブンスの米国における「ポストマターナル思考 postmaternal thinking」の議論を参照し、日本における新自由主義的状況と母性主義やフェミニズムの関係とその変容について考察を試みる。

話題提供2：子どもとつくる教育とケアの協奏—願いと実際のギャップを埋める実践としての寄り添い—（石田健太郎）

本論文は、保育の目的である望ましい人間形成を保育者が、いかに子どもの声を聴きながら、子どもとともに保育をつくろうとしているのか検討するものである。ここでは教育とケア（scaffolding）の実践の記述を通して、保育者のこう育ってほしいという「願い」と子どもの実際の「姿」との間のギャップに保育者が、どのように寄り添っているかを考察する。こうした試みは、主観的な意味生成の質を捉える評価とは別に、集合的学びが達成される相互行為のプロセスと分析の過程を第三者にも検証可能なように提示することで、測定される質と共存可能な、もう一つの保育の質評価（形成的評価）のための言語的資源となりうるものである。

話題提供 3：心理職は保育所で何を担うのか？—実践事例から考えるケアのニーズ—（藤原朝洋）

保育所における保育業務は、子どもへの身体的・情緒的ケアを中心とするが、近年では、保護者支援や地域子育て支援の拠点としての機能も求められ、その役割は多様化している。核家族化や地域社会のつながりの希薄化により、従来の「親をケアする仕組み」が十分に機能しにくくなる一方で、保育所への社会的期待は高まり、保育士の業務負担は増大している。こうした状況において、保育士自身への支援、すなわち「保育士のケア」の重要性が顕在化している。本発表では、保育所をケアシステムとして捉え、その中で心理職が果たし得る役割について、支援実践の報告から明らかにし、ケア機能の維持・強化の可能性を検討する。

話題提供 4：役割が拡大している看護師のケアを再考する—診療の補助における看護実践—（伊藤麻紀）

看護師の業務は診療の補助と療養上の世話である。超高齢化社会、医療が高度化している昨今、看護師によるベッドサイドケアは減少している一方で、医師不足に対応するため、一部の医行為が看護師の診療の補助として認められ、研修等を修了した専門性の高い看護師の役割は拡大している。ここでは足のきず（慢性創傷）のケアを例としてあげ、専門性をもつ看護師が診療の補助と同時に行っているケア、すなわち、患者がきずへの理解を促進することや生活とともに慢性創傷の治療を続けること等の意思決定支援の実践について考察する。さらに、医師への意思決定を支える等のチーム医療における看護師の役割も含めて看護師のケアについて再考する。

Considering “Care”

from the perspectives of sociology, psychology, and nursing

KADO Yukako (Setsunan University), Organizer

OKUDA Satomi (Osaka Kyoiku University), Organizer & Moderator

MOTOHASHI Rie (Tsuda University), Presenting Author

ISHIDA Kentaro (Meisei University), Presenting Author

FUJIWARA Tomohiro (Socal Welfare Corporation Mikiwa-kai), Presenting Author

ITO Maki (Japan Red Cross Medical Center), Presenting Author

TAMAOKI Yusuke (Meisei University), Organizer & Discussant

HOAONO Tomoko (Japanese Red Cross College of Nursing), Organizer & Discussant

Language: Japanese

研究交流委員会企画シンポジウム 10 月 18 日（土） 13:00-15:00 L 棟 102

ビジュアル・ナラティブ・フィールドの往還と地域づくり

企画・司会・話題提供： 杉浦 彰子（J A 共済総合研究所）

企画：杉山 高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

企画：香曾我部 琢（宮城教育大学教職大学院）

企画：高森 順子（情報科学芸術大学院大学産業文化研究 センター）

企画・話題提供： 李 勇昕（立正大学人文科学研究所）

話題提供：黒瀬 武史（九州大学大学院人間環境学研究院）

企画・指定討論： 河原 智江（共立女子大学看護学部）

企画趣旨

本企画は、研究過程において「ビジュアル」「ナラティブ」「フィールド」の往還に着目し、それらの手順や相互作用が研究および地域づくりにどのように寄与するのか。また、それらとどのように関係を結び、ともに新たな知見を生み出していくのかについて検討するものである。学会大会に先立ち、研究交流委員会では、本年 8 月 22 日に「ナラティブの森をめぐる—ビジュアル・ナラティブ・フィールドの往還と地域づくりワークショップ—」を開催し、本テーマについて議論を行った。話題提供では、当日の報告と、防災や都市計画の視点からの事例発表を通じて、議論をより一層深化させていく。

話題提供 1：ナラティブ分析とフィールドへの還元をめぐる検討（杉浦 彰子）

8 月 22 日に開催したワークショップでは、茨城県内複数地域の住民らの語りを文字で展示する「ナラティブの森」と、語りを視覚化した「語りマップ」を体験し、住民と意見交換を行った。ナラティブは分析対象であると同時に、形を変えて循環し、再びフィールドに活かされること（＝ナラティブの利活用）で地域づくりに資する可能性があることなど、研究と地域づくりの実践の両面から検討した内容を発表する。

話題提供 2：10 年後に向き合う『クロスロード：大洗編』—被災地住民が語る問いの変化（李 勇昕）

2015 年、東日本大震災の被災地・茨城県大洗町で、対話型教材『クロスロード：大洗編』が開発された。住民が被災経験（ナラティブ）をもとに設問を作成し、その解説を映像（ビジュアル）で記録している点が特徴である。本発表では、その設問の作成者が 10 年ぶりに再び教材と向き合い、自らの問いを見直し、当時と現在での感じ方や判断の変化について語ったプロセスに注目する。記憶や経験がどのように語り直され、時間の経過がリスク認識や地域との関係性にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

話題提供 3：記憶・語り・空間の交差点——都市計画から読み解く「思い出マップ」（黒瀬 武史）

本話題提供では、「思い出マップ」という手法に焦点を当てる。「思い出マップ」とは、東日

本大震災後の岩手県大槌町における復興活動の一環として、吉里吉里地区の住民の記憶や思い出を地図上に可視化した取り組みである。語りと地図を結びつけるこの手法は、地域の記憶の継承や主体的な復興を促す契機となった。話題提供者は都市計画を専門とし、学際的な視点から、ビジュアルを用いた語りの可能性とその地域実践への応用について発表する。

Visual ⇄ Narrative ⇄ Field Interchange and Community Development

SUGIURA, Shoko (JA Kyosai Research Institute), Organizer, Moderator & Presenting Author

SUGIYAMA, Takashi (Kyushu University), Organizer

KOUSOKABE, Taku (Miyagi University of Education), Organizer

TAKAMORI, Junko (Institute of Advanced Media Arts and Sciences), Organizer

LEE, Fuhsing (Rissho University), Organizer & Presenting Author

KUROSE, Takefumi (Kyushu University), Presenting Author

KAWAHARA, Chie (Kyoritsu Women's University), Organizer & Discussant

Language: Japanese

学会賞選考委員会企画シンポジウム 10 月 19 日（日） 13:00–15:00 L 棟 206

質的研究の明日のために

— 『質的心理学研究』第22・23号優秀論文賞選考のフィードバック—

企 画：日本質的心理学会 学会賞選考委員会
司 会：沖潮満里子（青山学院大学教育人間科学部）
話題提供：松本光太郎（茨城大学人文社会科学部）
話題提供：山田富秋（NPO 社会理論・動態研究所）
話題提供：檜田美雄（摂南大学現代社会学部）
話題提供：勝浦眞仁（同志社女子大学現代社会学部）
指定討論：竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）
指定討論：田中元基（淑徳大学人文学部）

企画趣旨

日本質的心理学会は、2009年より優秀な質的心理学研究に対して、受賞理由に即した個別の名称を付与したうえで優秀論文賞を授与してきた。本シンポジウムは、その一環として学会賞選考委員会が初めて企画する新たな試みである。

今年度学会賞の対象となったのは、『質的心理学研究』第22号および第23号に掲載された論文である（依頼論文は除く）。本シンポジウムでは、選考委員による話題提供により、選考過程における評価や議論の観点、および選考委員が掲載論文を精読するなかで浮かび上がってきた近年の傾向や、その中で見出されるポジティブおよびネガティブな側面、さらには今後に期待する方向性などについても議論を展開していく。

選考過程や選考委員の見解をフィードバックすることは、掲載論文の著者にくわえて、未来の著者も励ますことを意図していて、他方で選考委員の見識が問われることにもなる。質的研究において研究テーマや方法が多様であるため、評価基準を論文によって調整する必要がある。その調整は選考委員や査読委員が一方的に行うことは適切ではなく、選考や査読に対する著者や読者からのフィードバックを含めたサイクルが回っていくことによって適切に行われると考えている。

本シンポジウムでは、選考委員からの話題提供の後には、受賞者による指定討論を行い、今後の研究方法の多様性や、臨床や教育など実践領域との接続、さらには次世代へ継承すべき質的研究の意義について多角的に論じていきたい。本シンポジウムを通して、会員一人ひとりが自らの研究を位置づけ直し、質的研究の明日をともに考える機会となることを期待する。

話題提供1：選考のフィードバック（松本光太郎）

掲載論文を精読したうえで出席した選考委員会を踏まえて、賞に選ばれた論文の評価や選に漏れたものの注目に値した論文の評価、それから全体的な傾向などについて話題を提供する。

話題提供2：選考のフィードバック（山田富秋）

掲載論文を精読したうえで出席した選考委員会を踏まえて、賞に選ばれた論文の評価や選に漏れたものの注目に値した論文の評価、それから全体的な傾向などについて話題を提供する。

話題提供3：選考のフィードバック（檜田美雄）

掲載論文を精読したうえで出席した選考委員会を踏まえて、賞に選ばれた論文の評価や選に漏れたものの注目に値した論文の評価、それから全体的な傾向などについて話題を提供する。

話題提供 4：選考のフィードバック（勝浦真仁）

掲載論文を精読したうえで出席した選考委員会を踏まえて、賞に選ばれた論文の評価や選に漏れたものの注目に値した論文の評価、それから全体的な傾向などについて話題を提供する。

For the Future of Qualitative Research

Feedback from the Selection Process of the Outstanding Paper Award, Japanese Journal of Qualitative Psychology (Vols. 22 & 23)

Mariko, OKISHIO (Aoyama Gakuin University), Moderator

Kotaro, MATSUMOTO (Ibaraki University), Presenting Author

Tomiaki, YAMADA (Institute of Social Theory and Dynamics), Presenting Author

Yoshio, KASHIDA (Setsunan University), Presenting Author

Mahito, KATSUURA (Doshisha Women's College of Liberal Arts), Presenting Author

Kazuma, TAKEUCHI (Tama University), Discussant

Motoki, TANAKA (Shukutoku University), Discussant

Language: Japanese

ビジュアル・ナラティヴとは？

— 質的研究の新地平 —

- 企 画： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）
やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）
話題提供： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）
話題提供： 水戸貴久（立命館アジア太平洋大学 言語教育センター）
話題提供： 荘島幸子（帝京平成大学 健康メディカル学部）
話題提供： やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

企画趣旨

ビジュアル・ナラティヴは、人々の経験や世界における出会いを視覚的なイメージを介してもの語る行為ならびにその所産を糸口として、人間や世界についての多様な理解を試みるアプローチである。ナラティヴ・アプローチという言い回しから私たちが前提にしてきた探究は、もっぱら言語を用いた実践であった。私たちの日常的な実践において、ことばが当の実践を強力に支えていることは疑いない。だが、他者とやりとりを重ね、共同的に何かに取り組む際に私たちが用いる媒体はことばに限られない。こうした視野のもと、言語中心主義への疑義を発露として、世界や自己の認識についての新たな見方や方法論を開拓する試みの一つがビジュアル・ナラティヴアプローチである。今回のシンポジウムでは、それぞれの研究者が模索しながら切り拓いてきたビジュアル・ナラティヴの具体的な研究報告を通して、このアプローチの可能性について議論する。

話題提供1 ビジュアル・ナラティヴによる実践観の探究（横山 草介）

ビジュアル・ナラティヴを用いて本報告が焦点を当てるのは「実践観」という主題である。「実践知」が特定の状況における当意即妙な振る舞いや行為を指して用いられるのに対し、「実践観」は特定の振る舞いや行為の指針となっている価値観や信念を指して用いられる。これまでの質的研究の探究において価値観や信念への接近はインタビュー法を用いて行われることが多かった。本報告はそこに視覚的なイメージによる語り——ビジュアル・ナラティヴ——という試みを加えることによって価値観や信念へのアプローチに新たな活路を見出そうとするものである。本報告では日々、就学前教育の実践に携わる保育者たちの描いたイメージ画を通して保育の実践に巡らされた実践観の一端を浮き彫りにしたい。

話題提供2 ビジュアル・ナラティヴを用いた日本語教員養成（水戸 貴久）

水戸は日本語教員養成におけるビジュアル・ナラティヴを用いた教育実践について取り上げる。本実践は、受講生同士で「異種むすび法」（やまだ・木戸，2017）を行い、個々の日本語教師のイメージ画を重ね、「私たちの日本語教師」モデルを共同生成する実践である。「ズレのある多重のかさね」（やまだ，2013）の立場に立ち、個々のイメージ画の差異や矛盾を前提にしつつ共通性に着目し、イメージ画同士を重ね、結ぶことによってモデル生成を行うビジュアル・

ナラティヴの実践は、いち研究手法という枠を超え、共生の時代においてことばの教師に求められる感性を育むものであると考える。シンポジウムではナラティヴの共同生成の過程、及び実践を通じた受講生の学びに焦点を当て、ビジュアル・ナラティヴを用いた教育実践の可能性について考察する。

話題提供3 ビジュアル・ナラティヴによる親子関係の探究（荘島 幸子）

本発表では、ビジュアル・ナラティヴを用いて親子関係を探究した2つの研究を取り上げる。1つは、母親2名に息子との関係をイメージ画に描いてもらい、共に眺めながらインタビューを行った事例検討型の研究である。幼少期から青年期にかけて描かれた4枚の絵と語りには、身体的な接近や象徴的モチーフ、関係性への再解釈が込められていた。もう1つは、やまだ（2023）を参考にして、大学生が描いた「父親とわたしの関係」のイメージ画122点を分析し、親子の関係構図とライフストーリーを抽出した研究である。両者に共通するのは、イメージが過去の記憶を再生するのではなく、関係性の意味を動的に再構成する契機となっている点である。言語と視覚の交差によって関係の厚みや揺らぎを描き出すビジュアル・ナラティヴの可能性について考察する。

話題提供4 「月」とうつしのリフレクシオン—月鏡の浄化と離見の見

（やまだ ようこ）

ビジュアル・ナラティヴは、イメージやセンスを重視するので、「詩」のナラティヴと共通する機能をもつ。「月」は、古今東西、詩歌にうたわれてきた究極のビジュアルである。今回は、次の2点から「月」の「うつし（写し、移し）」機能について考察する。①「月」に自身の心を投影し（うつし）、月と自己をかさねてリフレクシオンし浄化する働き（月鏡）。②「月」を媒介にして多重の視点を、うつし（移し）、かさねる働き（離見の見）。ナラティヴ論では、リフレクシオンや語り直しが重視される。「私」は、反照的に見て語ることによって、「自己」として認識できる。「月」は、その媒体として重要な働きをすると考えられる。

What's Visual Narrative?: Possibilities of Qualitative Research

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator, Presenting Author

Yoko Yamada(Ritsumeikan University) , Moderator, Presenting Author

Takahisa Mito(Ritsumeikan Asia Pacific University), Presenting Author

Sachiko Shojima(Teikyo Heisei University), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム2	10月18日（土）	9:30-11:30	L棟104
-------------	-----------	------------	-------

データセッションへの招待

ー東京ディスコース研究会の実践からー

企 画： 綾城初穂（駒沢女子大学共創文化学部）・大橋靖史
（淑徳大学総合福祉学部）・能智正博（東京大学大
学院教育学研究科）

司 会： 綾城初穂

話題提供 1： 鈴木聡志（東京農業大学教職・学術情報課程）

話題提供 2： 岩根由佳（お茶の水女子大学大学院人間発達科学
専攻）

話題提供 3： 綾城初穂・岩根由佳・大橋靖史・鈴木聡志・太齋
慧（東京大学大学院教育学研究科）・能智正博

指定討論： 川野健治（立命館大学総合心理学部）・ハッ塚一郎
（熊本大学大学院教育学研究科）

企画趣旨

本企画では、ライブでのデータセッションを通して、データ分析を学び合う質的研究コミュニティがいかにより可能であるか、そこにはどのような意義や課題があるのかについて検討する。質的研究は単独で学びを深めるのは難しい。とりわけ近年広がりを見せるディスコース分析的なアプローチではその傾向が強い。そのため、コミュニティベースで研鑽を積むことが欠かせないが、質的研究コミュニティの成立には様々な条件が必要となる。そこで本企画では 15 年近く継続的に開催されている東京ディスコース研究会での実践をデモンストレーションとともに示し、持続可能な質的研究コミュニティの条件や課題について検討する。

話題提供 1：司会者として考えていること（鈴木聡志）

話題提供者は東京ディスコース研究会のデータセッションの司会をほぼ毎回務めている。研究会が始まってから数回の試行錯誤を経て、2 時間のデータセッションは次のような流れになった。(1) 自己紹介、(2) 発表者による研究の背景・目的・方法の説明、(3) 発表者への質問と応答、(4) データ提示と参加者によるデータの解釈、(5) 次回の日時等の確認。司会者として心がけていることは、参加者がどのような意見でも言えて、どのような意見を言っても批判されない雰囲気をつくることである。こうすることで、参加者に新しいアイデアが浮かぶことと、参加者にとってストレスフルな場にならないことを期待している。

話題提供 2：成人後の子どもが捉える親の「力」（岩根由佳）

精神疾患を抱える親に育てられた子どもは、症状に振り回される等、幼少期から成人後も親の精神疾患の影響を受け続けるとされる。だが、働き始めたことや自らも親となることを通して親に感謝や尊敬の念を抱くなど、力がないと思われていた精神疾患を抱える親の力や強さに、成人したからこそ気付く可能性がある。そうした成人後の子どもが捉える親の「力」を探索的

に検討するため、記述式アンケートを実施した。本発表では、アンケートで得られたデータを
示し、成人後の子どもが捉える親の「力」を分析、検討いただく。

**話題提供 3：データセッション（綾城初穂・岩根由佳・大橋靖史・鈴木聡志・太齋
慧・能智正博）**

東京ディスコース研究会で行われているデータセッションの具体例をライブ形式で示すため、
話題提供 2 で示されたデータに、東京ディスコース研究会のメンバー 6 名がその場で分析を加
えて分かち合う。このライブセッションを踏まえて、指定討論者 2 名が質的研究コミュニティ
の可能性や意義、課題について検討を加える。

Invitation to a Data Session:

A Practice at the Tokyo Discourse Kenkyukai (TDK)

Hatsuho Ayashiro (Komazawa Women's University), Moderator

Masahiro Nochi (The University of Tokyo), Presenting Author

Satoshi Suzuki (Tokyo University of Agriculture), Presenting Author

Yasushi Ohashi (Shukutoku University), Presenting Author

Yuka Iwane (Ochanomizu University), Presenting Author

Kei Dazai (The University of Tokyo), Presenting Author

Kenji Kawano (Ritsumeikan University), Discussant

Ichiro Yatsuzuka (Kumamoto University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 3	10 月 18 日（土）	9:30-11:30	L 棟 107
--------------	--------------	------------	---------

AI が質的研究をどう変えていくか

—その③—

企画・話題提供・司会：薛海升（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供：豊田隼（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）

話題提供：稲田真子（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供：中田友貴（立命館大学総合心理学部）

指定討論：檜田美雄（摂南大学現代社会学科）

指定討論：尾見康博（山梨大学大学院総合研究部）

企画趣旨

本企画は、2023 年大会および 2024 年大会に引き続き、AI が質的研究にもたらす影響と今後の応用可能性に焦点を当てるものである。昨年度は、文字情報だけでなく音声や画像も扱えるマルチモーダルモデルが注目を集めたが、本年度は、タスクを自律的に遂行する AI エージェントが新たなホットトピックとなっている。質的研究に携わる研究者は、AI の急速な進化に対し、期待と高揚の一方で、戸惑い・疑念・不信感、さらには恐れまで、実に多層的な感情を抱いていることだろう。本企画では、質的研究における AI の活用について批判的に概観するとともに、実際の研究事例を提示し、今後の質的研究のあり方について議論を深めたい。

話題提供 1：AI × 質的研究をめぐる批判的展望（薛海升）

AI 領域の最新動向を踏まえ、質的研究における AI 活用の現状と課題を概観する。アイデアの着想から、データ収集・分析、さらには論文執筆に至るまで、AI 技術の導入は加速しており、それに伴う研究者の役割や技能の位置づけも変化しつつある。AI への受容度やリテラシーの差異によって、その活用のスタイルや意味づけも大きく分かれるだろう。現時点では、仮説の生成やデータ処理の自動化といった「効率化」が主な目的となっている。ここでは、既存の方法論の単なる延長線としてではなく、AI を研究者の思考プロセスに深く絡めた、より創造的かつ内省的な活用のあり方を提案したい。

話題提供 2：AI × 質的研究の活用実践例：実証主義 vs 構成主義（豊田隼・稲田真子）

質的研究における AI 活用の中でも、特に注目を集めているテーマの一つが、データ分析の自動化である。こうした取り組みは、AI 研究領域における「human out of the loop（人間を介在させない）」という概念と深く関わっている。すなわち、質的データの分析におけるワークフローから可能な限り人間の介入を排除し、AI にその大半の役割を委ねることを目指す（ポスト）実証主義的なアプローチである。本発表では、具体例を紹介しつつ、その利点と限界点について批判的に考察する。

さらに、対照的なアプローチとして、「human in the loop（人間の関与が不可欠）」の観点から、AI を研究者の思考プロセスに深く絡めるような、より創造的かつ内省的な活用法の探索も試みる。単なる自動化のツールではなく、AI を研究の営みにおける対話的な思考のパートナー

ーと位置づけることで、構成主義的な質的研究の実践に新たな可能性を拓く視座を提示したい。

話題提供 3 : AI × 質的研究の活用実践例 : インタビュー実施 (中田友貴)

質的研究においては、データ分析側の AI/LLM 活用が急速に進む一方で、データ取得-とくにインタビューという生成的対話の場面-への LLM 導入はまだ限定的で、かつ人間の介在を前提としたハイブリッド運用が大半を占めている。完全自律的な LLM インタビューには、一貫性の欠如、意図と出力の乖離、文脈の誤読や深掘りの偏り、被インタビュー者との双方向的意味構築の弱さなど、多層的な課題が横たわる。本報告ではまず、先行研究における LLM インタビューの設計をプロンプト観点からレビューを行う。次に、これらの課題への対応として LLM の二重構造を説明し、得られたインタビュー結果を基に、LLM を用いた研究の自動化についての知見を示したい。

Title of symposium:

How AI will change qualitative research: Part 3

Haisheng Xue (Graduate School of Education, The University of Tokyo),
Planner/Moderator/Presenting Author

Hayato Toyoda (Graduate School of Education, The University of Tokyo / Japan
Society for the Promotion of Science), Presenting Author

Mako Inada (Graduate School of Education, The University of Tokyo), Presenting
Author

Yuki Inoue Nakata (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University),
Presenting Author

Yoshio Kashida (Faculty of Contemporary Sociology, Setsunan University),
Discussant

Yasuhiro Omi (Graduate Faculty of Interdisciplinary Research, University of
Yamanashi), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 4	10 月 18 日 (土)	15:30-17:30	L 棟 102
--------------	---------------	-------------	---------

現象学的研究成果と実践者との架橋

－実践可能性と困難さ－

- 企 画： 栩川綾子（日本赤十字豊田看護大学看護学部）
坂井志織（東京都立大学健康福祉学部）
小林道太郎（大阪医科薬科大学看護学部）
- 司 会： 坂井志織（東京都立大学健康福祉学部）
- 話題提供： 栩川綾子（日本赤十字豊田看護大学看護学部）
- 話題提供： 藤ノ井鴻介（京都大学医学部附属病院）
- 話題提供： 松下はるゑ（看護師）
- 指定討論： 小林道太郎（大阪医科薬科大学看護学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、現象学的研究のような一事例の質的研究の成果がどのように実践につながるかを考える。心理学や教育学など数量的研究が高く評価される他の分野と同様、科学的実践を目指す看護・ケア領域でも、一事例の質的研究はエビデンスレベルが低いとされ、信頼性が低く見積もられる。我々は、文脈性のある現象学的研究はそれを読む実践家の看護の意味を更新することができ、実践の変容に繋がると考えている。そこで、実践家が現象学的研究を読むということがどのような経験であったか、その後実践がどのように変化したかについて、実践家を含めた3名から話題提供する。哲学を専門とする指定討論者から意見を述べた後、フロアへ議論を開き、現象学的研究成果と実践者との架橋について考える。

話題提供1：質的研究に馴染みがない看護実践家が現象学的研究を読む経験 （栩川綾子）

我々研究チームは、現象学的研究成果を実装化する試みとして、それらの論文が看護実践家にどのように読まれうるかを明らかにすることに取り組んだ。3名の専門看護師に現象学的研究論文を読んでもらって論文著者を含めた研究者らとのグループインタビューを行い、現象学的研究方法で分析した。参加者たちは、結果で描かれた状況を自分なりに解釈し、それまでに出会った患者を想起するなど、それらが臨床にかかわりうる文脈を含んだ結果であることを評価していた。科学的な実践を目指すのであれば一般化されていない研究結果は実践の根拠になり得ないという参加者の意見を契機に、新たな側面から患者を理解することを促された参加者は、研究結果が様々な解釈されることで新たな実践が生まれることを指摘した。参加者は、現象学的研究が看護実践を支える根拠となる可能性を示唆していた。

話題提供2：研究参加者の立場から感じた質的研究の看護実践への可能性 （藤ノ井鴻介）

研究参加者という立場で2本の現象学的研究を読み、精神看護専門看護師として次の三点に可能性を感じた。まず、趣味や生活で大事にしていることが詳細に分かることで、生きる希望や強みを見つける糸口になる点である。また、生の語りが論文中にあることで、語りのトーンからその人の生き方のスタイルが見えることも、相手を理解することに繋がると言える。二点

目は、多忙な臨床では難しくなっている患者の話をじっくり丁寧に聞くことの意義に気づかされた点である。論文であっても生の体験を聞くことは、看護師に多くの刺激をもたらし、多様な気づきを得る可能性があるだろう。三点目は多様な看護師を育てることに繋がる点である。画一的で機械的な看護はなく、このような論文に触れることにより地域で病と共に生きることについて、自身の実践だけでは体験できない語りを吟味でき多様な看護の創出の一助になると考える。

話題提供 3：現象学的語りを踏まえた訪問看護教育の実践（松下はるゑ）

話題提供 2 の筆者と同じく、私も訪問看護師として本研究に協力し、論文を読み解きながらグループディスカッションに加わった。現象学的実践に繋がる現象学的ケアモデルのテーマには、「ずっと」「だからその分」などの表現が含まれており、患者の経験には時間の積み重ねがあることが示唆されている点に着目した。研究参加後の実践では、こうした気づきを踏まえ、訪問看護の現場で新人教育を行う際、1 回 1 回の訪問ケアが患者の経験の全体を形づくっていくことを、新人自身が肌で実感できるように働きかけることを心がけた。そのために、訪問看護師である私自身が、「今、この瞬間に患者とともにある」ことのなかに、積み重なる時間の意味や、数か月後に立ち現れる変化を見据えて、その現象を言葉にし、新人看護師に伝えるよう心がけた。その結果、新人看護師が患者の視点に立ち、全体像を捉えた看護を提供できるようになったことを報告したい。

Bridging Phenomenological Research and Professional

Practice: -Possibilities and Challenges

Shiori Sakai (Tokyo Metropolitan University), Moderator

Ayako Tochikawa (Japanese Red Cross Toyota College of Nursing), Presenting Author

Kosuke Fujinoi (Kyoto University Hospital), Presenting Author

Harue Matsushita (Nurse), Presenting Author

Michitaro Kobayashi (Osaka Medical and Pharmaceutical University), Discussant

ABR で「土地の力」を描き出す

—映像とその制作プロセスの探求—

企画・司会・映像制作：村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

映像制作およびパネリスト：

安斎聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学部）

伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

小木貢（東京大学産学協創部）

河野暁子（岩手県立大学宮古短期大学部・立命館大学大学院）

薛海升（東京大学大学院教育学研究科）

企画趣旨

企画者は、東日本大震災以後、それぞれの土地に根差した力が復興を支えていることを実感し、「土地の力」と名づけた（村本, 2022）。災厄のなかで人々を支えたのはコレクティブな「土地の力」だった。コレクティブとは、明確な境界や固定された構造を持たず、共通の実践・記憶・感情・イメージなどを媒介に形成される流動的な集合体であり、人々が相互に交差・共鳴するなかで「私たち意識」が立ち上がる。意図的な参加だけでなく、慣習や身体的実践、感情の同調を通じた無意識的共有をも含むものである。

「土地の力」とは、地形・自然環境・歴史を持つ土地に根差した記憶・身体的実践が共有・継承されることによって、苦難の中から新たな意味や文化的創造を生み出す力動的な関係性の総体である。大災害など断絶的出来事を契機に、看過されていた土地の声、先人の知恵、民話的世界観が想起され、人と人、人と自然、人と死者とのつながりが再構築されていた。「土地」は受動的な背景ではなく、人々とともに語り、癒し、創造を担うコレクティブな主体として捉えることができる。

近代化に伴い人類は土着を喪失し、心理学もそれを排除し、人類を抽象化してきたと言える。分離独立した個人でなく、自然・文化・歴史の中に含まれる人々をホリスティックに描き出す質的心理学の可能性に期待し、登壇者らは、過去7年にわたり、「土地の力」を鍵概念にしたシンポジウムを開催してきた。「土地の力」を言語のみで定義することに限界を感じ、アートにも眼を向け、映画を用いた議論も行ってきた。昨年は、ショートビデオ・エスノグラフィーとして、メンバーが「土地の力」を感じる場面を切り取ったショートビデオをポリフォニックに再構成したものを提示し、参加者との共有、および概念化を試みた。

今回は、そこからさらに一歩進め、メンバーが「土地の力」を感じる場面を切り取ったビデオクリップを集め、それらを統合する形で、「土地の力」を描き出す短い映像作品を制作する。シンポジウムでは、映像とともに、この制作過程についてもオーディエンスに提示し、「土地の力」についての想像を膨らませる試みを行う。アート・ベース・リサーチ (Art-Based Research、以下 ABR) は、「創造的なアートの考え方を研究文脈に用いる、知識構築のための領域横断的アプローチ」（Leavy, P., 2018）であり、視覚芸術、パフォーマンス、音楽、文学などの芸術表現

を研究手法として用い、オーディエンスの共感を促進させながら進行する。ABR は新しい考えや物語、イメージを人々に提示し、社会的な意識の向上のために使うことができるとされる。

本シンポジウムにおいては、映像を共有しながら「土地の力」を検討するとともに、身体感覚や感情をも含めて参加者が交流し、土地との関係や土着性を取り戻していくことをも狙っている。「土地の力」を描き出すとともに、研究方法についても議論したい。

文献：Leavy, P. (2018). Introduction to Arts-Based Research. In Leavy, P. (Ed), Handbook of Arts-Based Research. The Guilford Press. (『アートベース・リサーチ・ハンドブック』岸磨貴子ら監訳、福村出版、2024)

村本邦子編著 (2022) 『災厄を生きる一物語と土地の力』国書刊行会

Depicting “the power of land” through ABR

— An exploration of the film and its production process —

Kuniko Muramoto (Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University)

Planner, moderator, video producer

Akiko Anzai (College of Community Studies, Aoyama Gakuin University), video producer, panelist

Tetsuji Ito (Faculty of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University), video producer, panelist

Mitsugu Koboku (Division of University Corporate Relations, the University of Tokyo)

Akiko Kono (Miyako Junior College, Iwate Prefectural University; Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University), video producer, panelist

Haisheng Xue (Graduate School of Education, University of Tokyo), video producer, panelist

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 6	10 月 18 日 (土)	15:30-17:30	L 棟 107
--------------	---------------	-------------	---------

技術と人間が織りなす「学び」を質的に探究する

生成 AI、ロボット、スマートフォンを例に

企画・司会・話題提供： 水上拓哉（新潟大学）
話題提供： 布施陽太郎（富山県立大学）
話題提供： 大家慎也（久留米工業高等専門学校）
話題提供： 呉文慧（神戸大学）

企画趣旨

生成 AI やロボット、スマートフォンといった情報技術は、私たちの「学び」のあり方を問い直すものでもある。これらの技術が伝統的な「学び」にもたらすポジティブ / ネガティブな影響についてはすでに議論されているが、本企画では、その「学び」自体が技術と人間との相互作用の中で再定義される可能性を考える。各話題提供者の専門分野から「技術と人間が織りなす学び」の多様なあり方の具体例を示し、当事者の内面的な変化をとらえるための手段として質的アプローチがもたらす可能性を考える。これからの教育や研究における「学び」の新たな地平を切り拓く、その契機を創り出すことが本企画の最終目標である。

話題提供 1：生成 AI は大学生の「主体性」を損なうものなのか？

—関係的技術哲学とナラティブインタビューによる検討—（水上拓哉）

高等教育において生成 AI が急速に普及する中で、学生の「主体性」が損なわれてしまうのではないか、という懸念がある。しかし、最近の技術哲学では、技術・人間の二項対立は批判され、「主体」は技術と人間のハイブリッドな構成として理解されている。本発表では、生成 AI を学びに活用する大学生にナラティブインタビューを行い、彼らが生成 AI にどのような意味を見出し、自己の学びと調和させているかを分析する。これにより、これまで哲学的な概念であった「ハイブリッドな行為主体性」をより具体的な文脈において検証し、この新しい「主体性」がこれからの高等教育にとっていかなる意味をもちうるのかを考える。

話題提供 2：「ロボットから学ぶ人たち」という解釈は実験シナリオ内で成り立つか？（布施陽太郎）

本話題提供者はロボットが人の意見に同調することやその社会的影響、人とロボットが形成する暗黙の了解をテーマに研究を進めてきた。その結果、複数のロボットと 1 名の人によって形成された暗黙の了解が集団内のその人の振舞いや考えに社会的影響を与えることを定量的なデータを基に明らかにした。しかし、ここで新たな疑問が生まれる。その集団実験において、ロボットはモノとしてみなされたのだろうか。それとも社会的存在や集団成員としてみなされたのだろうか。ロボットの社会的影響の探究は定量的なデータに落とし込める範囲の現象に基づく傾向があり、参加者の内心など定量化されにくい対象が取りこぼされる。そこで、「学び」という観点から本話題提供者が過去に実施した実験そのものを捉え直す。具体的には、実験シ

ナリオにおいて人がロボットから「学び」を得た可能性を見出すことを通じ、質的アプローチを実施する可能性について論じることを試みる。

話題提供 3：自分を学ぶ—スマホを使う学生のためのサイボーグ・メディテーション—（大家慎也）

本話題提供では、技術哲学の観点から、「サイボーグ・メディテーション」という教育的実践を提案する。この実践は、ひと（たとえば学生）と技術（たとえばスマートフォン）が組み合わさった生活スタイル・生き方を「サイボーグ」と呼んだうえで、この生活スタイル・生き方にたいして、自身が自覚的になり、それを反省的に再構成する（「メディテーション」）ような学びの実践である。具体的には、この実践は、「自分がスマホをどのように使っているか自覚的になってみる」「どんな自分になりたいか考えてみる」というものである。この実践は、教育実践としては、情報リテラシー涵養の意義がある。また工学分野においては Human-Computer Interaction 研究に新たな観点をもたらす意義がある。

話題提供 4：「AI に教える」社会科授業作りのアクション・リサーチ（呉文慧）

GIGA スクール構想以降、教育現場では ICT 教材の導入が加速し、教師と ICT 教材の関係が問われている。本研究は、技術哲学におけるポスト現象学の立場から、技術によって教師の在り方が変容することを自覚し、その上で技術に能動的に関わる「関係的自由」を構築することを目指した。具体的には、教師と教育学・教育工学の専門家たちが「構成的技術アセスメント」という対話的プロセスを通じて、生成 AI（ChatGPT）を活用した中学校社会科の授業を共同で設計した。そして不適切な発言をする AI をあらかじめ用意し、生徒が資料をもとに「AI に教える」ことで、また「AI が学ぶ」中で修正を試みる授業を実施した。考察では、教師や生徒が技術との間にとりうる関係を実践的に示す。

Qualitative Explorations of "Learning" Woven by Technology and Humans

Takuya Mizukami (Niigata University), Moderator, Presenting Author

Yotaro Fuse (Toyama Prefectural University), Presenting Author

Shinya Oie (National Institute of Technology, Kurume College), Presenting Author

Bunkei Kure (Kobe University), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 7	10 月 18 日（土）	15:30-17:30	L 棟 109
--------------	--------------	-------------	---------

慧眼か凡眼か、見識か不見識か、その狭間を葛藤とともに歩む

企 画： 本 山 方 子（白梅学園大学 子ども学部）
横 山 草 介（東京都市大学 人間科学部）
司 会： 本 山 方 子（白梅学園大学 子ども学部）
話題提供： 横 山 草 介（東京都市大学 人間科学部）
話題提供： ハッ塚 一郎（熊本大学大学院 教育学研究科）
話題提供： 木 下 寛 子（九州大学大学院 人間環境学研究院）

企画趣旨

質的研究の担い手は、人々の生きる現場に自らもまた一人の参与者や当事者として身をおき、そこで生じる出来事に出あい、それを記録し、「事実」を採集する。そして、記録を持ち帰り、当の出来事の含意が何たるかを検討し、説明しようとする。だが、それらの検討や解釈、説明は、研究者の本拠となるコミュニティにおいては「慧眼」や「見識」と目されたとしても、調査された当事者のコミュニティにおいてはときに「凡眼」や「不見識」と目されることもある。このことは、時に共約可能性の問題として、あるいは、研究の遂行に伴う陥穽として、既に様々に指摘されてきたところである。

こうして質的研究の担い手は、本拠となるコミュニティにおける「慧眼」「見識」の誉れと、当事者のコミュニティにおける「凡眼」「不見識」の誹りの狭間に身を置き、その渦中においてしばしば葛藤に苛まれながら、それでもなお学究に臨もうとする。むろん、学究の遂行においては「慧眼」と「凡眼」の整合的和平が志向され得る。

だが、ここで言う整合的和平は言うほど容易いことではない。というのも、質的研究の担い手が施す解釈や概念化は、必ずしも、普遍的な了解可能性に開かれているわけではないからである。研究がフィールドにおいて出あわれた諸種の事象や出来事の垂れ流しでは終わらない以上、そこには研究の担い手によって洞察され、価値づけられた飛躍や推論が否応なく紛れ込むことになる。むしろ、この飛躍や推論に「慧眼」の緒があると言ってもよい。そうなれば「慧眼」や「見識」、「凡眼」や「不見識」とは、フィールドにおいて出あわれた出来事を参照点として立ち上がる、複数の現実の葛藤の所産に他ならない。

この葛藤に向き合うとき、深淵なる人間の理解に向けて質的研究の担い手がなすべき努力とは一体どのようなものなのだろうか。本シンポジウムでは、こうした主題について登壇者の話題提供を糸口にラウンドテーブル形式で議論を重ねたい。

話題提供 1 極限の受容可能性に向けた世界制作の隘路（横山草介）

ネルソン・グッドマン（1978/2008）は『世界制作の方法』において、我々が現実として認識している世界は、すべて先行する何らかの世界についての認識のバージョンから作られたものであると主張した。世界の複数性を明言するこの主張は、際限ない相対主義を唱導する主張と

して矢面に立たされる。彼はこの指摘に、世界制作における正しいバージョンとそうでないバージョンとの精査は、世界の基底に仮定される「真なるもの」との照合によって検討されるものではなく、世界についての複数のバージョン間に生じる折衝が到達し得る「極限の受容可能性」によって吟味されるという。重要なことは、制作されたバージョンのいずれかが「真」で、いずれかが「偽」であるということはない、ということである。では、「極限の受容可能性」に向けて我々になし得る努力とは一体なんなのだろうか。

話題提供 2 いじめ第三者調査委員会の活動経験から（ハッ塚一郎）

研究者とフィールドの葛藤という問題を、社会的実践の一例を通して捉え直してみたい。いじめの集団力学的研究を契機に、学識経験者なる枠で公的な調査にも呼ばれるようになった。しかし、複雑を極める深刻な事案の前では、少々の知識は役に立たず慧眼にはほど遠い。行政が求めるのも大学教員という肩書きの虚飾で、臨床家や法律家の実務的能力のほうがよほど有益と痛感させられることも多い。その一方、ご遺族はじめ関係者の語りに耳を傾け、時にメディアの物語化圧力を体感しつつ対外的な説明を行う中では、理論的に物事を捉えようとする研究者としての姿勢こそが自分の支えとなってきたようにも思える。異質な言説の領域を絶えず往還してむしろ能動的に葛藤し、身体を張って多様な言説発信を試みることにこそ、研究活動の使命と本質もあるのではないだろうか。

話題提供 3 小学校の日々から自由にものを考え-表現すること（木下寛子）

今いる場所（フィールド）で見出した問うべきことを、基本的なところから徹底的に、かつ自由に考える過程に、それぞれの場所・世界での葛藤も骨折りも生じるのだと考えたい。発表者は2001年から週1日ある小学校で過ごし、その経験を通じて教室の「雰囲気」や地域性・風土を問い、それに必要な道筋・方法を求めてきた。その過程で決して踏み外してはならないのは、先生・子ども達が生きる小学校の日々を共にする者としての「恥ずかしくない生き方」（斎藤、1997）だった。その結果、仮に自らの在り方や物の見方も変わり、問うべきことへの関わりが学問の規範から外れるとしても、堅持すべき事柄を堅持するために、学問の在り方を問い直すことも含めて、成り行きを丸ごと引き受けるしかない。現場から問う学問が、人が生きることや世界に資するものになる契機はそこにある。

Walking with conflict between the wisdom and the pretense

Masako Motoyama (Shiraume Gakuen University), Moderator, Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator, Presenting Author

Ichiro Yatsuzuka (Kumamoto University), Presenting Author

Hiroko Kinoshita (Kyushu University), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 8	10 月 19 日（日）	9:30-11:30	L棟102
--------------	--------------	------------	-------

多元的な〈現実〉と質的研究をつなぐ

—ろう者・手話・コーダ・聾学校・聴覚障害の領域の研究から考える—

企画・司会： 中津真美（東京大学多様性包摂共創センター）
企画・話題提供： 中井好男（大阪大学大学院人間科学研究科）
企画・話題提供： 西垣正展（立命館大学大学院人間科学研究科）
企画・話題提供： 広津侑実子（東京都公立学校スクールカウンセラー）
指定討論： 能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

企画趣旨

質的研究にはものの考え方や世界の見方に、「多元的な〈現実〉を探る」という特徴がある（能智, 2023）。では、研究者が実際に多元的な〈現実〉の中で対象にどのように向き合い、対象が抱える本質やありようをつぶさにとらえてきたのか。この点から本シンポジウムでは、多元的なフィールドとしてろう者・手話・コーダ（Children of Deaf Adults）・聾学校など聴覚障害に関連している内容を取り上げる。この領域の研究はここ10年程「質的心理学研究」や大会において研究成果が発表されており（たとえば、三浦・川島・竹本, 2016；安藤・松本, 2018；勝谷, 2025 など）、質的研究に親和性があるのではないかと思われる。

当日は、まず質的研究者3名が話題提供をし、次いで質的研究の第一人者であり障害領域の研究や臨床の経験が深い能智正博先生と指定討論を行い、またフロアとも活発に議論していきたい。なお、ろう者や手話など聴覚障害に関わる予備知識を共有するために冒頭でショートレクチャーを行う。聴覚障害という多元的なフィールドにおける質的研究の展開について検討を深めていきたい。

話題提供1：ろう者と聴者の出会いの場の〈現実〉（広津侑実子；聴者）

ろう者と聴者とは互いに異なる文化や言語を持っており、両者が会う場には特有の相互作用が生じるだろう。本論文では、聴者の聴き手（広津）がろう者のAさんに行なった2回のインタビューを対象に、どのような相互作用の流れがあったか、語り手の表出する自己や聴き手の解釈枠組みなどがいかなるものであったかを会話分析で検討した。今回の発表では、具体的な対話事例をもとに、ろう者と聴者のコミュニケーションを促進させるための工夫や限界、そして“他者”との出会いの場での質的研究者の姿勢などについて報告する。

（広津侑実子・能智正博（2016）ろう者と聴者の出会いの場におけるコミュニケーションの方法——手話を用いたインタビューの会話分析から、質的心理学研究, 15(1), 124-141.）

話題提供2：コーダが内面化する聴覚障害の〈現実〉（中井好男；聴者）

コーダである中井は、語りえぬものだった親の聴覚障害にまつわる現実をソーダ（Siblings of Deaf Adults/Children）との対話を通して掘り起こし、言葉を与え、語れるものへと昇華させた。この自己物語の紡ぎ直しは、自身の課題を他責化するように出来事を両親の聴覚障害と

接続させながら記憶にのぼらせ、それぞれに意味づけするというものであった。コーダという概念は、語りえなかったことを聴覚障害に結びつけることで語れるようにし、そのストーリーを生き直すことを可能にした。聴者である私が内面化する聴覚障害の現実とは何なのか、また、その現実を生きることは聴者によって作り上げられてきた聴覚障害の現実の再構築に関わることにならないのか。自己との問いをもとに検討したい。

(中井好男・丸田健太郎 (2022) 音声日本語社会を生きるろう者家族の生きづらさ——見えないマイノリティによる当事者研究 質的心理学研究, 21(1), 91-109.)

話題提供 3：聾学校生徒が抱える「困りごと」の〈現実〉(西垣正展；ろう者)

社会生活においてきこえないことから生じる困難が社会的障壁に依拠していること、それにより「困りごと」が発生することを聴覚障害のある児童生徒は認知していない状況にある。そこで、聴覚障害のある教員の西垣がA聾学校中学部の自立活動で当事者研究の視点を援用した授業実践を行った。本研究では、聾学校生徒における「困りごと」をめぐる現状とその構成背景、授業実践による「困りごと」の認知経験で生徒にもたらされた態度や行動の変容について分析し、当事者研究の視点を援用した授業実践の教育的意義を考察した。その内容を報告しながら、当事者である生徒と教員が協働しながら取り組んだエピソードをつぶさに分析した実践研究が質的研究として展開できたことの意味について検討する。

(西垣正展 (2023) 聴覚障害当事者における「困りごと」の認知をめぐる聾学校の自立活動の授業実践——当事者研究の視点を援用して 質的心理学研究, 22(1), 225-243.)

Connecting Plural “Realities” and Qualitative Research:

Considering from research in the fields of Deaf, Sign Language, Coda, School for the Deaf, and Hearing Impairment

Mami Nakatsu (The University of Tokyo), Organizer & Moderator

Yoshio Nakai (The University of Osaka), Organizer & Presenting Author

Masanobu Nishigaki (Ritsumeikan University), Organizer & Presenting Author

Yumiko Hirotsu (Tokyo Metropolitan School), Organizer & Presenting Author

Masahiro Nochi (The University of Tokyo), Discussant

Language: Japanese, Japanese sign language

会員企画シンポジウム 9	10 月 19 日 (日)	9:30-11:30	L棟104
--------------	---------------	------------	-------

現象学的・エスノメソドロジー的研究方法と アクターネットワークセオリー・状況的学習論的な ものの見方

企画： 海老田大五朗（新潟青陵大学福祉心理子ども学部）
話題提供： 久保田裕斗（びわこ学院大学教育福祉学部）
話題提供： 呉文慧（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
話題提供： 平賀慧（東海大学スポーツプロモーションセンター）
指定討論： 岡部大介（東京都市大学メディア情報学部）
指定討論： 横山草介（東京都市大学人間科学部）

企画趣旨

本企画では、「障害のある人びとの学び」（あるいはより狭くは「特別支援教育」）を対象にする質的研究において「現象学的・エスノメソドロジー的研究方法が有効である、アクターネットワークセオリー・状況論的なものの見方が有効である」という主張は、どのようにして可能になるのかを議論する。

質的研究方法といってもバリエーションは豊富だが、本企画の登壇者は、（ポスト）現象学／エスノメソドロジー／アクターネットワークセオリー／状況的学習論と呼ばれるような学問的立ち位置をとる。それぞれの立ち位置はそれぞれ異なる主張をするわけだが、「人びとの実践を丁寧に観察し、記述する」という論文執筆スタイルは共有されているように思われるし、またとりわけ「障害のある人びとの学び」を対象にする質的研究においては、こうしたスタイルこそが重要なのではないかという点においては共有可能であろう。もしこうした想定が受け入れられるならば、次に問題になることこそ、こうした主張がいかんして可能かということを検討することだろう。実際に企画者と登壇者のうち一部は共同で『障害のある人びとの学びをデザインする』（学文社, 2025）を執筆し、「障害のある人びとの学び」の記述を試みている。本企画では自らの論文を解題しながら、残された宿題について開かれた議論をしていきたい。

話題提供1：道具、生活、場の共有（久保田裕斗）

本報告では、インクルーシブ教育の現場において、医療的ケア児がどのように学級活動に参加していたのかを示す。このことを通じて、学校の日常世界においてモノや道具がどのように相互行為を媒介しているかについての含意を引き出す。

当日は、地域の学校において障害児と健常児のそれぞれの生活形式が会うという意味で「生活の共有」が行われる場合、それは「場の共有」よりも「道具の共有」に依るところが大きいのではないかという観点から、「共に生きる」とはどのような状態を指すのかについて考えてみたい。

話題提供 2：現象学／ポスト現象学は特別支援教育の経験に迫れるか（呉文慧）

本報告では、自閉スペクトラム症（ASD）のある子どもと関わる教師の経験を探究する。教師は複雑な状況に暗黙的な知を用いながら対応しているが、そうした日常的な経験は見過ごされがちである。本報告では、教師の語りを詳細に分析する現象学的アプローチを用いて、その経験に迫ることを目指す。また、モノや技術といった非人間が人間の経験を媒介すると考えるポスト現象学の導入についても検討する。極めて多様な非人間が日々活用されている特別支援教育の現場において、ポスト現象学の導入は教師の経験や教育実践の新たな解釈の地平を拓くだろう。

話題提供 3：運動実践における場の成立と個人の学び（平賀慧）

本報告では、特別支援学校における運動実践において、教員たちが「集団の場」を成立させることと「個人の学び」をいかに両立させようとしてきたのかについて考察する。ハンドサッカーの実践を手がかりに、肢体不自由特別支援学校に通う子どもたちにおける「スポーツ」への参与のあり方を示す。また、実践者たちは、子ども自身の身体を拡張するようなモノや道具をどのように捉え、それをもとにルールをいかに変容させているのかを検討する。こうした経験の記述を通じて、多様な人とモノとの相互行為のあり方について考察を深めたい。

Phenomenological-Ethnomethodological Research methods and Actor-Network Theory or Situated Learning Perspectives:

Daigoro Ebita (Niigata Seiryō University), Moderator

Kubota Hiroto (Biwako Gakuin University), Presenting Author

Bunnkei Kure (Kobe University Graduate School), Presenting Author

Hiraga Kei (Tokai University), Presenting Author

Daisuke Okabe (Tokyo City University), Discussant

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 10	10 月 19 日 (日)	9:30-11:30	L棟107
---------------	---------------	------------	-------

一つの経験を複数の方法で分析することの意義

－記号力学的文化心理学の方法論から方法へ－

- 企画・司会： 廣瀬 太介（立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 廣瀬 太介（立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 高井かおり（東亜大学人間科学部）
話題提供： 田口 友美（佐賀大学医学部/立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 上川多恵子（創価大学文学部）
指定討論： 尾見 康博（山梨大学大学院教育学域）

企画趣旨

記号力学的文化心理学に依拠する TEA（複線径路等至性アプローチ）は、TEM（複線径路等至性モデリング）、TLMG（発生の三層モデル）、HSI（歴史的構造化招待）という 3 つのコンポーネントからなるように、ライフ（生命・生活・人生）を異なる視点でとらえる志向を内包している。このような志向があるためか、TEA では、一つの経験を分析するのに、関係学、ライフストーリー、テキストマイニング、イメージーション理論など、TEA のコンポーネント以外の方法との融合がそれぞれの研究者の工夫によって試みられてきた。本シンポジウムでは、4 人の研究者がどのような方法論に基づいて複数の方法を選択し融合を試みているかを、それぞれが専門とする学範の訓練を積んだ研究者の直観を起点としてとらえ直すあり様を検討する。

話題提供 1：TEA と関係学の融合（廣瀬 太介）

臨床心理学を専門の学範とする発表者は、ひきこもり青年との心理面接の過程を事例研究として分析してきた。分析する際、関係学の分析枠組である関係構造と TEM、並びに関係学の分析枠組である起動点と TLMG というように、一つの事例を異なる方法を組み合わせて分析するトライアングレーションを試みてきた。複数の方法で分析しているとはいえ、一つの事例を複数の論文として投稿することは、サラミ問題として扱われる可能性が高い。それにも関わらず、発表者が直観的にこのような方法を選択した背景には、多様な心理療法の集合体でありつつ、多職種との連携・協働を求められる臨床心理学の訓練を積んできたことが影響しているように思われる。本発表では、発表者が臨床フィールドで感じてきた差異の経験と発表者が依拠する基本的な前提との交渉によって顕れてきたリサーチ・クエスチョンを起点として、データ、方法、理論を循環的に検討する方法論サイクルについて報告する。

話題提供 2：TEA とライフストーリーの融合（高井かおり）

発表者は、日本語教師のキャリア形成プロセスを明らかにするためにライフストーリー研究を行っていた。そして、初めての実践が海外だった新人日本語教師のライフストーリーに類似性を見出し、それを可視化するために TEA を用いようと考えた。TEA による分析を進めた結果、その類似性は TLMG を用いて、共通する内的変容プロセスの構造として明らかにすることができ

た。一方で、発表者は一人ひとりのキャリア形成プロセスは TEM で示すことができるにも関わらず、ライフストーリーとして描きたかった。ライフストーリーだからこそ示せることがあると考えたからである。本発表では、発表者が同じ事象を TEA とライフストーリー法という類似した 2 つの研究法で分析するに至る経緯と、その研究で TEA とライフストーリーがそれぞれ示しているのはどのようなことなのか考察する。

話題提供 3：テキストマイニングと TEM による分析（田口 友美）

本研究の目的は、地域共生社会の実現に向け、音楽を媒介とするアプローチの可能性をコミュニティ音楽療法の実践から探ることにある。コミュニティ音楽療法は、年齢や障害の有無にかかわらず、多様な人々が参加する開かれたセッションであり、その特性上、参加者の背景や人数も多岐にわたる。そこで、実践の全体像と個々の経験の双方を捉えるために、マクロとミクロの視点を組み合わせた分析を行った。まず、参加者の感想をテキストマイニングを用いて分析し、マクロの視点から全体的な傾向を明らかにした。次に、その分析結果をふまえ、ミクロの視点として、セッション中に参加者がどのように感じ、時間を過ごしていたのかを、TEM を用いて分析した。本発表では、これらの分析を通して、音楽を媒介としたコミュニティが参加者にとってどのような意味を持ちうるのか、また、コミュニティ音楽療法が地域共生社会において果たしうる役割とその可能性について考察する。

話題提供 4：TLMG とイマジネーション理論の融合（上川多恵子）

発表者は、日常生活における何気ない違和感や気づきをきっかけとした人々の異文化理解の軌跡について TEA を用いて研究してきた。発表者が初めて TLMG にイマジネーション理論を援用して分析を行ったのは、カフェでゼミ仲間と行ったランチミーティングで自分が普段は頼まない「たまごサンド」を注文したときの違和感に関し、自文化と周りから受ける影響について研究したときである。TLMG ではある出来事での記号を抽出し、さらにはその出来事が起こった際の信念・価値観を分析することができる。しかし、発表者がカフェで「たまごサンド」を選ぶという比較的短い時間での出来事において「どのようにそれを選んだのか」を分析するためには、その場で記号となったリソースに対する当事者の思考を分析する必要がある。このように、本発表では TLMG とイマジネーション理論を融合して分析するに至った経緯とともに、そこから発展しつつある分析方法の概要について紹介する。

The meaning of analyzing a single experience using multiple methods

—From methodology to methods in cultural psychology of semiotic dynamics—

Daisuke HIROSE (Ritsumeikan University), Moderator, Presenting Author

Kaori TAKAI (University of East Asia), Presenting Author

Tomomi TAGUCHI (Saga University/Ritsumeikan University), Presenting Author

Taeko KAMIKAWA (Soka University), Presenting Author

Yasuhiro OMI (University of Yamanashi), Discussant

会員企画シンポジウム 1 1	10 月 19 日 (日)	9:30-11:30	L棟109
----------------	---------------	------------	-------

TEMにおける時期区分の真正性向上

— 個体化理論に基づくクロスチェック表の実践的活用 —

企画・話題提供： 福山未智（立命館大学人間科学研究科）

企 画： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

話題提供： 高橋彩（岡山大学学術研究院教育学域）

話題提供： 鬼頭弥生（立命館大学人間科学研究科）

話題提供： 長谷川綾音（立命館大学人間科学研究科）

話題提供： 杉本菜月（立命館大学人間科学研究科）

指定討論： 上田敏文（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

企画趣旨

TEM（複線径路等至性モデリング）は記号論的文化心理学に基づく質的研究法であり，研究者の恣意性や主観性を管理するためのツールが組み込まれている。時期区分は，分岐点や必須通過点に基づいて人生径路を質的に意味のある時期に分割し，等至点に至るプロセスの各時期の特徴を明らかにするものであるが，これまで区分の真正性を確保する方法は十分に提案されてこなかった。そこで本シンポジウムでは，フランスの哲学者ジルベール・シモンドンの個体化理論を基に開発された「時期区分と個体化のクロスチェック表」を用いた研究実践を通じて，TEM 研究における時期区分の真正性向上について議論する。クロスチェック表は，時期区分ごとに前-個体化から個体化に至るプロセスを可視化し，研究者の恣意的判断を回避する新しい概念ツールである。コスプレ経験，障害児の父親の心理的プロセス，日本語非母語話児の適応過程，裁判員裁判，視覚障害者のゲーム体験という多様な研究領域での実践事例を通じて，クロスチェック表の有効性と発展可能性について検討する。

話題提供 1：コスプレ経験のプロセス：Auto-TEM を用いて（福山未智）

コスプレという遊びを楽しむコスプレイヤーの文化を総合的に描き出すため，筆頭企画者の13年間にわたるコスプレ経験をAuto-TEMとして分析した。シモンドンの個体化論を援用し，コスプレイヤーとして個体化していくプロセスを検討した結果，コスプレに対する目的は「他者評価」「道具の出来栄え」「自己満足」の次元で変化し続け，その目的達成のために個体化し続けることがコスプレの魅力であることが明らかとなった。本発表では，この研究過程で開発した時期区分と個体化のクロスチェック表について，その具体的な作成方法と分析における活用の実際を詳細に報告する。

話題提供 2：親の会で活動する父親の心理的プロセス（高橋彩）

障害のある子どもを育てる親は，子育ての過程の中で葛藤や模索を経験する。話題提供者の研究では，父親に焦点を当て，子どもの出生から成人になるまでの子育て経験を，TEAを使って描くことを試みた。障害のある子どもを育てた経験があり，親の会で活動する5名の父親へのインタビュー調査をもとに，語りの中に見られる心理的変化のプロセスを検討した。ライフラ

インインタビューメソッドを用いて、育児や親の会での経験を語ってもらい、得られた語りから TEM 図を作成した。その際、時期区分の仕方と真正性の検討にあたり、時期区分と個体化のクロスチェック表を使用した結果と、その使用感について報告する。

話題提供 3：クロスチェック表の活用による促進的記号の可視化（鬼頭弥生）

日本語非母語話児が、クラスでどのようにして自分らしくふるまえるようになっていくのか、そのプロセスを明らかにする研究において、日本語非母語話児の行動が駆り立てられる記号(促進的記号)を見出そうとした。クロスチェック表には、時期区分、前一個体化、活動、個体化の項目と併せて、研究者が自由に設定してよい欄も設けられている。この自由記述の欄に目的を設定することで、促進的記号を容易に見出すことが可能になった。時期区分の真正性の確保のみならず、クロスチェック表による可視化を通じて、研究者の恣意的な価値判断を回避し、当事者にとっての適切性を担保する効果が得られたことを報告する。

話題提供 4：裁判員裁判の評議における議論収束のプロセスの分析（杉本菜月）

裁判員裁判において犯罪事実の認定と刑の量定を行う評議では、法律の素人である裁判員と法律の専門家である裁判官が協働して判決を導き出すことが求められるが、裁判員と裁判官がどのように関わり合いながら議論を行なっているかに着目した研究はあまり多くない。本研究では、審理で示された様々な証拠に基づき、裁判員と裁判官が協働して犯罪事実の認定と評価を積み重ねていく評議プロセスに着目し、一つの議論が収束し、次の議題に移行する段階を「時期区分と個体化のクロスチェック表」によって検討する試みについて報告する。

話題提供 5：時期区分とクロスチェック表を用いた視覚障害者のビデオゲーム体験分析（長谷川綾音）

ビデオゲームは従来、視覚障害者にとって技術的障壁があるためにプレイが困難であると考えられてきたが、実際には娯楽としてビデオゲームを継続的に楽しむ視覚障害者も存在している。報告者はこうしたビデオゲームを現在も楽しんでいる視覚障害者を対象に、インタビューを実施し、TEM による分析を実施してきた。本報告では、さらに「時期区分と個体化のクロスチェック表」を活用した分析の取り組みを報告する。従来の TEM における時期区分に加え、クロスチェック表を導入することで、視覚障害者がゲーム体験において直面する困難の性質とその対処について整理することを試みた。これにより、研究協力者が個体化の状態から活動を経て、考え方や捉え方が変化し個体化に至る過程、さらにそれが次の前個体化状態にどう影響するかという連続的な変化を捉えることが可能になった。本発表では、クロスチェック表を実際に使用する過程で見えてきた本手法の可能性について、現在進行中の分析から得られた知見を交えて報告する。

コミュニティを変える力：

ー活動理論における Transformative agency 概念を手がかりにー

企画：保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）・

青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

話題提供：保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

話題提供：山下 香（甲南女子大学文学部）

話題提供：俣賀勇人（成城大学社会イノベーション研究科）・青山征彦

指定討論：川野健治（立命館大学総合心理学部）

指定討論：木下寛子（九州大学大学院人間環境学研究院）

企画趣旨

質的心理学は、さまざまなコミュニティに注目し、そこで行われている実践に関心を向けてきた。近年は、実践を外側から客観的に分析することを超えて、実践の内側に入り込んで、新たな実践をともに作り出す方向へと研究の在り方が変化しつつある。しかし、こうした協働的な在り方を考えるための理論や、実践を立ち上げていくための方法論は十分に用意されているとは言えないのが現状である。本企画では、近年、活動理論で注目されているトランスフォーマティブ・エージェンシー概念を手がかりにしながら、コミュニティやそこで行われている実践が葛藤や対立をきっかけに変化していくプロセスを描出してみたい。その上で、コミュニティの実践、さらにはコミュニティの変革に研究者がどのように関わっていくべきか、コミュニティを変えるための方法論について議論していきたい。

話題提供 1：ひとがつながる場で Transformative Agency について考えるー活動理論における Transformative Agency by Double Stimulation (TADS) 概念をもとに（保坂裕子）

第4世代の文化-歴史的活動理論(CHAT)は、社会実践の変革へ向けた動きをいかに協働で創出することができるのかを問う(Engeström, 1987, 2015)。実践に見いだされる諸矛盾をきっかけとして浮かび上がった課題を、どうすれば変革することができるのか。その変革へのきっかけ、あるいは変革へと向かわせる力動をもたらすものとして Sannino(2015)が提唱する Transformative Agency by Double Stimulation(TADS：二重刺激による変革的エージェンシー)のアイデアをもとに、困窮者支援実践の場におけるひとのつながりについて検討してみたい。発表者は、社会的なつながりが持てないことで困窮しているひとが、それ故により困窮していくという在り様をとらえ、「食」を通じて「つながる」ことを目指す社会実践の場で長期にわたり形成的介入を進めてきた。そこで得られたいくつかの事例をもとに、社会的支援制度につながるができずに困窮している具体的状況に矛盾を見出し、それに根差した地域社会変革の可能性について、TADS をもとに議論したい。

話題提供 2：知識・技能を他者と共有する場づくりを通じた transformative agency の発揮—趣味活動における実践を通して（山下 香）

本発表では、第4世代の文化-歴史的活動理論（CHAT）における中心概念である TADS（Transformative Agency by Double Stimulation：二重刺激による変革的主体性）の視点（Sannino, 2015）を用い、趣味の創作活動を通じて高齢女性が自身の知識や技能を他者や社会と共有し、場づくりに参画するプロセスを検討する。特に、Transformative Agency が発揮された場面やその要因に注目する。対象は、神戸市で「おかんアート」と呼ばれる手芸作品の展覧会を継続的に開催している高齢女性作家6名と発表者との実践である。当初は個人的な趣味として始まった創作が、展覧会やワークショップの企画・運営を通じて、知識や技能を他者と共有する実践へと発展し、社会的接続を生み出していった。こうした趣味的な創作行為が、いかにして主体的な社会参加へと転化する可能性を持つのか検討したい。

話題提供 3：不登校の意味を変革する—当事者の活動におけるエージェンシーに注目して（俣賀勇人・青山征彦）

不登校は増加傾向にあり、23年度には34万人（全児童生徒の3.76%）に達した。文部科学省は不登校を「社会的自立へのリスク」があるとしてネガティブに意味づけている。しかし不登校が急増している現状を考えると、こうしたネガティブな認識には限界があるように思われる。一方、不登校の当事者団体Fでは、メンバーの不登校経験を記事として発信する報道活動が行われており、こうした場で扱われる自他の経験および活動そのものを、あるメンバーは「希望」と意味づけた。この活動はネガティブに意味づけられる不登校をポジティブな意味に拓く可能性をもっていると考えられないだろうか。当事者がどのように経験の意味を捉え直し、団体Fという場の環境やアレンジメントがどのようにこの活動を達成させていたのか。また、いかに不登校を別様の可能性として拓くことができるのか。団体Fという場で生じた Transformative Agency を論じることを通じて、不登校の意味の変革を試みる。

What makes Community Change:

Based on the Concept of Transformative Agency in Activity Theory

HOSAKA, Yuko (University of Hyogo), Moderator, Presenting Author

AOYAMA, Masahiko (Seijo University), Moderator

YAMASHITA, Kaori (Konan Women's University), Presenting Author

MATAGA, Hayato & AOYAMA, Masahiko (Seijo University), Presenting Author

KAWANO, Kenji (Ritsumeikan University), Discussant

KINOSHITA, Hiroko (Kyushu University), Discussant

Language: Japanese

自然物を用いて複線径路を描く hana-TEM の発展可能性

ー保育・看護・教育領域での応用を考えるー

企画（司会）： 中本明世（甲南女子大学看護リハビリテーション学部）

話題提供： 土元哲平（立命館大学 OIC 総合研究機構）

話題提供： 上川多恵子（創価大学文学部）

話題提供： 加藤望（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）

話題提供： 中本明世（甲南女子大学看護リハビリテーション学部）

指定討論： 北出慶子（立命館大学文学部）

企画趣旨

登壇者らは、複線径路等至性モデリング（TEM）を活用し、花や石、貝といった自然物を用いた「hana-TEM ワークショップ」をこれまで 4 回開催してきた。TEM は、文化心理学に依拠した質的研究法である複線径路等至性アプローチ（TEA）の中核を成す研究手法である。hana-TEM は、TEM の基本的なスキームを活かしながら、言語にこだわらずに人生径路の曖昧さや複雑さを、花を中心とした自然物を用いて豊かに表現することを目指したものである。このワークショップを通して、参加者は人生径路を表現することにより自分を癒しつつ、他の研究者とも交流をしてきた。hana-TEM という方法を提案することで、TEM がより日常生活で利用しやすくなるだけでなく、TEM が基本的に言語に依拠しているという理論的な課題を乗り越えることができる。また、hana-TEM は、セラピー的要素を含む研修会や自己を振り返るための手段として、臨床的に活用できる可能性を含んでいる。

そこで本企画では、hana-TEM について話題提供を行い、研究や実践にどのように活かしていくことができるか討議することによって、TEA のさらなる発展可能性についてフロアの皆さんとともに考えていきたい。

話題提供 1：hana-TEM について（土元・加藤）

始めに hana-TEM の背景にある、ヤーン・ヴァルシナーの文化心理学の考え方を中心に紹介しつつ、本実践の意義について論じていく。文化心理学では、「更一般化された記号領域」と呼ばれるような、時にその人の精神を圧倒し、未来を方向づける複雑で情感的な記号領域を理解するための方法論の開発が求められてきた。hana-TEM は、記号化の柔軟性を有する自然物を用いることで、このような記号領域を「曖昧」で「複雑」なまま表現することを許容するという点に方法論的な意義がある。

次に、異なる学問分野に属する研究者間の交流を目的に行われた hana-TEM ワークショップについて紹介する。ワークショップでは、個人で hana-TEM を作成した後に展覧会を行った。展覧会を通して、「観覧する」「解説する」という相互のやり取りのなかで自らの作品に対する思いが溢れ出し、熱気に包まれていた。このことから、hana-TEM が個々人の「更一般化された情感的な記号領域」を深め、それを他者に理解可能なかたちで表現する方法論としての可能性を持

つことが示唆された。

話題提供 2： 研究や実践への hana-TEM の活用（上川・中本）

hana-TEM の学術成果を二つ紹介する。一つ目は 2024 年 3 月発行の“hana-TEM：アートで描くわたしの径路”について、二つ目は 2024 年 10 月「第 6 回 TEA 国際集会」で発表した“hana-TEM: Exploring Life Trajectories Beyond Verbalization”についてである。前者は TEA と質的探究学会第 2 回大会で初めて開催した hana-TEM ワークショップの実践報告をまとめた論文であり、ワークショップの詳細を記述した。後者では登壇者ら 4 名がそれぞれ作成した hana-TEM の実践結果をもとに、言語化を超えた自己省察のプロセスについて考察している。

これまでの研究から、hana-TEM は、TEM のスキームを活かした文化心理学の新しい方法論としての発展可能性があるとし唆された。例えば、研究手法としてインタビューに活用することで、言語を媒介にしないからこそ得られるデータもあるであろう。また、研修会や自己表現のためのワークとしてなど、臨床的にも活用できる可能性がある。これまでの研究から得られた知見とともに、各学問分野における研究者間で討議することによって、hana-TEM の今後の展望と課題についてフロアの皆さんとともに考えていきたい。

The Developmental Potential of hana-TEM in Depicting Life Trajectories through Natural Objects

Focusing on applications in the fields of childcare, nursing, and education

Akiyo NAKAMOTO (Konan Women's University), Moderator, Presenting Author

Teppei TSUCHIMOTO (Ritsumeikan University), Presenting Author

Taeko KAMIKAWA (Soka University), Presenting Author

Nozomi KATO (Nagoya University of Arts and Sciences), Presenting Author

Keiko KITADE (Ritsumeikan University), Discussant

複線径路等至性アプローチ (TEA) と

Triple Gegenstand 理論の新たな接合可能性を探る

- 企画・話題提供： 田中千尋（帝京大学福岡医療技術学部）
司会： 山口恭平（帝京大学福岡医療技術学部）
話題提供： 宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）
話題提供： 小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）
話題提供： 矢野亜紀子（大分県立看護科学大学看護学部）
話題提供： 中田友貴（立命館大学総合心理学部）
指定討論： 尾見康博（山梨大学大学院教育学域）
香曾我部琢（宮城教育大学家庭科教育講座）

企画趣旨

企画者らは、複線経路等至性アプローチ (TEA) を用いたキャリア形成や吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達のプロセス、日本語教師の成長プロセス、といった変容プロセスの解明に努めてきた。今回、人がある文化をたずさえながらある文化へと移行する経験や、既存の実践に問いを投げかけ、境界を越えて挑戦し、新しい実践を紡ぎ出す「越境」の在りように鋭く迫るために、Triple Gegenstand 理論との接合可能性を探ってみたい。

Triple Gegenstand 理論とは、A: 人が何かに向かう動き、B: それに抵抗する動き、C: 境界との関係についての内省の3つの過程を分析するための理論である。Gegenstand とは壁象と訳され、行為と対象とが作り出す境界のことをさしており、前述した3つの過程を分析する視点は、TEA との親和性が高く、より対象の複線的で多様な越境的あり様を、社会や文化の影響を含めた時間経過のなかで解明することができる理論である。

ヤーン・ヴァルシナー (Jaan Valsiner) の基本的な考え方が体系的に記述された著作『An Invitation to Cultural Psychology (文化心理学への招待)』の監訳者や質的研究に造詣が深い指定討論者を迎え、今後の発展可能性について考察していきたい。

話題提供：Triple Gegenstand 理論と TEA 宮下

本発表では、Triple Gegenstand 理論と TEA の接合可能性について理論的検討を行う。複線的で多様な越境的あり様を、社会や文化の影響を含めた時間経過の中で解明する理論である点を、TEA が依拠するベルクソンの非可逆的時間概念との理論的接合点として着目する。

話題提供：小澤・矢野・中田・田中

話題提供者の小澤は、日本語教師のキャリアの発達に関する Auto-TEA 研究から、学会運営に深く関わるようになった中堅期以降に見られる分岐点を、Triple Gegenstand 理論とイメージネ

ーション理論により分析した結果を事例として報告する。年齢・経験を重ねる中で、本務だけでも多忙な大学日本語教師が無償の学会運営に従事し続ける行為は、葛藤が生じる度に、本務と学会運営とが同じ未来展望のもとに意味づけ直されることで維持されていた。矢野は、吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達のプロセスに関する研究から、新人看護師が入職後の低迷期から脱するきっかけとなった分岐点について、中田、田中は看護師の子育て経験や看護教員の力量形成プロセスにおける分岐点について報告する。

Exploring New Possibilities for the Integration of the Trajectory Equifinality Approach(TEA) and the Triple Gegenstand Theory

Chihiro Tanaka (Teikyo University Faculty of Fukuoka Medical Technology)
Organizer, Presenting Author

Kyohei Yamaguchi (Teikyo University Faculty of Fukuoka Medical Technology),
Moderator

Taiyo Miyashita (The Institute for Societal Values in Future Generations, The Japan Research Institute, Limited), Presenting Author

Ikumi Ozawa (International Christian University, College of Liberal Arts), Presenting Author

Akiko Yano (Oita University of Nursing and Health Sciences, Department of Community and Health Nursing), Presenting Author

Yuki Inoue Nakata (Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology), Presenting Author

Yasuhiro Omi (Graduate Faculty of Interdisciplinary Research), Discussant

Taku Kousokabe (Miyagi University of Education), Discussant

「居場所」の意義と多様性

ー多文化社会における架橋としてー

企 画 :	鈴木一代	(埼玉純真短期大学)
	有川友子	(大阪大学国際機構)
司 会 :	鈴木一代	(埼玉純真短期大学)
	有川友子	(大阪大学国際機構)
話題提供 :	鈴木一代	(埼玉純真短期大学)
話題提供 :	吹原 豊	(福岡女子大学国際文理学部)
話題提供 :	有川友子	(大阪大学国際機構)
指定討論 :	手塚千鶴子	(元慶應義塾大学)
指定討論 :	稲田素子	(立教大学文学部)

企画趣旨

多様な内容を包括し、文脈によって微妙に意味が異なる「居場所 (Ibasho)」は、日本固有の概念であるとされる。しかしながら、「居場所」は日本人に限らず、すべての人にとって必要不可欠なものである。とりわけホスト社会においてマイノリティとして生活する多文化背景をもつ人々にとっては、「居場所」の存在が well-being やアイデンティティと深く関係している (Suzuki et al., 2022 など)。

「居場所」をめぐるのは、その内容や種類、構造、意味づけなどに関する多くの研究が蓄積されてきた。近年では、SNS などのオンライン (サイバー) 空間が加わることによって、「居場所」のあり方自体が時代とともに変容している。また、「居場所」は他者とのつながりの中に見出される社会的な空間であると同時に、ひとりで安心できる内面的な場として捉えられることもある。

本シンポジウムでは、文化が交差するなかで生活する多文化背景をもつ人々に焦点をあて、「居場所」という概念を、多文化社会における“架橋”の視点から捉え、心理学、日本語教育、教育人類学、異文化間教育という学際的なアプローチを通じて、その意義と多様性を検討するとともに、「居場所」の構築や支援のあり方についても議論を深めたい。

話題提供 1 : 日系人と居場所 (鈴木一代)

両親の文化が異なることで、幼少期から多文化環境で育つ日系人の「居場所」について検討する。1990 年代から、インドネシアで、文化人類学的-臨床心理学的アプローチ (鈴木・藤原, 1991) により実施してきた、インドネシア人と日本人の親をもつ日系インドネシア人を対象とする縦断的研究を中心に、環境の変化や時間の経過をふまえつつ、複数の文化背景をもつ日系人にとっての「居場所」をめぐる、異文化間心理学の視点から考察する。

話題提供 2：移民コミュニティ成員にとっての居場所（吹原豊）

本発表では移民コミュニティ成員にとっての居場所について検討する。発表者がフィールドとしているインドネシア人コミュニティの成員にとっては、職場と移民コミュニティが居場所になっているが、なかでも言語文化の壁がなく、より十全的参加が可能な後者が居場所であるといえる。そのような現状と、近年居場所としての機能を果たしつつある地域日本語教室の役割について、フィールドワークの成果をふまえて考察したい。

話題提供 3：留学生と居場所（有川友子）

本発表では教育人類学の立場から留学生と居場所について検討する。まず、日本の A 大学のインドネシア人留学生を対象とした 1991－1992 年（約 1 年間）のフィールドワークをベースに、当時の留学生の立場からどのような居場所があったか、次に通信を含む環境が大きく変化した今日において、大学関係者の立場から留学生の居場所について明らかにし、時代や環境の変化、異なる立場等、多様な観点から留学生と居場所について考察する。

The Significance and Diversity of 'Ibasho'

As a Bridge in a Multicultural Society"

Kazuyo Suzuki (Saitama Junshin College), Moderator

Tomoko Arikawa (The University of Osaka), Moderator

Kazuyo Suzuki (Saitama Junshin College), Presenting Author

Yutaka Fukihara (Fukuoka Women's University), Presenting Author

Tomoko Arikawa (The University of Osaka), Presenting Author

Chizuko Tezuka (Formerly Keio University), Discussant

Motoko Inada (Rikkyo University), Discussant

(Language: Japanese)

参与構造を軸にしたメディアの相互行為分析

企画： 高梨 克也（滋賀県立大学人間文化学部）
話題提供： 細馬 宏通（早稲田大学文化構想学部）
話題提供： 高梨 克也（滋賀県立大学人間文化学部）
話題提供： 大山 星馬（青山学院大学大学院社会情報学研究科）
話題提供： 重久 理奈（大阪大学大学院人文学研究科）

企画趣旨

メディア作品に視聴者が参加するというのはどのような振舞いなのだろうか？

メディア作品は制作者を送り手、視聴者を受け手とするコミュニケーションであるとまずは言えそうだが、視聴者を受動的な存在と見なすことには異論もあり、制作者側もそうした構図に甘んじているわけでは必ずしもない。そこで問題になるのは参与の構造である。

他方、言語作品か映像作品かを問わず、あるメディア作品において何らかの出来事が描写される場合、そこには描かれている世界の内部での人々の相互行為がある。そのため、その分析には、対面相互行為の分析に起源を持つ参与構造などの分析概念が利用できる可能性は高い。これはE. Goffmanによる送り手役割の多重性と受け手の多様性に関する考察に端を発し、会話分析などに継承されている流れである。

上記の2つの方向性を受けて、フィクションの参与構造を分析するための枠組みも提案されているが、現在はまだこうした伝達水準の階層性を認めるという以上の定見はない。

これらを踏まえ、本シンポジウムが議論したいのは、メディア作品における制作者と視聴者との間のコミュニケーションと作品内での相互行為という2つの世界における参与構造の間の関係、特に、後者は前者に一方的に埋め込まれているだけなのか、という点である。

話題提供1：メディアにおける注意共有の相互行為分析（細馬宏通）

メディアの表現を考える際に、鑑賞者は、キャラクター間の相互行為を読み解く一方で、作り手との間でも相互行為を行っている。この二重性は、とりわけ注意共有のように、お互いの注意方向のモニタリングを必要とする過程で問題となる。一般に、注意共有に必要な手がかりが、物語内のキャラクター間で共有されているとき、鑑賞者はいわば傍観者ないし覗きとして注意の対象を物語外から同定するのに対し、(映画の伴奏音楽やマンガの矢印のように)物語内のキャラクター間で共有されていないとき、鑑賞者は作者から発信される手がかりの直接の宛先となる。ただし、これらの参与枠組みは、Goffmanが「足場」概念で指摘している通り、コミュニケーション過程において必ずしも固定的なものではなく物語の進行と共に変化しうる。本発表では、いがらしみきおのマンガ『ぼのぼの』における注意共有過程を事例分析し、わずか4コマの中でキャラクター間、作者-宛先間の二重の読みがどのように可能になり、鑑賞者の参与構造を揺るがしているかを論じる。

話題提供 2：映像作品における「描くこと」と「描かれたこと」（高梨克也）

近代的リアリズムでは、映像作品の中で描かれている人々の振舞いは制作者と視聴者での間のコミュニケーションに介入しない。つまり、登場人物は自分たちがどのように描写されているかについて無知であるというのが原則である。加えて、描写者の視点もできる限り透明化され（三人称の発見）、これにより、視聴者は描かれた虚構世界をあたかも眼前で展開している現実世界の出来事かのように見る。しかし、映像作品では、特定のアングルから場面を切り取って撮影することは不可避であり、視聴者も切り取られた視点の映像にしかアクセスできない。その意味で、視聴者に提供される映像は最低限でも何らかの演出の結果であることになる。本発表では、前半で、こうした原則が典型的に分かるものとして JT 社のテレビ CM を取り上げ、制作者-視聴者間と登場人物同士という二重の相互行為を確認する。後半では、こうした映像作品の虚構性の原則を逆手に取った例として、ドラマ「あまちゃん」の 1 シーンを取り上げ、そのノン・フィクショナルリティについて論じる。

話題提供 3：陰謀論に生きる（大山星馬）

Q anon と呼ばれる陰謀論が関連した事件が多数生じている。このような問題は「陰謀論が人々に真実として認識される」認識論的問題なのだろうか。例えば、霊の存在を真実として認識せずとも、ホラー映画視聴時に恐怖を感じ、視聴後も暗がり避けることは不自然ではない。このような行為の積み重ねや何らかの相互性から、陰謀論の世界に人々が生きていくようになることが問題なのではないだろうか。しかし、陰謀論をめぐる行為の相互性は複雑である。陰謀論の多くは、登場人物や語り手を変えながら再生産されてきた。例えば、Q anon は、70 年代に隆盛した悪魔崇拝陰謀論がネット掲示板利用者に引き継がれたもので、陰謀と争う人物としてドナルド・トランプが登場し、読者の一部が Qtuber と呼ばれる新たな語り手となっている。本話題提供では、日本における陰謀論をめぐる営みの観察事例を取り上げ、陰謀論内登場人物・陰謀論著者・陰謀論読者らが織りなす相互性のあり方を議論したい。

話題提供 4：小説の多言語表象がもたらす包摂／疎外の参与構造（重久理奈）

本発表では、観光小説 Lapcharoensap (2005) “Farangs” を例に、タイ語と英語の二言語話者の主人公を交えた会話場面を取り上げ、多言語使用がいかに表象されるのか考察する。具体的には、一人称の語り手 “I” が任意に使用言語を切り替え、タイの観光業従事者の一員として伝言を取り繕って通訳し英語圏の旅客を蚊帳の外に置く場面、アメリカにルーツを持つ英語話者として旅行者からの除け者扱いに抵抗する場面の 2 つを分析する。青年の帰属意識を描くこうした構図の反転、あるいは現地の生活者と観光客の間に非対称に展開される参与構造を把握するにあたって、読者には現実世界と同等の相互行為秩序に関する知識が要求される。他方、全編を通じてほぼ英語に置換され、言語交替時に註釈が挟まれた語りは英語圏に読者層を定めたもので、伝達の多重性というフィクションの語用論的環境特性を顕在化させている。本発表では、以上のように執筆言語と作中言語の差異をどう描写するか次第で、いかに読者の理解と移入が変化するかを論じたい。

伝統的日本文化の啓発と創発に向けて

ー 継承と生成の分岐点 ー

企画・司会： 木戸彩恵（関西大学文学部）

話題提供： やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

話題提供： 木戸彩恵（関西大学文学部）

話題提供： 松熊亮（千葉商科大学基盤教育機構）

話題提供： 竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

企画趣旨

現代社会において、かつて日常に根づいていた日本文化の多くが断絶や衰退の危機に直面している。一方で、形を変えながらもかろうじて継承されている文化も存在し、それらは日常の営みの中に微かに息づいている。本シンポジウムでは、そうした「断絶した伝統」や「継承が危ぶまれる文化実践」を対象に、質的研究の手法によって伝統文化の啓発や創発を試みた研究を紹介したい。話題提供者は、研究を通して伝統文化の動態を捉えてきた実践的研究者であり、指定討論には生成継承性の視点から文化の生成・変容・再編を捉える研究者を迎える。文化の継承と創発を理論と方法から考える場としたい。

話題提供 1：かさねの色目とかさねコミュニケーションモデル（やまだようこ）

私は、「うつし」「かさね」「はなれ」「むすび」など、やまとことばの発想から心理学の理論を考えてきた。日本文化のフィールドに根ざした「ことば」の継承と新たな文脈における生成をめざすのである。ここでは、平安朝の「かさねの色目」をもとにした「かさねコミュニケーションモデル」を提案する。ナラティブ論は、「対話」モデルを基にしてきた。「対話」は「二つに分かれたことば」が原義で、境界を明確に分け、自他を対立させる。それに対して「かさね」モデルは、境界は重要ではなく、多様な色を組みあわせてコーディネートし、グラデーションによる自然の推移や変化プロセスを重視する。また、ミーニング（意味）よりもセンス（感性）を重視し、ビジュアル・ナラティブとしても優れている。

話題提供 2：お茶飲みによる家族間コミュニケーション空間の創発（木戸彩恵）

緑茶は、団欒やもてなしの心を象徴する日本独自の文化である。近年、抹茶の需要は高まる一方で、煎茶の茶葉消費は伸び悩んでおり、急須を持たない若年層の家庭も少なくない。本研究では、大学生に煎茶の淹れ方をレクチャーした上で、家庭での煎茶飲用を3週間継続してもらい、その間の家族間コミュニケーションおよび生活の質の変化を、コミュニケーション態度尺度と SEIQoL-DW を用いて測定した。伝統的な文化実践の継承が危ぶまれる中で、それを創発的に再構築するためには何が求められるのか。討論では、世代を超えた文化的実践を支える視点について考えたい。

話題提供 3：伝統漆器産業の職人にみる生成的な継承プロセス（松熊亮）

本発表では、関東の伝統漆器産業に従事する職人たちの制作物や語りを取りあげながら、人々がどのように制作物や自分自身を産地の「伝統」の延長線上に位置付けているのかを検討する。伝統的工芸品には、認定された素材や技法、先人たちの制作物などが踏まえるべき「伝統」として存在している。漆器づくりを通じて生計を立てている職人たちはそれらを参照しながら自分の制作物が産地の伝統的実践として認められる一線を意識しつつ、自らの器を受け取り、使ってくれる今を生きる人々に届く器を日々模索している。当日は、このような当事者の姿を手がかりに、伝統が単なる過去の事実ではなく生きた歴史として紡がれていくプロセスについて議論をしたいと考えている。

話題提供 4：断絶した和菓子に見る地域文化の継承と創発（竹内一真）

和菓子は洋菓子の影響もあり、一時その需要が大幅に減っていた。しかし、近年のインバウンド観光客の増加とともに過去のピーク近くまで需要が戻ってきている。そのような状況で過去に途絶えてしまった和菓子を復活させ、その復活させた和菓子を起点に新たな和菓子を創発する事例も散見される。本話題提供では元祖もみじ饅頭を復活させた加藤宏明氏（高津堂）を含め三名の和菓子職人に行ったライフストーリーインタビューのデータを示す。具体的には途絶えてしまった和菓子の復活から新たな和菓子の創発に至るまでの語りと当事者の意味づけを示す。討論では復活は継承と呼べるのか、また、創発と個性差の違いなどについて議論をしていきたい。

Generativity and Innovation in Traditional Japanese Culture: At the Crossroads of Cultural Transmission and Transformation:

Kido Ayae (Kansai University), Moderator, Presenting Author

Yamada Yoko (Ritsumeikan University), Presenting Author

Matsukuma Ryo (Chiba University of Commerce), Presenting Author

Takeuchi Kazuma (Tama University), Presenting Author

Language: Japanese

パフォーマンスが／でひらく

アートベース・リサーチの可能性

ー意味の生成と多義性をめぐってー

企画： 青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

話題提供： 松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）

話題提供： 郡司菜津美（国士舘大学文学部）

話題提供： 岸磨貴子（明治大学国際日本学部）

企画趣旨

アートというと、美術や舞台芸術のような芸術作品として捉えられがちだが、アートベース・リサーチ（Arts-Based Research: ABR）におけるアートには、最終的な作品よりも、表現したり制作したりしていくプロセスに重点がある。本シンポジウムは、こうしたプロセスにおける関係性や身体性を伴う行為を、K. ガーゲンやL. ホルツマンによる議論を背景にパフォーマンスとして捉えなおすことで、ABRの可能性を拡張しようとするものである。アートは、明確な意味や解釈を示さないために、かえって知的かつ情動的な問いや対話を生み出す起点となり、多義的な意味が生成される場となり得る点が特徴的である。本シンポジウムでは、こうした議論を踏まえつつ、研究者が当事者との関係の中でともに意味を生成しつづける2つの事例について、パフォーマンスを用いた発表を試みる。その上で、パフォーマンスという視点からどのようにABRを拡張していけるかを議論したい。

話題提供1：ABRとしての「キャラづくり」活動（松嶋秀明）

筆者が関わっているあるNPOは、ヤングケアラーや、障がいのある子どもなどを支援する居場所活動を展開する一方、地域課題を市民が主体となって解決するための場づくりも行なっている。そのような活動の一貫として、私たちは、自分たちの活動を知ってもらうために、支援対象となる子ども・若者や、自分たち自身をあらわす「キャラ」づくりプロジェクトをはじめた。プロジェクトの一連のプロセスをふりかえると、この活動自体が、単に支援活動を発信することにとどまらず、自分たちが支援するのは誰で、自分たちはどのような支援者なのかを問い直す活動にもなっていた。当日は、模擬的に「キャラづくり」をおこない、体験をわかちあいたい。

話題提供2：教師になるパフォーマンスをみんなで一緒に（郡司菜津美）

「教師になってみて」と言われたら、どんなパフォーマンスをするだろうか。おそらく教員免許状を差し出して「私は教員です」と言うのではなく、教壇の前に立つ自分を想像して「人という字はあ」と言ってみるといったような、教員の日常をパフォーマンスするだろう。教師と

いう肩書きがあるから教師になるのではなく、教師というパフォーマンスが、教師を教師たらしめてくれる。教師になるということは、ひとりの頭の中から飛び出して、頭の外の世界と関わっていくことで達成されていく共同的な活動の集合だ。筆者は、教員養成の現場でこの点を強調して学生たちと関わり、互いに関わりあっている。当日は、教師になるパフォーマンスにみんなで挑戦し、教師になるプロセスを楽しむ時間にしてみたい。

話題提供 3 : Gergen & Gergen の議論を手がかりとした ABR の意義（岸磨貴子）

本発表では、Mary M Gergen と Kenneth J Gergen の『Playing with Purpose: Adventures in Performative Social Science』で紹介された実践事例と著者らの対話を手がかりに、言語や記号による再現を超えた、関係性や身体性を伴う行為としての知について考察する。Gergen & Gergen が示すように、研究とはもはや現実を正確に記述する営みにとどまらず、社会的現実を他者と共に演じ、生成するプロセスでもある。この視点は、ABR のパフォーマティブな展開と深く関連している。

ABR において、アートはしばしば「専門的な知識やスキルがなければ実践できない」と誤解されがちだが、Gergen & Gergen はアートを日常的かつ関係的な行為として広く捉え、誰もが参与可能な探究の場として提示している。また、ABR がもつ多義性や曖昧さに対して「それは研究か？」という問いもあるが、まさにその多義性こそが、情動や想像力を通じて新たな知を生み出す余地を拓いている。本発表では、社会科学におけるパフォーマティブな動向の議論を中心に据えつつ、研究とアート、行為と意味、共創と批判が交差する地点に立ち、ABR の生成的な性質に焦点をあて、その意義を考察する。

Opening the Possibility of Art-Based Research with/by Performance

Exploring the making and the uncertainty of meaning

Masahiko AOYAMA (Seijo University), Moderator

Hideaki Matsushima (University of Shiga Prefecture), Presenting Author

Natsumi Gunji (Kokushikan University), Presenting Author

Makiko Kishi (Meiji University), Presenting Author

Language: Japanese

文化の中で揺れる〈私〉

ーヤーン・ヴァルシナーの文化心理学に基づく「矛盾」の質的探究ー

企画： 番田清美（人間環境大学総合心理学部）
司会： 番田清美（人間環境大学総合心理学部）
話題提供： 土元哲平（立命館大学大学OIC 総合研究機構）
話題提供： 宮下太陽（株式会社 日本総合研究所
未来社会価値研究所）
話題提供： 市川章子（国立国語研究所）
指定討論： 安田裕子（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、文化心理学者ヤーン・ヴァルシナーの理論的枠組みに基づき、「矛盾」というテーマを質的心理学の視点から多面的に考察する。「文化的な意味の場（sphere of meaning）」において、個人の内的経験としての矛盾や葛藤が、どのように文化的・歴史的文脈に媒介されて構成されるのかを探究する。近代社会における個人の自己形成は、一貫性や統合性を理想としながらも、複数の文化的価値観や社会的要求に晒される中で「矛盾」を抱えることが不可避である。こうした内的矛盾が、いかにして意味づけられ、語られ、あるいは沈黙されるのか、本シンポジウムでは、理論的考察、ナラティブ研究、ライフストーリー分析、参与観察、TEA（複線経路等至性アプローチ）等の質的手法を通じて、この問いに応答する。発表者は、異なる文化的背景（教育、アイデンティティ、キャリア形成など）における事例を提示しつつ、矛盾を否定すべき「障害」としてではなく、文化的自己が生成される「場」として捉える視座を共有する。これにより、自己をめぐる葛藤を豊かに記述し、解釈し、新たな人間理解の可能性を開くことを目指す。

話題提供1：教師の語りのメタ分析（市川章子）

外国にルーツをもつ子どもたちが増加するにつれて、教師の仕事内容も変化してきた。教師は、文化的背景の異なる子どもたちの発する言葉の意味や行為を読み解くことも重要な仕事であるが、読み解く過程では葛藤や矛盾が生じることも少なくない。本発表では、日本語指導が必要な児童が在籍する小学校で働く教師の語りに着目する。対話的自己を手がかりに考察し、教師がどのように学校文化のなかに自分を埋め込み、文化を意味づけているのかについて、市川（2025）で十分に解決されなかった問題を指摘する。その上で、「これからの社会と教員に求められる資質能力」（文部科学省）の育成への貢献を目指す。

話題提供2：キャリアをめぐる矛盾と葛藤（宮下太陽）

本発表ではキャリアをめぐる矛盾と葛藤に焦点をあてる。昨今、キャリア形成の土台ともい

うべき資本主義経済そのものが歴史的な転換点を迎える中、長寿化による働く期間の長期化、コロナ禍を経て一般化した働き方の多様化、副業・兼業の浸透などの影響もあり、キャリア形成をめぐる社会的な価値観や社会的要請も変化しつつある。これは同時に従来機能していたキャリアの通過儀礼的側面が機能しにくくなるということであり、個人にとっては矛盾や葛藤に生身で直面しなければならない場面が増えることを意味する。本発表では特にキャリアの転機に焦点をあて、キャリアの転機の最中にいる個人の矛盾や葛藤が「文化的な意味の場」においてどのように生成されるかという点について理論的考察を行う。

話題提供 3：第二の皮膚——「宇宙へのロマン」をめぐる熟慮的オートエスノグラフィー（土元哲平）

本発表では、発表者の人生経路における「宇宙」に対する意味づけの過程を、熟慮的オートエスノグラフィー（Auto-TEM）を用いて記述することで、宇宙開発における風景の倫理を問いたい。少年期に抱いた「宇宙へのロマン」の崩壊、「庭」との出会い、宇宙研究の再始動を経て、私は月面開発に対する矛盾——それがロマンであると同時に、「地球から見た風景」の改変という破壊的側面をも併せ持つこと——に出会う。月を眺めるとき、私はその姿に、将来月から眺めることになる地球を重ね合わせると同時に、見慣れた風景の崩壊を予感し、「今、ここ」にある月に郷愁を抱く。風景は、自己の身体表面を超えて自己と結びつく「第二の皮膚」であり、自らの皮膚「として」見られ、触れられ、存在することで意味を持つ文化的な意味の場として広がっている。

The Self in Motion within Culture

Exploring Contradiction through Jaan Valsiner's Cultural Psychology

Kiyomi Banda (University of Human Environments), Moderator

Teppei Tsuchimoto (Ritsumeikan University), Presenting Author

Taiyo Miyashita (The Japan Research Institute, Limited.), Presenting Author

Akiko Ichikawa (National Institute for Japanese Language and Linguistics),
Presenting Author

Yuko Yauda (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

質的研究法としてのパターン・ランゲージ

ーよい実践の本質／経験則を言語化し共有する方法ー

- 企 画： 井庭 崇（慶應義塾大学総合政策学部）
司 会： 井庭 崇（慶應義塾大学総合政策学部）
話題提供： 金子 智紀（非営利型株式会社 KOTOBUKI）
話題提供： 鎌田 安里紗（一般社団法人 unisteps）
話題提供： 山野 大星（日本工学院専門学校・日本工学院八王子専門学校）
指定討論： サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、よい実践の本質／経験則を言語化する「パターン・ランゲージ」の方法を、質的研究法として位置付け、その特徴を解説するとともに、研究例として、福祉や暮らし、教育分野、専門的仕事の研究を紹介する。

パターン・ランゲージとは、よい実践の具体事例に共通する不変的「パターン」を捉えて記述し、名づけた「ランゲージ」（言語）体系のことである。個々のパターンは、ある状況に対して何をするのが大切かの経験則を明示的に示し、そのようなパターンがいくつも体系的にとりまとめられることで、いろいろな状況における実践の参考にできる。

本シンポジウムでは、まず、パターン・ランゲージとは何か、それはどのように作成するのか、そして、質的研究として作成するための「Grounded Essence Approach」（GEA：ギア）について紹介するとともに、話題提供者に研究例を紹介してもらう。

話題提供1：高齢者向けホームのケアと場づくりの実践の研究（金子智紀）

福祉や暮らしに関するパターン・ランゲージ研究として、高齢者向けホームのケアと場づくりの実践の研究を紹介する。この研究では、素晴らしい取り組みであると注目される先進事例の高齢者施設を対象に、日々のケアと場づくりの実践において大切にしていることをインタビューで掘り起こし、その知見を30パターンにまとめ、記述した。この研究成果は、書籍『ともに生きることば——高齢者向けホームのケアと場づくりのヒント』（金子・井庭、2022）として出版されている。また、このパターン・ランゲージは、高齢者施設の現場の研修に導入され、その効果の調査・研究が行われているので、それらについても紹介する。

話題提供2：生物多様性・自然資本の保全の協働実践の研究（鎌田安里紗）

専門的な仕事に関するパターン・ランゲージ研究として、生物多様性・自然資本の保全のための協働実践の研究を紹介する。この研究では、生物多様性・自然資本の保全についての先進事例地の事業者、行政、市民団体、教育機関、専門家等へのインタビューを通して、活動の立

ち上げから現在に至るまでにどのような働きかけや工夫が重ねられてきたのかを、パターン・ランゲージのかたちで記述した。この研究で作成されたパターン・ランゲージは、徳島県の事例、沖縄県金武町の事例、広島県北広島町の事例における実践についてそれぞれ記述・言語化したローカル・パターン・ランゲージである。

話題提供 3：専門職教育における学びの支援の研究（山野大星）

教育に関するパターン・ランゲージ研究として、建築系専門職教育カリキュラムにおける「学び方」のパターン・ランゲージの研究を紹介する。この研究で作成したパターン・ランゲージ「建築を学ぶためのパターン・ランゲージ」は、全 81 パターンで構成されている。それを新入生への導入教育のワークショップで用い、参加や習得への不安を軽減する効果があったことが明らかになっている。さらに、2 年次に進級した学生へのワークショップでは、「学び」と「進路」に向きあい、具体的に省察し、それについて他者と語りあうコミュニケーションの支援になり得ることも示されている。

Pattern Language as a Qualitative Research Method

Describing and Sharing the Essences / Rules of Thumb of Good Practices

Takashi Iba (Faculty of Policy Management, Keio University),, Moderator

Tomoki Kaneko (KOTOBUKI, Non-Profit-Company), Presenting Author

Arisa Kamada (General Incorporated Association unisteps), Presenting Author

Daisei Yamano (Nihon Kogakuin College / Nihon Kogakuin Hachioji College),
Presenting Author

Tatsuya Sato (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University),
Discussant

Language: Japanese

歴史を見据えるフィールドワーク

ー農と食と心理学7ー

- 企画・司会： 石井宏典（茨城大学人文社会科学部）
話題提供： 石井宏典（茨城大学人文社会科学部）
話題提供： 菅野幸恵（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
話題提供： 木下寛子（九州大学大学院人間環境学研究院）
指定討論： 浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）

企画趣旨

7回目を迎える一連のシンポジウムのはじまりは、2010年に開催された第7回質心大会での「農と心理学―根づき、根を張る」であった。そのときの企画趣旨では、近代の産業化というマクロな社会変動をふまえながら、次のような時代認識を示した。

「この（農の）営みに着目するにあたり、移動と定住、消費と生産、人工と自然という3つの軸を設定してみたい。現代人の生活は、いきおい、移動、消費、人工のほうへと著しく傾斜してきた。多くの人たちが新たな生活の糧を求めて都市に向かい、所属する組織や自分の都合のため、生涯において幾度も移動を体験する。流動性を増す社会において特定の地域で世代を重ねて暮らすという生活のかたちは減っていった。また、自らの衣食住を支える生産活動には関与することなく、そのほとんどすべてを顔の見えない誰かの労働に依存する人たちが急増した。自然から離れ人工的に管理された環境のなかで育つことは、土の感触を忘れ風の流れにも鈍感な身体をつくりあげる。それぞれ独自の風土のなかで深められてきた自然と付き合う術は、後継する者を失い、その多くが途絶えようとしている。こうした大きな流れのなか、じっくり辺りを見渡せば、農や自然に回帰する動きがあちこちで静かに起こっていることにも気がつく。

（後略）」

人びとの営みの現場に密着するフィールドワークにおいて、歴史を俯瞰する視座を据えることで何がもたらされるのだろうか。私たちは誰もが特定の時代状況に生まれ落ち、そのなかで社会化されてきた存在である。そして、人びとの感覚や認識、あるいは習慣や関係の結び方は時代とともに変化するから、現在において一般的とみなされるそれらの特質は過去と比較することで捉えることが可能になる。本シンポジウムでは、3つの話題提供をとおして、五十年百年という時間幅での変化を見据えながら取り組むフィールドワークの可能性について考えてみたい。

話題提供 1：地域の伝統行事を担う旧・新住民と帰郷者―『都市で故郷を編む』と『根の場所をまもる』、そして現在の課題（石井宏典）

1989年以来のフィールドである沖縄・備瀬集落では、集落の外に稼ぎに出ることを「旅に出

る」と言い慣わしてきた。今から約百年前の 1920 年代以降、産業化の進展とともに「旅に出る」人たちが急増した。現在、かつての半農半漁時代の精神を反映した伝統行事は、旧住民と都市からの移住者、そして「旅（都市）から戻った」帰郷者という三者によって担われている。帰郷者は、地域の内／外の眼を併せもつ両義性ゆえに旧・新の住民を媒介しうる。住民たちにとって幾世代にも渡って受け継がれてきた行事の場所に身をおくことは、先祖との繋がりを実感する機会となり、過去が現在に接続され連続性の感覚が醸成される。一方、2002 年に隣接の国営公園に大型水族館が建て替えられて開館すると、フクギ並木に覆われたこの集落にも国内外から多くの観光客が訪れ、近年は生活の場が脅かされるほどの事態となっている。本報告では、歴史のなかに住民三者の位置づけを図りながら現状を考察する。

話題提供 2：仲間と織り成す共同保育の場—現代における『つながりの子育て』の実践（菅野幸恵）

ヒトの子育ての特徴は、共同保育（両親だけでなく血縁・非血縁の仲間と共に行う）にある。戦後の社会変動で、地縁・血縁を中心としたコミュニティでの子育ては、見ず知らずの人ばかりの「アウェイ」で、ひとりで担う（「ワンオペ」）ものになった。子育てに関しても「三間（仲間・空間・時間）の喪失」という遊び環境の変化が指摘される。こうした問題意識を背景に、親たちが互いの子を預け合う自主保育や、子ども主体の遊び場を保証する冒険遊び場づくりが始まった。本報告では、戦後の子育て・子育てをめぐる社会変動のなか、これらに加え共同保育所や森のようちえんを位置づけ、現代版共同保育のかたちを示したい。

話題提供 3：学校に出会い直す—「感染症拡大」と「携帯端末普及」から見てきた『学校を生きていく』こと（木下寛子）

報告者は 2001 年から九州のある小学校に通い、先生・子ども達と一緒に過ごしている。教育課程の改訂と共に教室での活動は変化する一方で、同じ校区の同年齢の子どもが 6 歳で入学し、同じ教室で勉強し給食を食べ、休み時間を心待ちに過ごし、12 歳で卒業する小学校の構造は、少なくとも訪れた当初から現在に至るまでの期間でさほど変わらなかった。しかし社会全体に深いインパクトをもたらした携帯端末普及（2010 年代半ば）や感染症拡大（2020 年 1 月～）は、学校での経験や出来事の様相を大きく変え、学校の間もまた歴史的な制約の内にあることを教えてくれた。これらの事態を通じて出会い直した学校の姿を示し、共に見出した「歴史的限界」（安倍, 1956）の意味とフィールドワークの可能性を提示する。

Fieldwork with an eye on historical context:

Farming, eating, and psychology 7

Hironori ISHII (Ibaraki University), Moderator and Presenting Author

Yukie SUGANO (Aoyama Gakuin University), Presenting Author

Hiroko KINOSHITA (Kyushu University), Presenting Author

Sumio HAMADA (Nara Women's University), Discussant

Language: Japanese

アートを介して「知る」とは

ー音楽療法士によるアートベースト“リサーチ”体験型シンポジウムー

企画： 生野 里花（お茶の水女子大学基幹研究院）
司会： 生野 里花
話題提供： 高田 由利子（札幌大谷大学芸術学部）
話題提供： 生野 里花
話題提供： 三宅 博子（国立音楽大学音楽学部）
討論： 登壇者および会場

企画趣旨

本シンポジウムの目的は、「アートのなものを介在させることで、それまでとは異なる視点を与えられる知の方法」について、体験を共有しながら議論を深めることである。

3人の登壇者は、音楽療法を軸とした実践・研究・教育を行っており、その探究プロセスに広義のアートを介在させることに関心を抱いて模索してきた。そして、今回の企画では、アートのなものをを用いて事象に向き合う特徴を「経験の全体性に触れること」「経験を自分の外側に表現し、対象化すること」と仮定した。

それぞれ、「音」「映像」「対話」によるアートベースト「リサーチ」に至った背景や経験を紹介し、会場との共体験によってそのプロセスに接近し、議論にひらく。

話題提供1：

音を聴く、自己を知るーアートとしての音の聴取体験の可能性（高田由利子）

私は現在、音楽療法士の育成に携わりながら、音の聴取が記憶の想起や感情の変化に与える影響について、アートとしての音の聴取体験型ワークショップを通じて質的研究を行っている。言葉や音楽ではなく「音」そのものに耳を傾けると、心の奥に眠っていた記憶や感情がふと立ち上がってくることがある。何気ない音が、かつて見た風景や誰かの声、あるいは自分でも気づかなかった思考やイメージと出会わせてくれることもある。アートとしての音は、単なる聴覚刺激ではなく、内面を映し出す鏡として、静かな対話を促す媒体となる。音を「聴く」という行為を通じて自分自身と向き合い、新たな視点や気づきを得る体験は、アートとしての音を介して自らを知る時間でもある。本シンポジウムではそうした音の聴取体験がもたらす内的変容や気づきについて、参加者と共有し、対話を通して理解を深めたいと考えている。

話題提供2：

研究事例から生まれた影絵と詩「沈みゆく船をみまもる」（生野里花）

私は現在、身体や認知の機能が減じていく中で介護付きホームを終の住処として暮らす高齢者の音楽療法を、一対一～数人の単位でおこなっている。今回共有するのは、ある90代の男性

の終末期に兄弟たちも交えて行なった10ヶ月の音楽療法の、事例研究の経過である。質的分析によって上位概念を導いたものの、臨床者として言葉にならない「腑に落ちなさ」を感じ、詩、影絵、二人称への語りを想定した再構築ストーリーを制作した。そして、これらをアート媒体として、国内外の音楽療法士たちと対話する試みを続けてきた。本シンポジウムでは、この一連の作業をするに至った意味や位置付けを振り返りながら、会場の皆さんにも影絵と詩(15分間)を見ていただき、「人として」「質的研究者として」の両面からご意見を伺えればと考えている。

話題提供3：

対話「アートを介して“知る”ってどんな体験？」(三宅博子)

私は現在、障害のある人と家族、支援者、地域の人の協働による音楽クラブ活動を主宰し、多様な人々が生きやすくなるような場作りのアクションリサーチを行っている。その一環として大事にしているのが、活動に関わる人々との対話である。ここでいう「対話」とは、あるテーマについて参加者と一緒に話し、聞き、考える「哲学対話」から影響を受けている。互いの経験や視点を交換するうちに、そんな見方もあるのかという気づきがふと生まれ、他者の視点を組み入れて新たな視点から物事を捉える。そのような対話は、たんなる言葉のやりとりではない、身体感覚によって感じられる「場の共有」の側面を持つと言えるだろう。本シンポジウムでは、話題提供1, 2での「音」「映像」を介した体験について参加者どうしで対話しながら、その対話自体もまたアートの営みの時間になればと考えている。

‘Knowing’ mediated by art

- An experiential symposium on art-based ‘research’ by music therapists -

IKUNO Rika (Ochanomizu University), Moderator

TAKADA Yuriko (Sapporo Otani University), Presenting Author, Discussant

IKUNO Rika (Ochanomizu University), Presenting Author, Discussant

MIAYKE Hiroko (Kunitachi College of Music), Presenting Author, Discussant

* Language: Japanese

一般研究発表（ポスター） 一般発表セッション

P18A-1 「防災意識を高める」とはどういうことか？—テキストマイニングによる調査をもとに

宮前良平（福山市立大学都市経営学部）

本発表は、「防災意識」の向上が目指される現代日本の防災ディスコースに対して、批判的な視点からその限界を検討するものである。防災意識はしばしば、被害発生の原因や改善策として挙げられ、個人の内面に問題の所在を還元する言説として機能している。しかし、実際には意識の高さが必ずしも避難行動や備えに直結しない「リスク認知パラドクス」が存在する。また、「防災意識が低かったから被災した」という語りは、社会的・構造的障壁を不可視化し、支援を必要とする人々を自己責任の名のもとに排除しかねない。さらに、防災意識の測定や定義は一貫性に乏しく、調査自体がトートロジーに陥る危険を孕んでいる。こうした問題を踏まえ、本研究は「防災意識」そのものではなく、「防災意識という語がどのように語られているか」を問う言説分析の視点から、防災の政治性と倫理的課題を明らかにする。

P18A-2 聴覚障害のある人の心理的支援における専門性

広津侑実子（東京都公立学校）

本発表では聴覚障害のある人への心理的支援（Fellinger et al., 2012; 河崎, 2014）の専門性を検討する。聾学校や施設などで聴覚障害のある人を支援する8名の心理職の語りをKJ法（川喜田, 2017/1967）を援用して分析した結果、一般の心理的支援の専門性（浅原ら, 2016; 鈴木, 2018）と同様に、【心理的支援の目的】、【心理職の姿勢】、【心理的支援の内容】、【心理的支援の発展のための支え】の4つの大カテゴリーが抽出された。なかでも、手話を音声言語の代替のコミュニケーション手段として捉えるのではなく、本人のアイデンティティとつながる言葉として尊重する、聴者社会での受動的や傷つきの体験を修正するため面接の場で能動性を重視するなど、聴覚障害のある人・ろう者の特性を踏まえ関係性と主体に目を向ける点が特徴的であった。筆者旧所属機関の倫理審査委員会から研究実施の許可を得た。

P18A-3 訪問介護における注意共有の達成過程—インターフェースとしての冷蔵庫—

細馬宏通（早稲田大学文学学術院）・八木裕子（東洋大学福祉社会デザイン学部）

認知症高齢者は、しばしば注意機能に問題があり、注意共有の達成に困難を抱えている。一方で、たとえ困難を伴っても、活動を楽しむことが、認知症高齢者の「自立」を促し、QOLを維持するために必要であるとされている。訪問介護では、生活歴の喚起を促すことで利用者の自立を支援することが求められており、その作業の一つとして「認知症の高齢者の方と一緒に冷蔵庫のなかの整理等を行うこと」（厚生労働省老計10号）ことが挙げられている。では、実際の場面において、ヘルパーと利用者は、どのようにして冷蔵庫の中身を注意共有するのだろうか。本発表では、認知症高齢者とヘルパーの訪問介護場面を記録し、ヘルパーと利用者の発話、視線配分、動作を詳細に分析することで、どのような手続きを経た場合に注意共有が達成されるかを記述するとともに、注意共有に必要とされる相手の視線に対するモニタリングがいつどのように起こっているかを明らかにした。

P18A-4 糖尿病診療場面におけるモニタリングを介したコミュニケーション—1型糖尿病患者—医療者間でのデータ活用方法の相違

細野知子（日本赤十字看護大学看護学部）・海老田大五朗（新潟青陵大学福祉心理子ども学部）

1型糖尿病は血糖管理が難しく重篤な急性合併症を引き起こす疾患であり、その治療では24時間血糖測定する持続グルコースモニター（Continuous Glucose Monitoring: CGM）の使用が推奨されるようになった。自動化されたCGMには病者のQOL向上も期待される。一方、従来通り、手動の血糖測定や記録を併用する者もあり、診療場面では多様なモニタリングデータが使用されている。本研究の目的は、1型糖尿病患者における多様なモニタリングデータの活用方法を診療場面の相互行為から記述することである。データは参加観察と録画・録音、病者への非構造化面接、記録の撮影によって収集し、現象学に基づく視点で分析した。本研究は筆頭筆者の所属機関で研究倫理審査の承認を得た。診療場面では、医療者はCGMデータに治療成果の根拠を、1型糖尿病患者は自分の記録に行動の根拠を見出してコミュニケーションしていた。現代の1型糖尿病治療における創発的なコミュニケーションの可能性を考察したい。

P18A-5 発達障害傾向のある5歳児に対する保育士のかかわり

角南なおみ（帝京大学文学部）・前垣義弘（鳥取大学医学部）

OECD は幼児期に必要な資質・能力として社会情動的スキルを提示しているが、発達障害傾向児の多くは社会性の困難や認知の偏りがみられその獲得が難しい状況にある。そこで、本研究は発達障害傾向児に対し社会性に着目した教師のかかわりの特徴を明らかにすることを目的とする。発達障害傾向のある5歳児Aの2名の担任と副担任にインタビューを行い、5歳児Aの行動が4月当初と変容したことが語られた。その内容を質的に分析した結果、同じ【環境の変化】【友達関係の変化】【子どもの変化】【保育士のかかわり】【問題行動の原因】【変化の要因】【保育士の捉え方】に分類された。発達障害傾向児に対し経験年数の相違により、子どもの思考の解釈、子どもの問題に対する問題意識とかかわり方、捉え方に相違があり、経験年数の蓄積により教員間での連携および子ども同士の関係を重視する社会性を意識して関与することが示唆された。

P18A-6 予言される災害と〈信じる／信じない〉の間—日本と台湾における語りの比較

李 勇昕（立正大学人文科学研究所）

本発表では、2025年にSNSを中心に拡散された「7月5日に南海トラフ地震が発生する」という予言を題材に、日本と台湾における災害予言の受容とその言説の違いを比較検討する。本研究は、実際にこの予言を信じて避難準備や旅行キャンセルなどの具体的行動をとった、あるいは全く信じなかった人々へのインタビューを通じて、それぞれの判断の背景にある情報リテラシー、社会的関係、過去の災害経験、メディア信頼などの要因を明らかにすることを目的とする。あわせて、日台のメディア報道の言説分析を通して、災害情報や予言がどのように「信じる／信じない」という感情的・文化的判断に影響を与えるのかを質的に探る。予測や予言に対する社会の反応を、リスク認知の枠を超えて、日常生活に根差した「災害を語る文化」として捉え直す視点を提示する。

P18A-7 ことばの教育が「共に生きる」に貢献するには—日本語教育従事者による協働オートエスノグラフィーをもとに—

中井好男（大阪大学人間科学研究科）・中山亜紀子（広島大学人間社会科学研究科）・高 智子（日本国際協力センター）

本報告では、3名の日本語教育従事者のオートエスノグラフィーを通して、「共に生きる」の根幹に関わることばの教育がその実現においていかに貢献できるのかを検討することを目的とする。「共に生きる」を探究する共生学（志水，2020）では、共生とは何かを追求するフィロソフィー、共生を社会で実現するサイエンス、その手立てを考えるアートという3つの体系からなり、共生の探究は研究者自身の自己を問い続けていくことであるとしている。そこで、報告者らは、日本語教育従事者としての自己を共に探究する協働オートエスノグラフィーを行った。その中から、1人の人間としての自己と日本語教育従事者としての自己との乖離、日本語教育が持つ関係性を序列化する構造、社会的弱者の声を消費する強者としての姿勢などを取り上げ、ことばの教育である日本語教育が人や社会をどのように架橋することができるのかについて議論する。

P18A-8 住民主体の防災活動に関する質的分析と予測モデルの接続

杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）・棚橋莉沙子（九州大学統合新領域学府）

本研究は、津波避難訓練に関連する地域住民の行動や心理的変容について、機械学習と心理学を融合した手法により明らかにすることを目的とする。対象地域は高知県黒潮町A地区で、同地区では2008年以降津波避難訓練が継続的に行われ、住民一人ひとりの参加履歴が蓄積されてきた。これらのデータをもとに、2025年3月に予定される訓練への参加を予測するモデルを機械学習により構築し、その結果を訓練前に地区の役員に提示した。訓練後には役員への半構造化インタビューを実施し、予測情報が地域の意思決定にどのような影響を及ぼしたかを質的に分析した。その結果、予測モデルの情報が誰に声をかけるべきかという具体的な行動の判断と結びつき、住民の主体的な防災行動の促進に寄与していたことが明らかになった。本研究は、質的心理学の視点からデジタル技術を地域実践へと応用するためには、地域の文脈に根ざした解釈と語りの分析が不可欠であることを示唆した。

P18A-9 幼稚園5歳児における生活準拠型の生活発表会の形成プロセスと意味—発表会「わくわくだんのロボットランド」の事例的検討—

松原未季（大阪信愛学院大学教育学部）

本発表では、5歳児クラスの生活準拠型の生活発表会の形成プロセスを、フィールド観察に基づいて分析し、子どもにとっての生活準拠型の生活発表会の意味を探求することを目的とする。本研究は、東京大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った。5歳児の生活準拠型の生活発表会においては、発表会のテーマ、役割、台詞、動きを、保育者が積極的に設定せず、子どもにその決定が委ねられていた。また、題材となる絵本のストーリーに乗せて、園児が取り組んできた遊びや活動の「過程」を伝えることが重視されていた。だが、5歳児クラスの発表会においては、「過程」を示すことを重視しつつも、「見栄え」にも拘りたいという葛藤があり、保育者は、発表会の形成プロセスを基本的には子どもに委ねながらも、時間設定を決めて「見せ場」をどこで用意するのかを考え、発表会の中で、「一番の見せ場」をいかに示すのかを子どもと共に考えながら設定するようにしていた。

P18A-10 対話型鑑賞が年長児に与える教育的効果—質的データから見る成長の瞬間

猿渡敬志（花王株式会社研究戦略・企画）・山口紀子（花王株式会社研究戦略・企画）

この研究は、対話型鑑賞が保育園の年長児に与える教育的効果を質的に検証することを目的としています。幼児期の教育は、子どもたちの認知的および社会的スキルの発達に重要であり、特にアートを通じた教育が注目されています。対話型鑑賞は、子どもたちがアート作品を観察し、感想や考えを他者と共有することで、観察力、推論力、他者理解力、再考力、表現力、自ら学ぶ力、コミュニケーション能力の7つの力を育むとされています。研究では、年長児12名を対象に3回の対話型鑑賞を実施し、発話内容を分析した結果、特に表現力や自ら学ぶ力、観察力に関する発話が多く見られた一方、他者を受容して理解する力や再考する力は少なかったことが明らかになりました。この結果は、年長児の自己認識と心の理論の発達に関連していると考察されています。今後、対話型鑑賞を通じて7つの力を育成するための絵の選択が可能になることが示唆されました。

P18A-11 商店街における多文化コミュニティ形成の現状と課題—東京都台東区上野アメ横における経営者の語りに着目して—

張 富麟（茨城大学人文社会科学研究科）

アメ横商店街は、戦後の闇市に起源を持ち、アメリカ軍の物資を扱っていたことから「アメ横」と呼ばれるようになった。現在では観光地としても広く知られ、多国籍の経営者が集まっており、多くの人々が訪れる場所となっている。筆者の出身地にも、アメ横商店街のように歴史を持ち、多国籍の人々が集まる観光地化した商店街があり、その近くで育った。表面的には賑わいを見せる商店街も、「多文化共生」が進んでいるように見えるが、観光客の目には映らない、日常の中に潜む葛藤や摩擦が常に存在している。こうした経験から、筆者はアメ横商店街を対象に、異なる文化的背景を持つ経営者たちの語りを通じて、多文化コミュニティ形成の現状と課題を明らかにすることを目的とした。本研究は、アメ横という商業空間において、「共生」という言葉では捉えきれない共存や摩擦のプロセスを、経営者の語りに即して丁寧に描き出す試みである。

P18A-12

（発表取り下げ）

P18A-13 ホログラフィートークで起こること—セラピストへのインタビューを通して—

加藤嘉明（青山学院大学教育人間科学研究科）・沖潮満里子（青山学院大学教育人間科学部）

本邦では、トラウマというものの自体への理解は深まりつつあるが、トラウマへの心理療法について、十分な質的な研究が行われておらず、量的な研究もEMDRなど一部の治療技法に集中している。そこで、本研究では、本邦で開発されたトラウマへの心理療法の一つの技法であり、第一発表者が豊富な実施経験を有しているホログラフィートークを取り上げる。本研究の目的は、ホログラフィートークでどのような心理プロセスが生じているか、セラピストへのインタビューを通して明らかにすることである。方法として、セラピストへのインタビュー（半構造化面接）を10名に対して1人当たり1回1.5時間、2回行った。本発表では、分析の途中経過を発表する予定である。本研究によりトラウマの心理療法に対する理解の広がりを目指していきたい。なお、倫理的配慮としてインタビューに際して、学内の倫理委員会で審査を受けている。

P18A-14 ビジュアルナラティブにおける創造性と正統性—制作物における語りと騙り

竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

本発表ではビジュアル・ナラティブにおける創造性と正統性を明らかにする。ここでは豊後のはるていすとはらふと餅という和菓子の復活を対象とする。豊後のはるていすは江戸時代中期に記された南蛮料理書を基に復活が行われた。しかし、この資料はのちに誤りが指摘されるようになる。豊後のはるていすは豊後と名付け、南蛮料理書に基づく独自の和菓子と位置づけることで地元の客から愛されるようになる。また、はらふと餅は大福のもとになった和菓子で江戸時代後期に記された嬉遊笑覧などを基に復活が行われる。しかし、当初は記述にない栗を入れたり、塩餡と書いてあるのに塩を入れない餡子として売り出すが売れない。博物会員の指摘と共に文献に沿うように作り替えていくことで神社に納められ、売れ行きも伸びる。制作物としてのビジュアル・ナラティブは作り手の創造性が反映される。そのとき、より公的な評価を受けようとすれば正統性も求められることが示された。

P18A-15 成人形成期(emerging adulthood)きょうだい児の心理的現象

ヤン ダンビ（立命館大学総合心理学部）

きょうだい児は障害のある兄弟をもつ人を意味し,様々な心理的負担を抱えていることが知られている.一方で,青年期と成人期の間に位置する新しい生涯段階である成人形成期(10代後半～20代中盤)に達したきょうだい児が自らの経験をどのように意味づけ,その経験が彼らにどのような影響を及ぼしているかは十分に検討されていない.本研究は成人きょうだい児の生きられた体験をColaizziの手法により明らかにし,きょうだい児支援の手がかりを提供することを目的とする.なお,本研究は立命館大学の倫理審査を経て実施中の現象学的研究である.

P18A-16 血液透析患者の穿刺時の痛みに着目した学生の学び

石井俊行（兵庫大学看護学部）

本研究は、看護学生3年生の看護学実習で受け持ちした血液透析患者の穿刺時の痛みに着目した学生の学びを明らかにすることを目的とした。A大学研究倫理審査委員会の承認を得た後、「成人看護学実習Ⅰ(急性期)」で血液透析患者を受け持ちした学生2名に半構造化面接を行い、分析を行った。その結果、学生は受け持ち患者の穿刺時を見学し関係を通して、「生涯続く耐えがたい痛み」「我慢しなければならない痛み」「穿刺する人、技術によって痛みは日々変化する」の大きく3つに分けることができた。学生は穿刺に対して「生涯続く耐え難い痛み」であるが、生命を継続するために我慢しなければならない痛みとして理解している。「穿刺する人、技術によって痛みは日々変化する」には、医療従事者として患者の穿刺時の痛みについて理解を深め、痛みを軽減できる穿刺技術の習得と良い信頼関係性の重要性を学びとしていた。

**P18A-17 特別支援学級で学校支援ボランティアを行う大学院生の内的変容過程—
Auto-TEMを用いた質的分析—**

**境 悠太郎（広島大学大学院人間社会科学研究科）・朝岡寛史（広島大学大学院
人間社会科学研究科）**

現在多様化する学校の諸問題に対し、学校支援ボランティアが注目されている。中でも大学生による学校支援ボランティア（以下、SV）は親しみやすい面と指導的な面をもつため、教員とは異なる独自の役割がある。一方で、SVは慣れない学校現場に入り、教師と子どもの板挟みに遭いながら活動を行うことに様々な不安や葛藤を感じている。これまでの研究を概観すると、SVの意義や効果については論じられている一方で、SVがどのように不安や葛藤を克服し、独自の意義や役割を自認・獲得していったかは未だ十分な知見が得られていない。本研究では、筆者が自身のSVとしての活動と内的変容過程をAuto-TEMにより可視化することで、SVが活動において経験する不安や葛藤に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とする。加えて、筆者が困難を克服した過程を明らかにすることで、今後SVになる学生の心理的障壁の軽減に寄与すると考えられる。

**P18A-18 解釈的現象学的分析拡充版（Interpretative Phenomenological
Analysis-improved）の開発に関する研究—生き直しを語る女性と研究者の共同
構築の世界を目指して—**

吉田弘美（法政大学大学院人間社会研究科）

本研究の目的は、Smith.J.A（2009）らによる解釈的現象学分析（以下IPA）を拡充し、新しい質的研究方法論を開発することである。伊賀（2013）は、「IPAは一人称の経験談を三人称の視点から分析する『二重の解釈学』を特徴としているが、実際には二人称の方法論が紛れ込んでいる」と指摘する。解釈的現象学的分析拡充版（以下IPA-i）は、「語りえぬ言葉」として描かれる暗在的な世界に焦点を当て、解釈プロセスにおける相互連関によって共同構築される世界の中に、存在者（語り手・研究者）のありようを捉えることを目的とし「紛れ込んだ二人称の方法」をむしろ顕在的に用いることに主眼を置くものである。本研究では、依存症傾向を持つ女性の生き直しの語りをIPA-iを用いて分析し、語り手と研究者の主観の交差に生起する共存在性を考察する。IPA-iの開発を通して、言葉そのものへの問い直しの重要性を示したい。

P18A-19 「若者ケアラー」のキャリア選択—ケア体験の意味づけと人生への統合に着目して—

村上めぐみ（東京都）

「若者ケアラー」に関しては、ケアが心身の健康や生活の諸側面に及ぼす影響についての知見が蓄積されている一方で、ケアとキャリア選択との関係やケア体験の意味づけ方などの主観的体験を扱った研究は寡少である。本研究では、9名の若者ケアラーを対象に行ったインタビュー調査を通じて、ケアがキャリア選択に対してもたらす様々な影響を明らかにした。インタビューの多くは、ケアと仕事の両立への不安、進路選択に向き合う余裕のなさや就労のタイミングの遅れ、正規雇用で働くことの難しさなど、ケアによる様々な制約を経験していた。一方で、同様の境遇にある他者を支援したいという思いから援助職を選択するなど、ケア体験をキャリア選択にとって重要な意味を持つものとして意味づける者もいた。さらに、二年前のインタビューデータとの比較という縦断的手法を用いて、「若者ケアラー」の主観的体験の変化を詳細に描き出した。

P18A-20 入院中の脳卒中者における上肢の物語性—リハビリテーションに取り組む二症例に基づく検討—

三枝信吾（東海大学文明研究所）

入院中の脳卒中者2名の麻痺側上肢経験および上肢リハビリテーション過程における物語性の変容を探索した。研究デザインは質的な縦断研究とし、過去-現在-未来に依拠した半構造化インタビューを約18日間隔で全6回実施した。哲学者のポール・リクールは、物語的自己同一性が、同一性（同じであること）と自己性（私であること）が合致しようとする性格の極と、自己性が同一性から解放される自己維持の極という2つの極の間を往還すると述べている。本研究では、このような理論的枠組みに基づき、各当事者の脳卒中後上肢に関する物語性を分析（Sviland 2018）した。その結果、両症例において、時間の経過とともに麻痺側上肢に対する捉え方や意味づけを編成しながら、自己像や未来への展望を再構成していく様相が明らかとなった。本研究は、初台リハビリテーション病院の倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：初2024-28）。

P18A-21 教育学部で特別支援教育を専攻する大学生の教職志望度と障害観に関する調査研究

下中村 武（岡山大学学術研究院教育学域）

本研究は特別支援教育を専攻する大学生の教職志望度と障害観について明らかにすることを目的とした。2025年5月にA大学教育学部1年生15名を対象に、Microsoft Formsによるアンケート調査を実施し、13名から回答を得た（回収率86.7%）。調査項目は、教職志望度、障害観に関する内容であった。選択式項目は単純集計し、自由記述は意味のまとまりで切片化し、類似した切片を分類してカテゴリを生成後、カテゴリを類似内容で分類し、上位カテゴリを生成する。データ使用目的やプライバシー保護、自由意思の参加、同意後の撤回について文面で説明し、データ利用の同意を得た。障害観について、「心身に不調がある」という個人モデルに関する内容や「生きていくときに障壁となるが、環境が変わればなくなる」という社会モデルに関する内容、「体力がない、勉強ができるなどの個々人の特徴」という多様性に関する内容など、多様な考え方を持っていることが明らかになった。

P18A-22 1事例における青年期のアイデンティティ危機の様相から得られるもの—居場所アイデンティティグラムを用いて—

小沢一仁（東京工芸大学教職課程）

本発表は、青年期のアイデンティティ危機の様相（姿）を示す1事例から得られるものは何かを検討することを目的とする。まず、エリクソンのアイデンティティについての理論研究(小沢,2020,2020)に基づいて、調査研究のために居場所アイデンティティグラムが考案された(小沢,2024)。そして、目的的事例サンプリングを実施し、アイデンティティ危機を示す1名の大学生を対象に、面接法によって居場所アイデンティティグラムが描かれた。この結果から、アイデンティティ危機において、第一に、ひとりの人間として生まれたこと、過去・現在・将来の居場所、人生への願いにおいて、葛藤の配置が示され、第二に、個人に固有で独自なテーマ、主題が見出された。この1事例から得られたふたつの成果は、他の事例に何が共通し、アイデンティティ危機についての理論的理解にいかに関与するかを検討する。

P18A-23 聞こえの多様性の可視化を目指した当事者研究の実践

勝谷紀子（東京大学先端科学技術研究センター／放送大学大学院）・麻野美和（きこいろ片耳難聴のコミュニティ）・江連紀子（特定非営利活動法人愛知県難聴・中途失聴者協会）・佐野智子（国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部）・高宮明子（（株）愛真美）・渡邊歓忠（近畿LiD/APD当事者会）

2024年10月より月1回開催している聞こえに関する当事者研究会の取り組みを紹介し、聞こえの多様性の理解をめざした実践を報告する。本研究会は、軽中等度難聴、一側性難聴、LiD（聞き取り困難症）、メニエール病、希少疾患による難聴など診断名や身体障害者手帳の有無、難聴や聞き取り困難の程度を超え、多様な聞こえの当事者が集い、聞こえ・聞き取り困難の体験の共有と解明を行う当事者研究の基盤づくりを進めている。当初は各自の聞こえをめぐる経験の共有を中心に始まり、取り上げるべきテーマについての意見交換から、「聞こえ方の表現」「聞こえによる疲れ」「聞こえづらさにともなう症状」「聞こえはスペクトラム（連続体）」「加齢性難聴者の自覚の難しさ」「『障害受容』問題」「アイデンティティの問題」「気づかれにくいタイプの難聴の苦労」などのテーマ案が抽出され、ワークショップの企画・実践へと発展した。

P18A-24

（発表取り下げ）

P18A-25 自傷行為する子どもの支援のイメージ—教育関係機関で支援した経験のある心理職が用いたレトリックの分析から

新井素子（立教大学文学部）

本研究は、心理職が語りで用いたレトリックの分析から、自傷行為する子どもの支援のイメージを明らかにするものである。教育現場では自傷行為する子どもの支援に消極的な傾向があるが、その背景には自傷行為に関する知識不足などによる怖れがある（松本，2023）。支援の具体的なイメージを持つことでこのような恐れが軽減すると考えられる。機縁法により支援経験が豊かな6名（男女各3名）の心理職にインタビューを行い、作成した逐語は協力者に確認してもらった。Lakoff & Jhonsen(1986/1980)の考え方を参考に分析した結果、子ども自身は荒天や容器などに、支援はチーム競技や船の操縦などに喩えられ、支援のイメージは集団で危険の中にいる子どもを安全な場所に運ぶ「動」と、複数人の関わりで子どもを根づかせる「静」の2つに整理できると思われた。教師などが自傷行為する子どもを支援する際には、「動」と「静」の2つを意識して協力するのが望ましいと推察された。

P18A-26

（発表取り下げ）

P18A-27 授業の合意形成場面における聞き手の意見の多様性—聞き手の理由付けに着目して—

横山 愛（埼玉大学教育学部）

児童が授業内で話し合いを行う過程では、様々な意見を述べ合い、合意形成を行うことが目指される。授業では教師に指名された話し手が意見を述べ、指名を受けていない聞き手が同意し、承認することで学習が展開される（中田, 1996）。こうして聞き手が同意し、納得したことによって合意形成が可能となる。しかし、同じ授業を受けていても児童の考えや学びは多様であり、同意に至る背景には様々な考えがあることが考えられる。本研究では、授業において聞き手が話し手の意見に対してどのような意見を述べることで合意形成が行われるのかを明らかにする。そのために、A小学校2年生の国語の授業の事例を検討する。中でも、聞き手の本文の内容に基づいた意見に着目し、同意された意見の背景にある多様な着眼点を浮き彫りにする。本研究は学校長・教諭・保護者より研究の許諾を受け、所属先倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号R7-E-6）。

P18A-28 Bridging the gap between expectations and reality: The use of emotion regulation strategies by university English teachers

菅野雅代（仙台高等専門学校）

Background: Teaching is not just a simple process of transferring information, and teachers often find a gap between their teaching goals and classroom reality. Apathetic students may discourage and disappoint them, but some teachers strive to thrive in such situations. This presentation will report on a study of how language teachers addressed the gap.

Aim: The study aimed to investigate ways to enhance the professional capabilities of language teachers, focusing on the psychological aspects of classroom teaching.

Methods: Semi-structured interviews were conducted with ten university teachers who teach English to non-English-major students. The interview transcripts underwent a thematic analysis, using both inductive and deductive approaches based on the concept of emotion regulation (Gross, 2015).

Results: The results showed that teachers employed a variety of emotion regulation strategies to manage classroom situations, ranging from suppression to situation modification. Although cognitive reappraisal was the most frequently mentioned strategy, acceptance appeared to be a foundation for modifying the situation.

Conclusion: Teaching English requires constant efforts to bridge the gap between teacher expectations and classroom reality. Acknowledging negative emotions could motivate the pursuit of more inclusive classroom practices.

Gross, J. J. (2015). Emotion regulation: Current status and future prospects. *Psychological Inquiry*, 26(1), 1-26.

P18A-29 飛行操縦訓練の継続意志に関連する諸要因の探索的研究—ワークモチベーションの観点から—

佐藤暁子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

飛行機のパイロットなど、特殊な技能を習得するための訓練が必要とされる職業に就くことを目指す人々は、一般的にモチベーションが高く、多少の困難があっても根を上げずに目標に向かって最後まで努力することが求められる。しかし、最初はモチベーションが高くても訓練継続意志が途中で無くなることが少なからず存在する。これは人材育成に時間がかかる職種にとって大きな損失になると言える。

本研究では、この訓練継続意志の消失或いは回復がどのような要因と関連しているかについて、ワークモチベーション理論を援用し探索的に検討することを目的とした。そのため、航空自衛隊の操縦訓練期間中に継続意志が一度でも消失した隊員を対象に個別インタビューを行った。この結果から、ワークモチベーションと関連する諸要因の検討と訓練終了までの過程を検討し、心理的支援への示唆を提示する。

P19A-1 イメージ画にみる父子関係

久保田 楓（帝京平成大学大学院臨床心理学研究科専門職学位課程）・荘島幸子
（帝京平成大学健康メディカル学部心理学科）

本研究では父子関係に焦点を当て、子が父との関係をどのように捉えているかを明らかにすることと、父との関係の変化を捉えることの2点を目的として、イメージ描画法を用いて調査を行った。幼いとき・現在・未来の「私と父」関係のイメージ画について、構図の類型化と、ビジュアル・ライフストーリー（やまだ, 2023）の視点から見た父子関係の描かれ方の変化を分析した。その結果、出現割合は親子が比較的对等な位置に描かれる構図に偏ったが、やまだ（2023）の9つの基本形（包む、支える、見守る、並ぶ、向き合う、離れる、導く、与える、打つ）に収まる形となり、子にとっての父親像の多様性が示された。特に幼いときの絵は“世界を広げ、成長を促すような存在”や“遊び相手”としての父が印象的に描かれた。ビジュアル・ライフストーリーは“依存から独立へ”のストーリーが多く描かれ、心理的・物理的に独立し家離れしていく様子が示された。

P19A-2 「川の記憶」とまちづくりのナラティブ（2）—地域実践をとおして育んだ質的研究手法の可能性—

杉浦彰子（JA共済総合研究所）・奥村かえで（茨城大学人文社会科学部）・李 勇
昕（立正大学人文科学研究所）・安斎聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学
部）・小木 貢（東京大学産学協創部）・伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

本研究は、令和元年東日本台風による水害を契機に、茨城県内の被災した地域などをフィールドに、住民の語りや対話を通じた地域レジリエンスの向上とまちづくりを目指してきた。これまでに、語りを地図上に可視化する「語りマップ」などの「ビジュアル・ナラティブ・マッピング（VNM）」の手法に加え、印象的な語りのみを展示する「ナラティブの森」を考案し、地域住民のナラティブの掘り起こし・生成・共有というナラティブの回復の仕掛けを構築してきた。これらの手法は、地域の現場で住民と研究者がともに語り合い、課題に向き合いながら育んできたものである。現在は被災地から派生し、他地域の商店街のにぎわいづくりにも活用されてきている。本発表では、こうした地域の現場の中での実践が、質的研究手法としてどのように機能し、地域に根ざした知の創出にいかに関与しうるかを考察する。

P19A-3 がん患者支援におけるオンラインヨガの可能性

菅森朝子（立教大学社会学部）

今日、がん患者支援は多様な広がりを見せ、その一つとして健康行動の促進を目的とするヨガが注目されている。本研究は、がん経験者を対象にオンラインのヨガプログラムを提供するインストラクターR氏の活動に着目し、インタビュー調査を通じてオンラインヨガの可能性を考察する。R氏によれば、オンラインヨガは移動の負担がなく、画面をオフにして参加できるため、治療中であっても体調に応じて無理なく継続しやすいという。また、がんに関する知識を有する指導者が個別の状況に配慮しながら進行することで、参加者に安心感が生まれ、心身の緊張が和らぐ変化が実感されている。プログラム終了後には「おしゃべり会」が設けられ、参加者が気持ちを語り合い、同病者との交流の場ともなっている。患者会には参加しないが、同病者とのつながりを求める人にとって、この場は家庭でも病院でもない「第三の場」として支援的な機能を果たしていることが示唆された。

P19A-4 保育者と子どもの共主体 (Co-Agency) を可視化する試み

上村 晶（桜花学園大学教育保育学部）

本研究の目的は、昨今の保育・教育現場で注目されている共主体(Co-Agency : OECD,2019)をTEM(複線径路等至性モデリング)を援用して可視化する際の利点や課題点を明らかにすることである。20XX年度の1年を通じて、4歳児を担当する公立幼稚園教諭(経験年数3年目)へParallel-TEMで保育者と子どもの主体性の発揮度を線描と面積で可視化するよう依頼し、2-3か月に1度の頻度で半構造化インタビューとビデオカンファレンスを行った。また、年度末に本取組の利点と課題点をインタビューし、SCAT(大谷,2019)で分析した。その結果、保育のグラフィティカル省察や再実感、語りを通じた共主体意識の鮮明化・深掘りなどの利点が明らかになった一方で、個と集団で主体性の発揮度が異なる際の子ども側の描き方や、子どもがより低年齢児である場合の線描の難しさが課題として見出された。

P19A-5

(発表取り下げ)

P19A-6 女子大学生における美容医療選択の心理的プロセス—TEMを用いた質的分析—

高野眞生（関西大学大学院心理学研究科）

本研究は、女子大学生の美容医療経験者に焦点を当て、美容医療を選択するに至った心理的プロセスと背景要因を明らかにすることを目的とし、18歳から22歳の美容医療経験者4名に半構造化インタビューを実施し、複線径路・等至性モデリング（TEM）で分析を行った。その結果、美容医療行動の選択に至る心理的プロセスは「施術前」「施術決意」「施術後」の三時期に分けられた。共通の等至点（EFP）として「美容医療を受ける」、セカンド等至点（2nd EFP）として「自己像の変容」が確認された。この自己像は、自己肯定感や外見に対する自己評価の向上を通じて変容していた。また、対象者は美容医療を通じてコンプレックスの軽減を経験し、否定的な自己像から肯定的な自己像へと再構成されるプロセスが明らかになった。これにより、美容医療は単なる外見の加工手段ではなく、「自分らしくよりよく生きるための選択」として示唆された。

P19A-7 ベルクソンの時間論とTEA—分岐点に焦点をあてた理論的展開

宮下太陽（立命館大学、株式会社日本総合研究所）・安田裕子（立命館大学）・平井靖史（慶應義塾大学）

本発表では、TEAの理論的根幹として非可逆的時間を組み入れていることの意義を再考する。非可逆的時間とは、生きられる時間に力点を置いたフランスの哲学者ベルクソンの時間概念「持続」に由来する（上川, 2024）。TEM図で示される非可逆的時間は、当事者の経験に即した時間の流れを表しており、決して戻ることのない時間の持続の中で人の行動や選択が実現することを含意する（サトウ, 2015）。持続の本質は「未完了相」であり、それはものごとがまさに進行中の「しつつある」時間のあり方である（平井, 2022）。この「未完了相」に着目することで、TEAの実践がより豊かになることを本発表で示す。具体的には、①分岐を未完了相と捉えてインタビューすること。②分岐に焦点をあてたTEM図を描くこと。③経験の質的持続の中で人が発達（変容・維持）していくという理論的観点を強調すること。これらにより、TEA、ひいては質的研究の時間論的地盤を刷新することを提案する。

P19A-8 在日中国人女子留学生の化粧行動の変容と異文化環境とのせめぎ合い

李 心庭（関西大学心理学部）

本研究は、日本における中国人女子留学生の化粧行動の変容と、それに伴う心理的プロセスを質的に検討することを目的とする。異文化環境において、彼女たちの化粧意識や行動がどのように変化し、それに対してどのように向き合っているのかを明らかにする。

インタビューを通じて1名の対象者、3回のインタビューを通じてし、TEAを用いて分析を行なった。その結果、対象者は来日後に化粧に対する価値観が大きく変化し、「周囲の視線・同調圧力」や「日本社会における暗黙のルール」などの要因が化粧行動の選択に影響していることが示唆された。また、対象者は新しい文化とのせめぎあいの中、化粧を「日本社会に溶け込むための手段」として用いる一方で、自分の価値観を表現するための「自己主張の手段」としても活用していた。このように化粧を通じて自己表現を表す過程が見られた。

P19A-9 It's Japan not Japanese Students that Discourages Study Abroad Participations

ポーター 倫子（北陸学院大学）・ポーター リチャード（北陸学院大学）

Introduction: Despite substantial government investment, Japanese study abroad (SA) participation, particularly in long term, has declined. Prior research has examined various deterrents to SA, including student purported inward tendencies, yet scholars contend that broader socio cultural and external factors drive this inwardness—a view that remains under investigated. This study explores how both individual inward tendencies and socio cultural external pressures shape Japanese students' SA decision.

Methods: We surveyed 125 International Programs Personnel (IPP) at Japanese universities. Open ended responses were analyzed using the Steps for Coding and Theorization (SCAT) method.

Results: IPP identified an “island nation” legacy that sustains a Japanese only labor market and secure domestic careers, dampening SA motivation. A failure averse, norm compliant culture further stifles growth mindsets, as does ineffective English instruction leading many to forgo even short term SA. Although globalization and digital learning have expanded cost effective options, persistent language anxiety, financial/time burdens, and vague objectives reinforce risk aversion.

Discussion: Japanese students' so called “inward tendencies” stem from an insular labor market, failure averse norms, and an English curriculum that lacks practical application, all of which reinforce risk aversion. Although globalization has created more accessible SA pathways, financial/time constraints and societal conformity continue to pose significant barriers as students weigh the benefit of SA.

P19A-10 「居場所」支援の手前を捉える——〈人と場所をつなぐ〉とは別の回路から

河南真衣（大阪大学大学院人間科学研究科）

子ども／若者支援の方法論の一環として施行されてきた「居場所」は、その場の利用しにくさが課題化され、支援機関からいかにして「居場所」に接続するか、情報資源をいかにして利用しやすいものにするかが議論の射程に置かれてきた。そのうえで、利用しやすいように環境整備することが目指されている。しかし、このように人と場所を接続的に捉える在り方は、同時に大人が子どもの場所を規定してしまうという問題もはらんでいるのではないか。本発表では、発表者がスタッフを務める高校内の「居場所カフェ」事業で「私だったらここは居場所になっていない」と語ったスタッフの〈居場所観〉をインタビュー調査に基づいて検討する。「居場所」と〈外〉との差異、〈外〉での移行過程を分析し、人と場所がつながるといった接続のあり方とは別の回路を提案する。本調査は、所属機関の倫理審査委員会の承認と、協力者の同意を得て実施した。

P19A-11 名前復唱の失敗が引き出す人の応答行動：対話型ロボットとのやりとりにおける受容度との関連

駒崎俊剛（東京医療保健大学医療保険学部医療情報学科）

【目的と方法】本研究では、ロボットの発話の失敗を修正する過程であられる人の表情や発話を分析する。そのために、対話型AIと連携している音声認識・発声機能を持つロボットを用いた。設定したプロンプトは、ロボットに話した名前を復唱する際、1文字異なる文名前を出力するものである。2024年10月から12月にかけて、研究協力者の大学生5名は、個別にロボットと約15分、会話した。この様子を撮影し、会話と身体動作のトランスクリプトを作成し、ロボットの受容度を実験前後に質問紙により調査、実験終了後に撮影した動画を視聴しながら気がついたことを話してもらった。

【結果と考察】このロボットには視覚情報を認識する機能はない。それでも、ロボットが研究協力者の名前を修正する過程において、彼・彼女らは笑顔やジェスチャーを使い、ロボットへ応答していた。これらの動作はロボットの受容度と関連があることが推察される。

P19A-12 働く母親は子の不登校をどう語るのか—不登校初期の「働くこと」の意味づけに着目して—

斉藤明子（東京大学大学院教育学研究科）

子どもの不登校というライフイベントを、働く母親はどのように体験し、「働くこと」を自身の人生の中でどう意味づけてゆくのかを明らかにすることを目的にして、本研究は、子どもの不登校を経験した働く母親へのインタビュー調査を行う。

不登校支援において母親はキーパーソンであるが、母親のライフストーリーに焦点を当てた研究は蓄積のさなかにある。一方、共働き世帯の増加に伴い、母親の働き方やキャリアも多様化している。本発表では、働く母親が子どもの不登校初期を回顧した語りに着目する。先行研究では、初期の動揺期から事実の受容に至る過程において、母親が自己や子ども、家族、周囲との関係を再構築し、成長していく姿が示されてきた。本調査では、不登校初期における「働くこと」の意味づけを探索的に検討する。

P19A-13 外国人ビジネスパーソンにおけるコンフリクトの意味づけの変遷—日系企業の新入社員に対する縦断的なインタビュー調査から—

立川真紀絵（大阪大学日本語日本文化教育センター）

本研究の目的は、日系企業で勤務する外国人ビジネスパーソンがビジネス場面において直面しているコンフリクトに対してどのような意味づけを行っているかを分析し、その変遷を解明することである。

本研究では、中国にある日系企業の中国人新入社員に対して、一年間、複数回にわたる縦断的なインタビュー調査を実施した。発表では、彼らがビジネスパーソンとしての経験を積み重ねていく過程で、自分自身の「できないこと」や「わからないこと」に解釈を加えながら、それらを受け止めていく様を分析する。日中間の問題にとどまらない様々なコンフリクトに対する意味づけの変化の過程を明らかにすることにより、ビジネス場面における若手のビジネスパーソンの成長プロセスを捉えることを目指す。

なお、本研究で使用するデータはすべて、調査協力者に対して、書面および口頭にて説明を行い、承諾を得た上で収集し、利用しているものである。

P19A-14 音楽の協働的な創造場面における芸術的目的の再構成—作曲家をめぐるコミュニケーションに注目して—

眞崎光司（明治大学国際日本学部）

本研究は作曲家・演奏家・録音技術者の協働場面で、熟達した作曲家が芸術的目的の達成にどのように取り組むのかを解明することを目指す。先行研究によると、作曲家は演奏家や技術者との協働において協働の場を調整する役割を担うとともに審美的な基準を示す役割を担う必要があるが、この2つの役割の間に葛藤が生じることが明らかになっている。そこで本研究では協働場面において熟達した作曲家が葛藤の中で芸術的目的の達成にどのように向かうのかを明らかにする。方法としては作曲家の参加する楽曲の収録現場に参与観察するとともに一部の収録参加者にインタビューを実施した。調査協力者には許諾書を示すと同時に口頭で研究内容を説明の上、研究の参加に同意を得た。結果、協働場面での作曲家を中心としたコミュニケーションにおいて演奏家の身体、楽器の特性、楽譜の解釈に合わせて技術的制約と審美的基準が巧みに再構成されていくことが明らかになった。

P19A-15 障害のある子どもの保育における「わからなさ」の意味—X特別支援学校での自由な「遊び」に着目して—

加藤夢子（東京大学教育学研究科）

「遊び」は、認知・社会・言語等の発達を促進するだけでなく、自己表現の手段としての側面ももつ。しかし、障害のある子どもの複雑な思いを読み取ったり想像することは本人自身が言葉を上手く扱えないため難しく（田中, 2021）、関わる他者は「わからなさ」を常に抱えながら子どもたちに向き合っていると考えられる。本研究では、自由な「遊び」を中心とした保育が特色である私立のX特別支援学校をフィールドとして、①職員へのインタビューにより、「わからなさ」を抱えながら保育をすることへの意味づけと、②自己エスノグラフィにより、X特別支援学校の「保育者」でもある筆者自身の感じる「わからなさ」への意味づけの変化、について検討している。子どもたちとの具体的なエピソードを中心に引きあがりながら子どもとの関係性の特徴を抽出し、その上で「わからなさ」を排除せずに「わからなさ」とともにある保育について考察する。

P19A-16 原発事故による長期避難の体験—若者の語りから—

佐藤 星（東京大学大学院教育学研究科）

東日本大震災による原発事故により、多くの住民が居住地からの強制避難を余儀なくされた。災害時における被災者のストレスとして、慣れ親しんだ環境の喪失に伴う悲嘆が知られている（Raphael, B., 1986/1989）。特に福島県における社会的議論として、自殺率の高さや生活が失われたことへの訴訟があげられ、原発事故による強制避難という体験は単なる地理的移動を超えて心理的影響をもたらしている。18歳未満の子どもの避難者数は約3万人にのぼるが、震災当時子どもであった者の長期避難体験に関する研究は寡少である。以上を踏まえ、本研究では東日本大震災による原発事故で長期避難を経験した若者たちの主観的体験を明らかにすることを目的とする。20代の若者を対象としたインタビューを実施し、その結果を質的分析により検討する。分析から、時間の経過や出来事を機に、当時住んでいた場所への思いが変容してゆく動的なプロセスがみえてきた。

P19A-17 学習支援における大学生支援者のコミットメント—大学生支援者の活動の意味づけに着目して—

三井小波（北海道大学大学院教育学院）

困窮世帯の中学生を対象とした学習支援では、大学生が支援者として活動することが多い。中学生と大学生支援者が良好な関係性を築くことは、学習支援の成立条件となっており、そのためには大学生支援者の学習支援へのコミットメントが重要である。しかし、大学生支援者は、いかにして学習支援にコミットするのか。またその際にどのようなプロセスをたどるのかは明らかではない。

そこで本研究では、学習支援に参加している大学生支援者に半構造化面接を実施し、学習支援を行うなかでどのような経験をしているのか、ナラティブ分析を行った。そして、大学生支援者の矛盾や葛藤を伴う支援の経験の意味づけから、大学生支援者はどのように学習支援にコミットできるようになるのか、またどのような時に支援者としての在り方が揺れ動くのかを考察する。

P19A-18 「教師を真に支援する」とは何か—PAC分析が明らかにする若手英語教師の葛藤と成長—

伊藤仁美（環太平洋大学次世代教育学部）

若手教師の専門性開発は、自覚的課題に焦点が当たりがちだが、真の苦悩は言語化されにくい潜在的課題に起因する。本研究は、この潜在的課題が授業実践に与える影響と、本人ですら気づかない自己像の乖離に着目し、教師の自信回復と専門性発達を促す支援のあり方を提言する。本研究では、質的分析と多変量解析を融合したPAC分析（個人別態度構造分析）を用いる。中学校英語教員1名を対象に、「英語教師である自分」と「授業実践」のイメージ構造を探索する。これにより、教師の無意識下の葛藤を顕在化し、潜在的な強みを引き出すことが可能となる。本発表では、この事例研究から得られた分析結果をもとに、教師が内面的な葛藤を乗り越え、強みを活かした指導法を確立するための示唆を提示する。これは、従来の技術指導を超えた、教師の内面に寄り添う「真の成長支援」のあり方を再考するための重要な手がかりとなるだろう。

P19A-19 教室における差異を包摂した民主的な秩序形成の過程—多様な子どもたちの参加を準備し協働を創造する教師の実践分析から—

金田裕子（宮城教育大学教職大学院）

本発表では、小学校6年生のある教室において、授業及び授業外のやり取りを通して子どもたちの多様な参加がつくられ協働的な関係が築かれていく過程を構造的に読み解く。協働的な学習の参加構造（participation structure）は、話し手と聴き手が話題を媒介に形成する「会話フロア」の中でもタイプⅠ（話し手と聞き手が相互にやり取り）を基盤として多元的かつ多層的につくられている（金田、2014）。事例では、まず個々の子どもの特徴により空間的・時間的に多様な参加が保障されていた。また会話フロアのタイプは、教師が聞き手として話し手の発言権を阻害せずに口をはさむタイプⅡ-Aを多く生成していた。この教師の立ち位置が、授業ルールを順守する子どもの参加だけでなく、逸脱する子どもとの交渉により「第三の空間」（笹屋、2015）を形成し、新たな参加と民主的な公共圏の生成を導いているのではないか。

P19A-20 「食えること」の意味—拒食や過食経験者の語りから—

小竹 栞（東京大学教育学研究科）

本研究の目的は、一定期間にわたり拒食や過食を経験し、現在はその症状が消失している当事者が、「食えること」とどのように向き合ってきたのかを明らかにすることである。我が国では摂食障害が心理的・社会的・文化的・生理学的要因から理解されてきた一方で、当事者固有の食行動体験や、そこに込められた意味は十分に検討されてきたとは言いがたい。また、「食えること」は症状の有無にかかわらず日常的に継続される行為であり、症状が消失していく中で、当事者がどのように食と関係を結び直しているのかを探る意義は大きい。本研究では、過食・拒食といった症状を経て、現在はそれらの症状が見られない当事者に対して半構造化インタビューを行い、その語りを質的に分析する。食との関係の揺らぎや意味づけ、その変遷を検討することで、「食えること」が当人にとってどのような意味をもち、いかに立ち現れてくるのかを明らかにすることを目指す。

P19A-21 生成AIテキストを用いた図書館レファレンス・サービスの可能性

辻 高明（立命館大学文学部）

生成AIの登場と普及は、図書館ライブラリアンのレファレンスサービスのあり方を大きく変化させる可能性がある。つまり、図書館のレファレンスにおいて、ライブラリアンと相談者のコミュニケーションに生成AIを利用することで情報サービスの充実が期待できる。本発表では、生成AIテキストデータ＝質的データとして捉え、レファレンスでの両者のコミュニケーションで生成AIを用いる意義と課題について報告する。

P19A-22 高齢期において多様な社会参加活動の中から子育て支援を選択する背景要因の検討

田中元基（淑徳大学人文学部）・徳永聖子（常葉大学保育学部）

高齢期における社会参加活動は、社会的孤立の予防、QOLの向上といった好影響を及ぼすことから、近年、積極的に行うことが推奨されてきている。本発表では、「ファミリー・サポート・センター事業（子育て支援してほしい者（依頼会員）と子育て支援したい者（提供会員）をマッチングする事業。以降、ファミサポ）」に着目し、高齢期にファミサポで提供会員として活動する者が、なぜ社会参加活動をするのか、なぜ多様な活動の中から子育て支援（ファミサポ）を選択するのかについて報告する。本発表では、第一発表者の所属機関で倫理審査委員会の承認を経たうえで、提供会員として登録・活動している者8名（66-79歳、女性6名・男性2名）に半構造化面接を行い、定性的コーディングに基づく内容分析を行った。分析の結果、子育て支援という社会参加活動を行う背景として「社会に対する恩返し」や「当たり前の活動」といったカテゴリーが見いだされた。

P19A-23 沖縄の保育はどのように研究されてきたのか

天願順優（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

本研究は、「沖縄の保育はどのように研究されてきたのか」という問いを軸に、これまで蓄積されてきた沖縄の保育・幼児教育に関する先行研究を整理・分析し、その学術的特徴を明らかにすることを目的とする。

本発表では、収集した先行研究をもとに、文献を分類・整理し、沖縄の保育がどのように研究されてきたのか、その変遷と特徴を検討する。特に、沖縄固有の文化が制度の枠組みの中でどのように位置づけられ、そこにどのような葛藤が生まれてきたのかに注目する。

また、本研究では、かつて沖縄で顕著だった「5歳児保育問題」に象徴されるような制度的な過渡期や終焉期の動きにも着目し、それを入り口として、地域文化の継承と変容、さらには制度と現場の実践との関係性を再考する手がかりを探る。こうした視点から、沖縄の保育に関する研究の全体像を見通すとともに、今後の実践的・理論的探究に資するレビューの意義を提示したい。

P19A-24 日本質的心理学会第21回大会のサインデザインの実践と考察

小池星多（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）・露木亜海（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）・平井爽乃（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）・山口琉生音（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

著者らは、社会構成主義の観点から2024年、成城大学で開催された日本質的心理学会第21回大会の会場サインデザインなどを学会員とコミュニケーションを取りながら学会のコンセプトの理解を深めることで取り組んだ。そして以下のことを考察した。(1) サインは関係性から成り立つ。日本質的心理学会会員、大会実行委員、デザインコミュニティ、既存会場デザイン、研究室のメンバーなど様々な人との関係性の中でサインはデザインされる。(2) 現場でサインの意味が作られる。当日、現場ではサインの設置場所が変更したり、著者らが想定していない用途で利用されたりしていた。(3) サインは「関係的」で「状況的」なものであり、デザインして終わりというものではない。常に関係性の中でサインの意味合いや役割は変化する。

P19A-25 義手をめぐる身体受容と意識活動

久保田真弓（元関西大学総合情報学部）

本論では、義手をめぐる身体受容の過程を見ることで、自己の存在について考える。私の身体障害者手帳には、「3級2種右前腕亡失」と記されており、顔写真を入れ替えただけで同じ等級のものを65年あまり所持している。つまり私の右腕は、物理的に変化はないのだが、このような身体を受け入れを巡っては、成長するに伴って変容してきた。

一般的に変容を捉えるには、2つの事柄や状況を比較し、類似点や相違点を見つけたり、視点を決めて変化を時系列に並べたりする。しかし、西田幾多郎は、直接経験の立場から意識現象を考察し、真の实在とは一つに統一されているものであるとし、それとともに対立を含んでいるものであるという。すなわち意識対象の対立により分化・発展が起こる過程で無限にそれらを統一する方向に進む行為であるという。そこで、本論では、過去に書いた資料等を自分自身で振り返り、西田の観点から分析し、考察する。

P19A-26 小学校における算数の協働的な学習場面の分析—スロー・ルッキングを手がかりに—

司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）・小森国雄（那珂川町立馬頭東小学校）

小学校の算数の授業において文章題を苦手とする子どもは多い。しかし、子どもたちの学習の様子を観察すると、それぞれが持っている知識や生活経験、学び方の個性など、多様な力を生かしながら問題解決に取り組んでいることがわかる。したがって、学びの多様性が認められお互いの考えが生かされるような協働的な学習場面であれば難易度の高い課題にも取り組むことができるのではないかと考えられる。本研究では小学校において様々な知識や考え方の組み合わせが必要となるような複雑な算数の課題に協働的に取り組む学習場면을観察し、子どもたちの思考の多様性がどのように関係し合いながら学習が進められているのかを分析する。分析においては、Tishman（2018）のスロー・ルッキングを手がかりとし、子どもたちが時間をかけて具体物を「見る」プロセスに着目した。なお、研究に際しては事前に学校からの許可を得た上で行い、個人情報の取り扱いに十分に配慮した。

P19A-27 保育者の対応はどんな文脈に支えられているのか？—3歳未満児クラスの給食場面に着目して—

曾 玉儒（広島大学大学院）

本研究は、3歳未満児クラスの給食場面において、保育者が子どもにどのように対応しているのかを、文脈に着目して明らかにすることを目的とする。保育者の対応は、子どもの行動だけでなく、周囲の環境、他の活動との関係、保育者自身の経験や意図など、複数の要因に支えられていると考えられる。本研究では、3歳未満児クラスの給食場面の記録および保育者の語りをもとに、コードを抽出し、質的に分析した。その結果、保育者の対応は、文脈を読み取りながら即時的かつ柔軟に行われていることが示された。

P19A-28 「文化的越境」の再考—重篤な疾病を抱える海外在留邦人を支える家族の葛藤と経験を事例に—

市川章子（国立国語研究所）

我が国の在留邦人は約129万で前年とほぼ同数となった（外務省「海外在留邦人数調査統計」）。そのうち、約80%が成人である。本研究の目的は、指定難病の診断を受けた当事者を支える家族の葛藤と経験について、家族間の共有と社会（行政・医療）へのアクセス上の過程を可視化する。その上で、2000年代から議論され始めた「文化的越境」について、森（2009）の提案した手続きを軸に分析する。まず、沖潮（原田）（2013）を参考に研究を進めた。その後、森（2009）を手がかりにTEAで可視化した。本研究の意義は、海外在留邦人に関わる医療従事者や地域で福祉に関わる人々が重篤な疾病を抱える当事者の日常理解を深め、家族を含めた治療や支援について検討する材料となることを目指している。

一般研究発表（ポスター） 優秀賞選考セッション

P18B-1 「悩めなさ」についての考察—マンガ作品の登場人物に見られる葛藤の抱えられなさを例にして—

鳥本大貴（愛知学院大学心理臨床センター）

「悩めない」とは、葛藤を抱えることが困難で、主体的に悩むことができない傾向を指し、現代青年の特徴として報告されてきた。しかしその具体像や支援についてはまだ十分な知見が蓄積されておらず、多角的な視点からの研究が期待される。そこで本研究では現代のマンガ作品の考察を通して新たな視座を得ることを試みた。『進撃の巨人』のライナー・ブラウンと『チ。—地球の運動について—』のオクジーのセリフや描写を取り上げ、彼らの葛藤の抱えられなさをナラティブ的視点から考察した。ライナーは、複数の役割を演じる中で主体を見失い、解離的な言動や自殺企図にまで及んでいた。オクジーは、知への関心を抱きながらも罪悪感や劣等感の強さから問いを持つこと自体を抑圧しており、星空を見上げることを回避していた。両者の姿には主体の欠如や自己不確実感が反映されており、「悩めなさ」の臨床的理解を深める象徴的存在であると考えられる。

P18B-2 ワークショップ「ナンセンス・エスノグラフィ」の方法と結果

楠見友輔（信州大学教育学部）

以下のように実施したワークショップの結果を報告する。

ワークショップ参加者：日本語教育の研究を行っている研究者と学生12名。（研究が初めての人が多い）

問い：「たりり」と「みたけよぐり」が繋がったり離れたりする時に発生する作用の、肯定的な側面と否定的な側面を明らかにして下さい。

スケジュール

- ・研究計画（10分）…いつ？どこで？どのくらいの期間？、協力者／対象は？、調査方法は？分析方法は？（現時点での計画であり、調査の途中で変わっても良い。）
- ・調査（30分）…大学のキャンパス内で行う。30分程度で終えること。
- ・分析（20分）…量的でも質的でも良い。結果が説得的に示されるような分析を行うこと。
- ・考察（20分）…「問い」に対する明確な答えを見出すこと。
- ・発表（20分）…発表の時間には会場に戻っていること。各グループの発表時間5分で、「調査」「分析」「考察」の概要を発表する。

P18B-3 刑務所における対話実践の特性—対話実践のやりとりと職員へのインタビュー調査から—

川崎 隆（別府大学）・北村篤司（昭和音楽大学）・齊藤哲也（別府大学）

近年我が国の刑務所においては、オープンダイアログをベースとした対話実践が導入され、再犯防止や社会復帰支援につながる有効な取り組みとして期待されている。しかし、オープンダイアログは医療領域において発展した取り組みであり、施設の特徴、参加者の関係性の質が異なるために、矯正施設で行われる対話実践は違った様相になると予想される。本研究では、刑務所における対話実践の特性を明らかにすることを目的とする。刑務所で実施された対話実践における被収容者と職員のやりとり、対話実践を行った職員に対するインタビューを通じて、対話実践がどのように行われなにかもたらされているのか、その現象的独自性について考察していく。

P18B-4 現代大学生の人生の目的と意味の特徴

櫻井香乃（別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻）・川崎 隆（別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻）

17～19歳を対象とした日本と諸外国の人生の目的・意味を比較した調査では、日本が一番低い結果を示しており（日本財団，2024），日本の若者は他国と比べ、自身の人生に対して目的や意味を持っている個人は少ないといえる。本研究では、そのような現代の大学生が人生に対してどのような意味や価値観，考え方をもっているのかを明らかにすることを目的とした。PIL（Purpose in Life Test）テスト日本版（岡堂，1993）を使用し、大学生195名に質問紙調査を実施した。文章完成法で回答した内容については、意味内容から分類・カテゴリー化を行った。さらに、文章完成法の質問項目を生きがい感と死生観の2領域に分類した。領域ごとに文章完成法で得られた回答文の頻出単語，生きがい感得点の高低からみる語の使用特徴について，KHcoderを用いてテキストマイニングを行った。

P18B-5 質的研究はどのような経験を扱うのか？—移境態(liminality)における経験—

廣瀬太介（立命館大学人間科学研究科）

質的研究法マッピング(サトウ, 2019)では、質的研究をするにあたって、「構造」と「過程」という軸と「理念」と「実存」という軸の二つを組み合わせることのできる「モデルの構成」「記述のコード化」「理論構築」「記述の意味づけ」という4つの象限を参照して研究法を選択することを勧めている。このように、質的研究では、「どのように」経験を研究するかについては検討されてきたものの、「どのような」経験を研究するかについては検討されることが少なかったように思う。本発表では、近年注目されている移境態概念を心理社会的に研究してきたStenner(2017)を参照しながら、質的研究が対象としている経験が「どのような」ものかについて検討する。

P18B-6 ICTの活用はどのように子ども同士の対話を促すのか—複線径路等至性モデリング (TEM) を用いた分析から—

大道香織（広島大学大学院人間社会科学研究科）・石川 徹（広島大学大学院人間社会科学研究科／高崎健康福祉大学）・渡邊真帆（福山市立大学）・李 睿苗（広島大学大学院人間社会科学研究科）・田島美帆（広島大学大学院教育学研究科）・清水憲志（広島大学大学院人間社会科学研究科／中国短期大学）・岸本有紀子（広島大学大学院人間社会科学研究科）・玉城美千子（広島大学大学院人間社会科学研究科／あおぞら幼稚園）・周 偉傑（広島大学大学院人間社会科学研究科）・ニフユス美冬（スマートエデュケーション）・下川功喜（スマートエデュケーション）・宮島衣瑛（広島大学大学院）・中坪史典（広島大学大学院）

幼児教育施設におけるICTは、対話を増やすツールとして有効である(e.g., Studhalter et al.)。OECD (2023)によると、子どもたちの音声や、写真等のICTを使用し、子ども同士が相互に関わり合い対話することで、家庭では必ずしも得られない体験が得られるという。さらに、一時的な遊びに留まってしまい、経験的な学びが深まらず、保育者によるICTに関する研修などの課題もある。また、保育者がどのように考え、子どもと関わり、ICTを活用していくのかが重要である(e.g., Davoud & Bourbour 2024)。子どもの直接体験を広げるICTの活用事例も報告されているが、幼児教育ではまだ十分に検討されておらず、その実践は限られており、より研究の蓄積が必要である(文部科学省 2024)。以上より、本研究では、ICTを導入するようになり、どのように子ども同士の対話が促されるようになったのか、その過程を保育者の語りから複線径路等至性モデリング (TEM) を用いて分析した結果を報告する。

P18B-7 森での保育活動は子どもに何を与えうるのか

加藤 望（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）・肥田 武（一宮研伸大学看護学部）・内田千春（東洋大学福祉社会デザイン学部）・ポーター倫子（北陸学院大学教育学部）・中坪史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）

保育・幼児教育実践において自然を活用することは、子どもたちのホリスティックなウェルビーイングと豊かな発達に役立つとして各国で着目されている（Kiviranta et al. 2024）。本研究では、各国の保育者が、自然環境の一つである森での保育活動をどのように捉えているのかを明らかにし、これが子どもに何を与えうるのかを検討する。

研究方法論は、多声的ビジュアル・エスノグラフィー（Tobin et al. 1989）である。自然豊かな某幼稚園（日本）で撮影された日常的保育の映像を話のきっかけとし、米国・瑞国・日本の保育施設においてそれぞれにフォーカス・グループ・インタビューを実施した。

その結果、各国の保育者は森での保育活動を、文化的背景により現代社会において不足する事象をそれぞれに補うものであると捉えていることが分かった。例えば森は、子どもたちにとって、厳格な日常規制や固定化された発達の観点から逃れられる場、地球環境を守るための知識を得る場である。

P18B-8 「原爆」「被爆者」を体験者はどのように意味づけるのか―「生きる」を支える2つの方法―

松尾純子（千葉県スクールカウンセラー）

今年、高齢化を理由に被爆者実態調査が終了した。〈原爆の語り〉の継承を目的としたライフストーリー研究は、「平和、反核」を「反体制的言説」と批判し、相互行為からインタビューの声を聴き取るものの、その解釈は研究者の関心に回収される。本研究は、「原爆被害者相談員の会」で学んだ「被爆者と共に」というイーミックな視点から、ナラティブ・インクワイアリーを実施し、被爆者の生活の言葉をナラティブとして読み取ることを目的とする。方法は、被爆者相談所に属するA、原爆被害者相談員の会に属するBに、論理実証モードの「原爆」「被爆者」がナラティブモードでどのように解釈されるのかを、パースの「演繹-帰納-仮説形成」で分析した。結果、「原爆」「被爆者」の定義を、Aは「私たち」は「でなければならぬ」と権威的に演繹し、Bは「私」は「でないかもしれない」と遡及的に仮説形成していた。生きる場が解釈に影響することが考察された。

P18B-9 日中韓アナウンサーの顔写真にみる共通性と文化的差異

木戸彩恵（関西大学文学部）・李 心庭（関西大学心理学研究科）・高野眞生（関西大学心理学研究科）

本発表では、日中韓の女性アナウンサーのポートレートを対象に、ビジュアル・ナラティブにおける異種むすび法を用いた分析結果を報告する。各国のアナウンサーを複数名取り上げ、メイク、髪型、服装といった装いの要素がどのように組み合わせられ、職業的イメージや文化的背景をどのように反映しているのかを検討した。分析にあたっては、3名の分析者がそれぞれのポートレートに特徴的なナラティブを描き出し、個々の演出スタイルや印象の違いを明らかにした。3名の分析を異種むすび法により検討した結果、文化圏ごとの美的規範やメディア慣習に起因する差異が見られる一方、国を超えて共通する女性アナウンサーの職業的イメージの表現も確認された。本研究は、写真を媒介したビジュアル・ナラティブ分析の有効性を示し、メディア表象研究に新たな視点を提供するものである。

P18B-10 創作的実践における参加と正統性の構造に関する一考察

新田一洋（青山学院大学社会情報学研究科）

本研究は、創作的実践において、正当的周辺参加（LPP）の枠組みにおける「正統性」がいかに構築・変容されるのかを検討することを目的とし、大学創作ダンス部における作品創作過程を対象に、参与観察に基づくエスノグラフィ的記述を行った。特に、発足初期からの熟達者と、経験の浅い成員による関与の在り方に注目し、創作の中で正統性がどのように移行・再構成されていくのかを分析した。その結果、正統性は制度的役割や経験年数に依拠して固定的に割り当てられるものではなく、創作における貢献や相互行為を通じて動的に生成されることが示唆された。本発表では、LPPの枠組みに再考を促し、創造的実践における学習・参加の構造を再検討する理論的拡張性を示す。

P18B-11 幼稚園5歳児の学級談話における発表者への質問の形成—聞き手による「言い換え」に着目して—

西井宏之（白梅学園大学大学院）

本研究では、幼稚園5歳児の学級談話において、聞き手が理解の志向性をもちながらいかに質問を形成するかということを明らかにする。具体的には、聞き手が発表の一部を「言い換え」で質問する行為に着目し、9月から3月までを3期に分け、延べ52日分の学級談話について分析した。「言い換え」は期を追うごとに概ね増加し、[推察]、[補足]などの下位カテゴリーが抽出された。例えば、糸電話制作が難航したと話す発表者に対して、聞き手は「声が聞こえなかった？」[推察]、「穴をあけても糸が通らないってこと？」[補足]と質問することで、発表者の困難さが明らかになっていく。聞き手が「言い換え」によって質問するには、発表者の発話を適切にふまえる必要があり、他者の発表内容を理解しようとする志向性がある。すなわち、「言い換え」による質問の形成は、他者の発話を自らの認知に関連付け、幼児なりに議論の端緒を開いていることといえよう。

P18B-12 家族関係が悪化する過程と現在の病状に対する意味づけの検討—双極症患者の生活史から

松元 圭（新潟医療福祉大学社会福祉学科）・三品拓人（筑波大学人文社会系）

精神障害の発症に養育環境がもたらす影響については、多数蓄積されてきた。また双極症当事者の自由記述回答においても幼少期に望ましくないように見える複数の経験が存在していることが指摘されている（三品・松元2024）。

本報告では「双極症患者がいかに家族を経験し、その経験をどのように意味付けているのか」を明らかにすることを目的とし、双極症患者1名（30代後半・女性）の生活史を家族との関係により焦点を当てて詳細に聴き取った。

語りからは、家族成員へのネガティブな解釈と同時に家族関係が悪化していく契機となっている内容を捉えることができた。具体的には、父親と母方祖母との関係悪化、習い事をめぐる母親とのやりとり、養育の脅しとして使われる父親、大学入学後にも継続される過干渉、不仲な父母の間を取り持つ役割、があげられる。報告においてより詳細な情報を開示する。

P18B-13 オーケストラ演奏の現場にみる「意味を創り、共有する」実践—指揮者の身体技法と言語的指示の特徴に着目した事例研究—

丸山 慎（駒沢女子大学共創文化学部）

本研究の目的は、オーケストラ演奏の現場（リハーサルおよび演奏会の本番を含む）を対象にしたフィールドワークから得た観察データを用い、指揮者が示す多様な身振りや言語的な指示についての事例分析を通して、音楽表現を創造する実践のダイナミクスを記述することである。本研究で扱うデータは、わが国を代表する指揮者の1人で、2024年末で指揮活動から引退した井上道義氏が音楽大学の選抜メンバーで構成されたオーケストラを指揮した時のものである。参加学生を対象にしたアンケート調査により、演奏者側からみた井上氏の指揮に対する印象や特徴（例えば教科書的、機械的ではない指揮と豊かな語彙力等）を抽出し、それらを実際の演奏場面の事例と絡ませながら、本研究では、音楽演奏という高度な認知的・創造的コミュニケーションの実践の様相に迫るとともに、学生オーケストラを対象としたことによるアート教育としての実践の意義についても考察を展開する。

P18B-14 人の育ちにおける「目に見えないもの」の意義を探る（第二報）—サンタクロースの「贈り物」とは何なのか—

藤井真樹（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）・西村美佳（金城学院大学人間科学部）・勝浦眞仁（同志社女子大学現代社会学部）

昨年の発表では、『人の育ちにおける「目に見えないもの」の意義を探る』の論題の下、「サンタクロースを信じる体験とはどのような体験なのか」について焦点を当て考察した。そこでは①「目に見えない存在」と交流を図ろうとする姿や、②「いるかいなかかわからない不確実な世界の中での遊び」という体験の獲得などを見出した。

またインタビューの中では、語り手それぞれの「サンタクロースをめぐる物語」があることが見えてきた。それらは、サンタクロースのイメージそれ自体を初めとして親子のやりとりの中で徐々に形作られ、実在しないサンタクロースのいる世界を親と子のあいだで共有することによるある種の遊びのあるやりとりが生まれていた。そこで本発表では、その「目に見えない存在」としてのサンタクロースが、子に「贈り物」を送る者として介在することによって、親—子の直接的なやりとりによるものとは異なる子どもの育ちの可能性を明らかにする。

P18B-15 降園の時間帯において子どもたちはどのように遊ぶのか—環境の不安定さに着目して—

渡邊真帆（福山市立大学教育学部）

近年、子どもが保育施設で過ごす時間の延長に関する施策が拡充され、帰りの会頃からの降園の時間帯の保育が注目されている。降園の時間帯の保育について保育者は、開放感のある雰囲気遊びが展開する一方子どもの一日の疲れが表出する時間帯として捉えていると明らかにされ、子どもを取り巻く環境の不安定さも示唆された（渡邊2023）。

以上を踏まえ、本研究の目的は、降園の時間帯において子どもたちがどのように遊ぶのか、遊びを取り巻く環境を含め明らかにすることである。2024年4月、ある保育園にてビデオカメラを用いたデータ収集を行った。園庭での魚釣り遊びを中心に撮影し、複線径路等至性モデリング（TEM）を用いて分析した。結果、保育者の連続的な降園対応や友だちの降園等、複数の不安定さ（SD）がある中で、子どもたちが気持ちに折り合いをつけながらEFP「明日も続きをしたい期待感をもつ」に辿り着く過程が明らかになった。

P18B-16 心理専門職における相互的な継承プロセス—語り合いを用いた検討

依田尚也（駒沢女子大学）

臨床心理士や公認心理師といった心理専門職は、先達との濃密な関係、いわば師弟関係の中で修練を積むことが重要であると言われている。この師弟関係は、『教える→教えられる』という一方的なものではないだろう。両者の間で専門性が継承されるだけでなく、互いの専門性をさらに深化させうる、相互的なプロセスであると推察される。そこで、相互的なプロセスの当事者同士であった先達と後進がお互いに『語り合う』という共同構築的なインタビューを援用することにより、専門性の継承、深化といった内実さらに迫ることができるのではないだろうか。これによって得られた知見は、心理専門職の養成教育をより充実させ、さらには次世代への継承を促す上で、役立つ可能性があるだろう。本研究では、この両者の語り合いにおいて生み出された言葉をできるだけ詳細に記述しながら、上記の継承プロセスについて質的に検討することを目的とする。

P18B-17 パーソナリティを取り戻す—渡邊芳之のパーソナリティ観の批判的継承

—

仲嶺 真（荒川出版会／国際経済労働研究所）

渡邊（2010）は、行動に現れる個性を生み出す内的な実体としてのパーソナリティを批判し、パーソナリティを(a)状況・人・行動が織りなす力動的相互作用全体、(b)それ生み出した個人の歴史や他者との関係性のメタファーとしてとらえた。aは形而上学（心的実体）を退けた点で有望な方向であったが、心的概念を必要としない。渡邊では心的概念の必要性を確保するためにbを要請したが、そこで「個人の意味、思考、意識」という新しい形而上学（目に見えない内的な何か）を呼び込んでしまった。本発表では、古田（2022）や谷田（2024）の心的概念の分析を参照することで、行動的概念に還元されず形而上学でもないパーソナリティの捉え方を論ずる。それにより、渡邊で論じられたパーソナリティ概念への今後の4つのアプローチは自ずと1つに絞られるであろう。それは個性記述アプローチを渡邊とは別のかたちで実践するものになると思われる。

P18B-18 親からのガスライティングを経験し立ち直るプロセスへの探求—TEAを用いて—

KONG MINGXI（立命館大学人間科学研究科）・安田裕子（立命館大学総合心理学部・人間科学研究科）

ガスライティングは人の認知を歪ませ、コントロールし、その人に不安を生じさせ、自責を与える方法である。DV等のパワーバランスが不均衡な関係性に見られる。一方、親によるガスライティングは子どもへの躾や教育として認識されやすく、周囲の人はそれが子どもに害を与える行為だと弁識できず、子ども自身も気づきにくい。極端な場合、子どもは親とのやり取りの中で感じたネガティブな感情体験や親のふるまいが適切であることを理解するために、自身に心理的な問題があると思いこむことが多く、自尊感情も低くなる。本研究ではガスライティングから回復した人3名を対象に経験に関する半構造化インタビューを実施し、いかにその被害から抜け出たかのプロセスを、TEAを用いて可視化し、社会のガスライティングに関する認識を深めることを目的とする。また、本人の認知に影響を及ぼす社会的・文化的な事象を捉え、ガスライティング被害者への支援の糸口を見出す。

P18B-19 アートベース・リサーチによる“纏う”の探究

古屋千紘（筑波大学情報学群知識情報・図書館学類）・遠藤友咲（筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群情報学学位 プログラム）・松原正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

自己イメージ（身体イメージ）を形作る支えとなる、Embodingとしての"纏う"という体感の探究。それは、服や場、人や声から感じられ、身体があるからこそ持てる、私になれる、なっていく感覚である。私はこの体感を日記といった記述に加え、造形やドローイングとして記録している。それらを元にアートベース・リサーチのアプローチから「纏うの探究（記録・創作・活動）が自身の日々に加え、他者との関わり・コミュニケーションを広げているのか？」「“纏った”感覚の共有・伝達のため、纏う感覚の創作は可能か、可能だとすればどのような方法があるのか？」という問いについて、探究の過程を発表する。

P18B-20 日本国内企業で長期就業するムスリムの葛藤—複線径路等至性アプローチ（TEA）による分析

小山多三代（立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程）・安田裕子（立命館大学総合心理学部）

本研究では、日本国内企業で10年以上就業しているムスリムが、様々な葛藤を抱きながらも家族とともに日本での永住を決断したプロセスを明らかにする。日本における外国人材の数は2024年時点で230万人を突破しており、彼らの永住資格の付与や家族帯同を促進する政策も見られる。このような社会状況を踏まえ、外国人材が家族とともに日本での永住を決断した背景や、彼らの葛藤の様相を明らかにすることは重要な課題である。本研究では、ムスリムが大多数を占める地域から来日したムスリム男性にインタビュー調査を行い、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）による分析を行った。その結果、研究参加者が自身と周囲の日本人の宗教観の違いに葛藤しながらも、日本人の倫理観や行動、態度にムスリムとしての重要な規範を見出し、日本への敬意を抱いたことが永住の選択を促進した様相が明らかになった。

P18B-21 リーダーシップ発揮に影響を与える自己認識の変化に関する定性的研究
城石ゆかり (ngoro-ngoro)

本研究では、経営者のリーダーシップ開発支援における自己認識（セルフ・アウェアネス）の変容に注目し、心理的变化とその変化の過程を質的に探究し、支援のあり方を検討した。約5ヶ月間の介入期間における社長の自己認識の変容をTEMを用いて分析した結果、①社長の自己認識が質的に変化しスキルが向上したこと、しかし②等至点に達してもその定着は別課題であること、③意欲の現れ方の特徴、そして④日本の文脈において自己卑下が自己認識の動機づけになりうることの4点が明確になった。虚無感や疲労感を抱える経営者に対し、心理的介入がリーダーシップ発揮に与える影響を質的に明らかにした一方、自己認識の再認識が一度の高まりでは終わらないその持続性に着目した縦断的研究の必要性を示唆する。今回、TEMを用いることで、対象者の複雑な心理的体験の全体的な構造と、時間軸に沿った変化の過程を深く意識化・明確化した。

P18B-22

(発表取り下げ)

P18B-23 不適切な保育が発生する構造—うへの式質的分析法を用いた第三者委員会報告書の分析—

濱名 潔（立花愛の園幼稚園・名古屋市立大学人間文化研究科研究員）

これまで、不適切な保育が発生する要因について、保育士の人権意識や労働環境など様々な視点から言及されてきた。しかし、研究としては事案の紹介に留まり、原因とされる要因がどのように関連して不適切な保育が発生するのかが構造的に明らかにされてきたとは言い難い。本研究では不適切な保育を多角的な視点から検討した第三者委員会報告書に着目する。そして第三者委員会報告書から不適切な保育が発生する要因を分析し、それらがどのような構造で関連し合うのかを明らかにする。

P18B-24 子どもの独立性と協調性について日本の母親が語る「期待」と「しんどさ」のアンビバレンス

吉川康太（広島大学人間社会科学研究科）・梅村比丘（広島大学人間社会科学研究科）

独立性と協調性の発達は、養育において共存する目標とされる。先行研究によると、子どもの独立性や協調性の発達には親の期待や信念が関連することが示されてきた。しかし、どのように親は子どもに期待しているのかという質的な側面は十分に検討されていない。本研究は、母親が子どもの将来の独立性と協調性をどのように期待しているか検討した。本研究では1歳児を持つ52名の母親に対し、将来の子どもの独立性と協調性がどうなってほしいと期待するかについて質問し、その理由を尋ねた。テーマティック・アナリシス法を用いて分析した結果、多くの日本の母親は子どもに対して「自立してほしい」、「ある程度周りと合わせてほしい」など独立性と協調性の両方を求めることが分かった。一方で、複数の母親は、「我が強すぎてもうまくいかない」といった独立性のしんどさを語り、また「自分がなくなる」といった協調性のしんどさを語った。

P18B-25 紙芝居上演実践における社会包摂の可能性について

澤屋真樹（広島文化学園大学人間健康学部）

大学サークルによる地域や福祉施設における紙芝居上演実践を通して、表現に対する自信を持てなかった学生が、声や役になりきる経験を通じて自己効力感を高め、共演者や支援者との関係性を変容させていく過程を記述する。参加学生2名の事例を取り上げ、「声で語ること」や「ヒーロー声になりきること」によって自信を獲得するプロセスをナラティブに描いた。分析は記述を中心に、声や配役を媒介とした変化の瞬間に焦点を当てる。紙芝居という手軽で柔軟な表現活動が、学生の地域実践や対人関係の経験を通して、包摂の契機となる可能性について考察する。

P18B-26 防災教育と社会認識を架橋する—2023年カフマンマラシュ地震におけるハタイ県の災害経験と知識構築に関するディスコースに着目して—

永田真子（筑波大学大学院人文社会科学研究群）

1999年のコジャエリ地震以降、トルコでは防災意識の向上を目的とした多様な研究が行われてきたが、災害経験の構築過程や災害情報の認識・活用に関する検討は十分ではない。本研究は、被災者の経験と、地域の歴史・文化・社会に根差した暗黙の価値観や行動様式に着目し、災害認識の形成過程を明らかにすることで、地域の実情に即した防災教育への示唆を得ることを目的とする。

2023年カフマンマラシュ地震の被災地ハタイ県において、防災教育カリキュラムに基づき、歴史的地震に関する知識、災害時の経験と行動、建物の安全性、死傷の要因、災害後の自助・共助、震災後の変化を調査した。

言語・文化・社会が交差し、社会的現実が構築される実践の場としてのディスコースに着目し、言語使用のパターンと社会文化の相互構築的關係を明らかにする。これにより、理論的な災害情報を人々の日常にどのように接合可能かを考察する。

P18B-27 死別経験者がグリーフに関する教育を行う際の負担感と対処—当事者同士の対話を通じた質的研究—

加藤美千代（中京大学大学院心理学研究科・一般社団法人日本グリーフケアギフト協会）・石森恵美・川島大輔（中京大学心理学部）

日本は多死社会を迎え、行政から民間まで様々な場所でグリーフに関する教育講座が開設されるようになった。そこに死別経験者が関わり、自らの経験を語ることも多いが、心理的負担や苦痛を伴うことも少なくない。しかし、その負担感や対処方法について検討した報告は見当たらない。そこで本研究では、グリーフに関する講座の講師を務める死別経験者（筆頭および第2発表者）2名の対話を通じて、教育を行う際の負担感やそれへの対処の具体に迫ることを目的とした。対話の内容は録音され、逐語化されたデータについて一次的な分析を実施した上で、2回目の対話を実施した。2回分のデータをKJ法に準ずる手法で分析した。結果、自らが困難に感じる事柄を事前に把握してそれを回避する対策などを行っていることが共通して語られた。期待される語り手像への抵抗と調整といった側面も、負担への対処として重要な意味をもつことが明らかとなった。

P18B-28 学びの姿勢の獲得を目指す支援をととして、レジリエンスを涵養するプロセスについて

濱田 香（株式会社MyStep）・寒川美紀（株式会社MyStep）・野村栄太（豊中市役所こども未来部）

本研究では、学習時のつまづきを乗り越えるまでの、指導員と児童の相互作用及びそれを駆動する指導員の思いを可視化し、児童のレジリエンス涵養に繋がる支援方法の検討を目的とした。弊社の教室に通う小学生2名を対象として、学習支援の様子を動画撮影により記録して、支援直後に児童にアンケート調査を実施した。加えて、当該支援における意思決定や工夫、改善点等を記載した文書を、支援を担当した指導員が作成した。分析方法には、複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling : TEM）を用い、TEM図を作成した。分析の結果、指導員が個人内比較により児童の肯定的変化を伝えたことで、児童が成長を実感できて学習意欲に繋がったことや、場当たりのでない建設的な支援が学習姿勢の形成に寄与したこと等が示唆された。

P18B-29 フィールドにおける〈私〉の意味—フィールドとの対話をととして—
武島千明（広島大学人間社会科学研究所）

質的研究において、研究者たる〈私〉は分析装置とされる。近年では、そのことへの自覚に基づき、大倉（2025）や松島・保坂（2025）などが、研究者の一人称性を明らかにしており、研究の読み手と書き手との間での〈了解〉の形成に資する視点の重要性が認識されつつある。しかし、質的研究において〈私〉の影響が反映されるのは、分析に限らない。データ収集の際、フィールドの人々は、何らかのかたちで研究者を自らの営みのなかに意味づけ、何らかのフェイス（末田、2012）を身に付けながら、データ収集に協力している。では、フィールドの人々は、研究者である〈私〉をどのように意味づけ、それゆえどのようにふるまうのか。そこで、本発表では、発表者が1年間フィールドワークを実施した保育所・学校の教師へのグループ・インタビューの結果をもとに、〈私〉とフィールドとの共同生成物としてのデータの意義を再考察する。

P18B-30 畏敬の念の意味づけプロセスにおけるAIチャットボットの役割—語りに基づく予備的検討—
栗原慎太郎（情報科学芸術大学院大学）

畏敬の念（awe）は、自己超越的かつ抽象的な感情体験であり、言語化が難しいとされてきた。本研究は、こうした体験に対する振り返り支援として、生成AI（対話型チャットボット）を用いた介入の有効性を予備的に検討したものである。成人10名を対象に、自然環境で畏敬の念を感じる散歩（15分以上）を行った後、AI対話群（n=5）は生成AIとのテキスト対話による振り返り（10-15分）、対照群（n=5）は自由記述による振り返りを実施した。これを2週間にわたり計2回実施し、得られた語りデータを質的に分析した。その結果、特にAI対話群では体験の具体化や多角的視点の獲得が相対的に多く、対話による内省支援の可能性が示唆された。現在、畏敬の念と創造性との関連についても質的データと定量スケールを用いた分析を進めており、今後は対象を拡大し、理論的枠組みの精緻化を図る予定である。

P18B-31 発達障害をもつ看護師が看護学生時代に体験したこと—今後の看護学生への合理的配慮のために—

徳光 薫（園田学園大学人間看護学部）・蔡 小瑛（園田学園大学人間看護学部）

本研究は、発達障害をもつ看護師の看護学生時代の体験について、半構造化インタビューによって得られたデータを質的に分析することを目的とする。発達障害者は、非常に苦手な領域がある一方で、標準的かそれ以上の能力を発揮する領域もある。ところが、多方面の能力を要求される看護業務において、発達障害傾向をもつ人が困難を抱えることは少なくない。かつて発達障害と診断された学生は、看護師の適性がないとみなされ、看護師養成機関において進路変更を勧められることがあった。しかし、2016年に障害者差別解消法が施行されてからは、合理的配慮が検討されるようになった。たしかに看護教育においては、指示の分割や環境調整などが支援例として挙げられるが、それらは教員視点の配慮であることが多い。本研究では、発達障害をもつ看護師の語りを丹念に分析することによって、発達障害の現状により適した支援ガイドラインの提案が期待されると考える。

P18B-32 食料品アクセス困難地域における後期高齢者の食料品調達手段に関する質的検討—TEM図による可視化を通して—

玉木志穂（農林水産省農林水産政策研究所）・丸山優樹（農林水産省農林水産政策研究所）

日本では高齢化と人口減少により地方部で食料品店舗の閉店が進み、買い物が困難な高齢者の存在が社会的課題となっている。

このような状況を踏まえ、近年では食料品の調達手段について、定量的なアプローチによる研究が数多く行われてきた。しかし、これらの研究の多くはアンケート調査を用いた一時点での時点観測に基づく分析にとどまっており、食料品調達手段がどのような経緯や背景のもとで形成されたのか、すなわち生活の中での変化のプロセスや意思決定の過程については、十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、食料品アクセス困難地域に居住する単身の後期高齢者にインタビュー調査を行い、調達手段の変遷をTEM図で可視化した。その結果、食料品調達手段の移り変わりには、身体的・経済的条件や遠方に居住する家族の助言が大きく影響していることが示された。本研究で得られた知見は、地域の実情に即した持続的支援の仕組みを検討する際の一助となることが期待される。

P18B-33 小児がん、AYA世代がん経験者の就職困難に関する質的調査

奥村哲朗（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

小児がん、AYA世代がん経験者が、就職活動においてどのような困難に直面するのかについては、明らかになっていない。本研究では、小児がん経験者2名、AYA世代がん経験者2名に対して、1名につき3回のインタビュー調査を行った。インタビュー内容は、複線径路等至性モデリング（TEM）を用いて分析を行った。その結果、AYA世代がん経験者は、就職活動中に、就職活動における不利・ハンディキャップを自覚する、会社にどのタイミングで病気を伝えるのかの不安になる、の2つの困難を経験していた。また、小児がん経験者は、上記の困難に加えて、採用時の本人の病気の認識と採用側の病気への認識のズレが大きいことによる困難を経験していた。考察では、職業選択において様々な制約や障壁がある中で、本人が就職活動を始めまでに体力的・心理的準備性を高め、自己理解を深めていくことの重要性和、周囲や採用側の望ましい理解・支援のあり方について検討した。

P18B-34 コミュニティとの関わりから再考するニューカマー第二世代のアイデンティティ形成—在日日系ペルー人第二世代を事例に—

貞安 薫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

ニューカマーと呼ばれる外国人の増加から30年以上が経過し、親と共に来日した第二世代は第三世代を養育する壮年期を迎えている。本研究では、1990年代に学齢期に来日し、現在日本で就業する日系ペルー人6名のライフストーリーを、複線径路等至性アプローチ（TEA）により分析し、アイデンティティ形成を参加コミュニティの視点から検討した。分析の結果、協力者らは、移民の子どもの人間形成において重要とされるエスニック・コミュニティへの参加は見られなかったものの、単一のエスニシティにとらわれない複合的なアイデンティティを形成したことが明らかとなった。特に、異文化に理解のある日本人との関わりが複合的アイデンティティ形成の重要な契機となっていることが確認できた。本結果は、在留外国人およびその子どもたちへの今後の支援の在り方を検討する上で、ホスト社会に求められる異文化理解の重要性を改めて示すものと言える。

P18B-35 無認可幼児教育類似施設の存続をめぐる「余地のない選択」—施設長による信念とマネジメントの語りから

西島 功（白梅学園大学大学院子ども学研究科子ども学専攻博士課程）

本研究の目的は、無認可幼児教育類似施設の存続がいかに「余地のない選択」に直面しているのかを明らかにすることである。この施設は、何らかの共同体や個人が信念あって無認可で設置した3歳以上に保育を行う施設である。幼児教育・保育無償化で対象外とされ経営上の存続危機に陥った。施設長8名に半構造化面接を行い、テーマ的ナラティブ分析を行った。その結果、子育ての基地という、施設の存在価値を自認し、存続のために変容もやむなしと手立てを模索するが、「信念を貫こうとすると、選択の余地は消えてしまう」という不合理が生じた。「余地のない選択」とは、選択肢の欠如というよりも、信念や制度の狭間で「閉じられない」という切迫した状態を指す。つまり、制度にとっては不可視でありながら、共同体の人びとにとっては守るべき居場所であり、こうした状況において、存続の方途は矛盾や揺れにさらされ、その選択は余地のないものに狭められている。

P18B-36 心理カウンセリングに対する主観的価値の構成—カウンセリング経験者の意味づけ—

加藤碧子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

本研究は、心理カウンセリングを経験したクライアントが、その体験をどのように意味づけ、カウンセリングに対しどのような主観的な価値を見出しているかを明らかにすることを目的とする。心理カウンセリングは対話を通じたケアの実践として、数量的な効果指標では捉えきれない、個々の文脈に根ざした価値を有していると考えられる。特に、心理職の実践の質を高めていくためには、利用者であるクライアント自身が語る「苦悩」や「回復」の文脈における意味づけを理解することが重要である。本研究は、心理職によるカウンセリングを経験し終結している成人クライアントに対し半構造化インタビューを実施した。個別の意味づけのあり方を検討するため、得られた語りは解釈的現象学的分析を用いて質的に分析をした。その結果をもとに、心理カウンセリングに対するクライアントの期待や心理職の社会的役割について考察する。

P18B-37 容姿の悩みが和らいでいく心理的過程の検討—成人期女性との語り合いをもとに—

岸本華穂（奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科）・町田奈緒士（奈良女子大学研究院人文科学系）

近年、容姿の悩みを抱える青年は増加傾向にあると指摘されており、その悩みは深刻化すると精神的健康にも影響を及ぼす。しかし、容姿の悩みに関する従来の研究は、主に数量的調査や社会学的論考によるものが多く、個人の内的世界に焦点を当てた研究は少ない。実際に悩みを持った個人が自身の容姿をどのように感じ、そして悩みから抜け出していく際にどのようなプロセスを経るのかについては検討が不十分である。そこで本研究では、容姿に悩む人の実像や、その悩みが緩和する過程でどのような心的変化が生じるのかを探ることを目的とした。青年期に容姿に悩み、現在はその悩みは和らいでいるという初期成人期（20代）の2名の女性を対象にインタビューを実施した。手法としては、人間の体験世界を生き生きとした形で描き出す現象学的アプローチである語り合い法（大倉，2002）を用いた。調査は書面による同意を得た上で、倫理的配慮に十分留意して実施した。

P18B-38 TASモデルにおけるサポーターの役割とは—サポーターMのストラテジーと葛藤—

駒 久美子（千葉大学教育学部）・目戸郁衣（帝京大学）

TASモデルとは、学校と社会を結ぶ音楽教育の在り方を模索した坪能（2019）によって、授業者であるTeacherと、授業を様々な形で支援するAdviserとSupporterの頭文字をとって「TASモデル」と名付けられた。2020年時点で、21の実践が報告されている（Tsubonou,2020）。そのなかで駒はTeacherを対象としたインタビューをもとにTASモデルの意義を明らかにしている（Koma,2020）。本研究では、Supporterに焦点をあて、実践に関わったMを対象として、Mが持つサポーターの役割のイメージを明らかにしようと考えた。そこで、内藤(2002)が提唱する「個人ごとに態度やイメージの構造を分析、個人が持つイメージや態度を明らかにする」ことができるPAC分析を実施した結果、「サポーターMの間接的ストラテジー」「サポーターMの直接的ストラテジー」「サポーターMの理想的ストラテジー」「サポーターMの葛藤」の4つのカテゴリーに分類された。さらに、実際にMに関わった実践動画の振り返りと合わせTEM図を作成し考察した。

P18B-39 Designing a Qualitative Research Protocol to Examine Associations between Study Abroad Experiences and Mental Health Factors: Adapting Instruments for Collaborative Interview Studies in Japan

カビール ラッセル サークワ（広島大学教育学部）・ハーベル＝ボーマン リンジー（School of Communication Studies, James Madison University）・ベイツ ソフィア（College of Humanities and Social Sciences, George Mason University）・稲谷 颯（広島大学教育学部）・石津 空（広島大学教育学部）

Implementing a narrative inquiry approach, a groundbreaking qualitative research study by Hishida, Yanase, and Sakaguri (2024) identified that mental health factors motivate international students to travel to Japanese national universities. Less understood are the factors that motivate outbound Japanese study abroad students and whether they are shaped by deficit or strengths-based psychological processes, which might provide insight into unmet needs for resources in dispatch preparation, student support issues during the sojourn, and information for student mobility centers. This session presents a collaborative research effort to develop a qualitative research protocol that can be conducted in English and Japanese to examine the associations between study abroad factors and mental health processes. The pool for instruments is set to include Japanese items from the Multidimensional Motivations to Study Abroad Scale (MMSAS; Kabir et al., in prep), Positive Affect Negative Affect Schedule (PANAS; Sato & Yasuda, 2001), and Clinical Outcomes in Routine Evaluation-Outcome Measure (CORE-OM; Uji et al., 2012), in line with a previous study (Harvell-Bowman et al., 2022). We invite subject matter and methods experts for their feedback to improve this study design for an upcoming ethical research procedure on study abroad selection and socialization processes in Japan and the United States.

P18B-40 「つくり方」がつくられるとき—TEM/TLMGによる漫画家・荒木飛呂彦氏の「漫画術」形成プロセスの分析—

田中宏明（慶応義塾大学大学院政策メディア研究科）・井庭 崇（慶応義塾大学総合政策学部）

本研究は、荒木飛呂彦氏の「漫画術」形成プロセスをTEM/TLMGでモデリングし、「漫画のつくり方」がつくられる過程を明らかにする。荒木氏による複数の語りから、芸術と商業のはざままで葛藤し、デビュー当初に確立した作風を批判的に乗り越えていくプロセスを描出した。なかでも注目されるのは、「キャラクターはストーリーを動かす駒である」とするSD志向の信念が、「キャラクターのためにストーリーを動かすべきだ」というSG志向の信念へと変容し、それを契機に「漫画術」の体系的構造化が進んだ点である。具体的には、①キャラクター、②ストーリー、③世界観、④テーマの序列をもつ「基本四大構造」というメタな促進的記号が内化され、実践知が包括的な枠組みに織り込まれていく。このように、信念の変容を助勢した促進的記号が、内化／外化のプロセスを通じて「実践のコツ」として定着することで、漫画術が形成されてきたことが示唆された。

P18B-41 保育者志望者が他職種を経て保育職に「回帰」するプロセス

境 愛一郎（共立女子大学児童学科）

保育現場の人材不足は、依然として深刻である。その論点の一つに、いわゆる潜在保育士の問題がある。こども家庭庁（2024）によれば、保育士登録者のうち、保育職に従事しない者の数は年々増加しており、直近では約111万人に上っている。一方、他職種から保育職に転入してくる者が一定数存在することも明らかにされている（畔蒜, 2021）。保育の人材課題においては、そうした人材の流出と流入の実態を検討し、養成や採用、キャリア支援等の見直しへとつなげていくことが重要である。

本研究は、他職種から保育職に「回帰」するいくつかのプロセスについて、詳細に分析した。中等教育段階まで保育士を志望しつつ、他職種（化粧品販売員、アスリート）を経て保育士となった者2名、保育士から他職種（コールセンター等）に移り、また保育士に復帰した者1名へのインタビューから、保育職以外に就職するという選択、保育職に戻るという選択を促した要因等を明らかにした。

P18B-42 情報認識・取得・活用におけるADHD者の困難に関する研究—ADHD者のための情報保障に向けて—

佐藤 碧（筑波大学情報学学位プログラム）

2024年から合理的配慮（社会の中のバリアを取り除く対応）が事業者にも義務化され、さらに多様な場面で障害者支援が求められることが予想される中、発達障害者のための情報保障に注目した研究は限定的である。本研究ではADHD診断のある大学生・大学院生を対象に半構造化インタビューを行い、彼らの情報認識・取得・活用における困難体験を分析した。結果として、困難は大きく7つの階層（五感を通して受け取る刺激のしんどさによる情報認識・取得の阻害、認識できなさ、認識しづらさ、重要な情報を見つけ出すことの難しさ、意識に関わる困難、見えないものの状態・構造・全体像などを把握することの困難、ものごとへの取り組みにくさ、勘違いする、忘れる、見落とす）に分けられた。一つの「できなさ」の要因は複数層に分布し、それらが相互に関連して困りを形成していることが明らかになった。またADHD者のための情報保障の有効性が示唆された。

P18B-43 患者経験のオートエスノグラフィとしての「さかさま事例分析」—精神医療における主客を反転しながら架橋する—

大野美子（大阪大学大学院人間科学研究科）

私は、患者/家族/専門職の三つの立場から精神医療に関わった。「精神医療をめぐる経験の語り部活動」として詩やエッセイを書き、作品を学術研究に取り込んで、支援のパラダイムを問い直す応用哲学研究に取り組んでいる。患者経験のオートエスノグラフィというと「当事者研究」と解されることがあるが、そうではない。私が自伝的記述を通して行うことは、精神保健医療の法制度、専門職文化、ケア関係を批判的検討することであり、対象はむしろ自分自身より医療従事者に重点があるからである。

本発表では、一例として「さかさま事例分析」を試みる。従来、医療者が患者を観察して報告してきたのに対し、患者が医療者を観察して事例分析するとどうなるか。専門職と患者、研究者と実践者、調査者と研究協力者の間には権力勾配がある。架橋し協働を目指すのであれば、勾配を均すために、ヒエラルキーを攪乱しひっくり返してみる必要があるであろう。

P18B-44 語られたつもりの行動に耳を澄ます—「共在対話」による発達支援の試み—

大内雅登（Care-Media Labo）・吉村優一（Care-Media Labo）

本発表では、発達障がいのある子どもとの関わりをめぐる仮構事例をもとに、「共在対話」の概念を提起する。

支援現場ではしばしば、当事者の語りが「足りない」「わからない」と評価され、その空白を埋めようとする翻訳的な関わりが行われがちである。しかし、当事者がすでに「語ったつもり」でいる表現に対して、「まだ語られていない」と支援者が判断することで、かえって対話が断絶する場面もある。

本発表では、発言の行間や動作に含まれる「語り」をめぐる3つの事例を用いて、当事者の語りを「不在」とみなすのではなく、「すでに語っていたかもしれない」という仮説を支援者がどう扱うかを検討する。ズレを翻訳で埋めるのではなく、ともにそのズレにとどまり仮説的に調整していく営みを、「共在対話」として捉え直す。支援とは、理解や共感によって完了するものではなく、わからなさを共有できる関係のなかで立ち上がるのではないかという問題提起を行う。

P18B-45 まちづくりに取り組んでいる人々のライフストーリー—福島県檜葉町に関わる「関係人口」を事例に—

劉 毓禧

本研究は、東日本大震災後に全町避難を経験した福島県檜葉町において、地域に継続的かつ多様に関わる「関係人口」のライフストーリーを通じて、その関与動機、関係の持続要因、そして人生における意味づけを明らかにすることを目的とする。文献調査に加え、まちづくり会社である一般社団法人「ならはみらい」との連携のもと、地元の5名にライフストーリー・インタビューを実施し、うち1名には語り手と協働して図解化とトランスビューを行った。分析は「来町前」「来町後」「現在」の三段階で構成した。結果として、関与動機は偶然の出会い、震災課題への関心、専門性の活用の三類型に分類された。また、関係を持続させる要因としては、住民との信頼関係の構築や、活動を通じた新たな発見が重要であることが示された。さらに、こうした関わりは、語り手にとって「自己実現の場」や「社会的貢献の機会」として意味づけられていた。

P18B-46 認知症共生社会実現を目指した「認知症双六」の効果に関する初期検討
村木志帆（神奈川県立横須賀高等学校）・後藤真衣（神奈川県立横須賀高等学校）・小野明日香（NTT株式会社人間情報研究所）・山中綾華（NTT株式会社人間情報研究所）・笹川真奈（NTT株式会社人間情報研究所）・瀬古俊一（NTT株式会社人間情報研究所）

認知症の偏見を軽減するため、双六を用いた認知症学習の取り組みがある。しかし既存の双六では、認知症になるとできることが少なくなるといった記載が多く、認知症になっても前向きに暮らし続けられるイメージが伝わりにくかった。そこで本研究では、前向きな出来事のマスと、前向きに暮らせるような関わり方の良い・悪い事例を学ぶマスを取り入れた、新たな双六を設計した。本双六体験の効果を検証するため、小学生以下の子供と親5組に対し、体験前後でアンケート調査を行った。その結果、双六体験後に、子供たちの認知症に対するイメージや関わり方への考えが、必ずしも双六の介入意図通りに変容するとは限らなかった。そこで、体験中の親子の会話を初期的分析したところ、子供の認知症の事前知識の不足が体験前後での効果に影響しており、子供の変化は体験中における親の発言の影響を受けた可能性が示唆された。

P18B-47 園舎移転をめぐる行政－園－PTAの組織間調整—問題発覚から移転までのマネジメントの交差—

平原 藍（白梅学園大学大学院）

本研究では、園舎耐震強度不足により、発覚から3カ月で移転を迫られた幼稚園の事例を通して、行政－園－PTAの三者が、それぞれの立場から行ったマネジメントに着目し、組織間調整がいかになされたのかを明らかにする。調査としては、本事例に関わった行政担当者、園長、PTA会長に半構造化面接を行い、語りを多層タイムラインで各視点の相互作用や認識のズレに着目し分析した。その結果、行政は保護者や園の立場を理解しながらも移転を主導し、園は渦中の現在と移転先での保育を探りつつ、保護者の要望と行政の方針との間で葛藤して調整を図った。保護者は当初、行政や園に対峙していたが、限られた選択肢しかないことを理解し、各家庭の教育の問題として各自の決断を尊重し合った。移転に至るまで、いずれの代表も組織内と組織間の調整に追われつつ、他組織の意図を理解し、自組織の対応を調整するという、マネジメントの交差の過程を経ていたといえよう。

P19B-1 メタバースにおける居場所感に関する研究

岡田羽叶（立命館大学総合心理学部）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

不登校支援の一環として、メタバースの活用が注目を集めている。アバターという分身を通じて他者とつながることができるため、メタバースは不登校児にとっての「居場所」として機能する可能性がある。しかし、そもそも「居場所」とは何かが曖昧なまま支援が行われている例も少なくない。居場所とは本人がそこを居場所と感じているかどうかという主観的なものであり、これまでその定義については様々な検討がされてきた。たとえば西川（2021）は、「被受容感」「他者との関係性」「思考・内省」「本来感」「役割感」「安心感」の6つの構成要素を挙げている。

このような背景を踏まえて、本発表では、メタバース上の「居場所」について検討する。日常的にソーシャルVRプラットフォームを利用している人々を対象に、メタバースを居場所と感じるか、またその理由について調査を実施する。その結果をKJ法により分析、整理し、発表する。

P19B-2 非致死性のトラウマのオートエスノグラフィー「避けられている」感覚に着目して—

有賀 光（信州大学総合人文社会科学研究科）・楠見友輔（信州大学教育学部）

本研究は、非致死性のトラウマをオートエスノグラフィの手法で明らかにすることを目的とする。

ASDかつ性別違和の当事者である筆頭著者は、「非致死性のトラウマ」による心身の健康に関わる困難を有している。そのトラウマの原因の一つとして考えられるのは、他者から「避けられている」という感覚である。そのような疎外感を強く抱き始めたのは小学校高学年の時からである。本研究では、筆頭著者が中学生の時から現在までに書き溜めたセルフ・ドキュメント(その時に思ったことや考えたことを書いた文書)を基に、現在の自分の反省的な視点を書き加えたりフレクティブ・ドキュメントを新たに作成する。また、それを解釈的に分析する。このような手続きを通して、非致死性のトラウマの構造の一端を、当事者視点から明らかにする。

**P19B-3 定年退職とアルコール依存症に関する新聞記事のテキストマイニング—
報道の特徴と依存症の背景要因を探る—**

五百竹亮丞（広島文化学園大学人間健康学部）・井川純一（東北学院大学人間科学部）・恒松美輪子（広島大学大学院）

近年、定年退職後にアルコール依存症と診断される患者が増加している。本研究では「アルコール」「依存」「定年」の語句が含まれる232件の新聞記事を抽出し、報道内容の特徴及び退職後にアルコール依存を招く背景要因を計量テキスト分析によって探索した。はじめにKH Coderを用いて階層的クラスタ分析を行ったところ、自助グループや医療機関、行政の取り組みを報じるものや、当事者の体験を扱ったものなど9つの報道パターンが確認された。次に共起ネットワーク分析をした結果、家族関係の不和、ギャンブル依存などがアルコール依存に関与している可能性が示唆された。

P19B-4 絵本環境コーディネーター研修プログラム第1版の開発研究Ⅰ—インタビュー調査から捉える研修前後における参加者の意識および行動の変容—

小屋美香（育英短期大学保育学科）・仲本美央（白梅学園大学子ども学部子ども学科）

子どもの育ちを支える上で絵本の役割は重要であると認識されている。一方、地域の中には多様な絵本環境が存在するが、それらが十分に活用されていないという課題がある。そこで、地域における絵本環境をコーディネートすることができる人的資源を生み出すべく「絵本環境コーディネーター研修プログラム第1版」を作成した。二つの地域から12名に参加していただき、全3回のプログラムを実施した。研修後の効果検証のため、同意を得た6名に半構造化面接によるインタビュー調査を行った。主な内容には、研修プログラム前後の自らの意識や行動の変化、関わった絵本環境の変化などの質問を含めた。インタビューの音声データは逐語化し、質的研究法の一つである複線径路等至性アプローチの分析を用いてTEM図を作成した。そして研修前後における参加者の意識及び行動の変容を明らかにした。本研究は白梅学園大学・短期大学の倫理審査を受審し承認を得て行った。

P19B-5 スポーツにおける対人暴力の被害経験をめぐる対話的自己エスノグラフィ (1) —「被害者」から「研究者」へ—

豊田 隼（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）・堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）

スポーツにおける対人暴力は喫緊の社会課題である（Tuakli-Wosornu et al., 2024）。日本ではこれまで、被害者の精神健康問題や被害経験を受容する心理機序に関する量的研究が提示されてきたが、個別具体的な質的研究は十分に蓄積されてこなかった。また、スポーツにおける対人暴力の被害者支援の必要性が叫ばれる中で、トラウマ&バイオレンス・インフォームドケアの視点では、支援者が自身の経験や先入観を省察することがまず重要となる（Wathen & Varcoe, 2021）。他方で臨床心理学領域では、研究者の内省性が強調され、解釈的な自己物語を対象とした当事者による当事者研究に注目が集まっている（王ら, 2024）。本研究では、対話的自己エスノグラフィ（沖潮（原田）, 2013）の観点から、スポーツにおける対人暴力のかつての「被害者」が「研究者」として活動する体験世界を探索することを試みる。

P19B-6 研究についての対話は何をもたらしたか—デュオエスノグラフィーによる意味の探究—

八木真奈美（東京女子大学現代教養学部）・藤原京佳（大阪大学国際機構）

本研究は、二人の質的研究の実践者によるデュオエスノグラフィーである。デュオエスノグラフィーとは、2004年にNorris and Sawyer が行った、二人以上の研究者による対話的オートエスノグラフィーの方法として名付けられたものである。その特徴として、研究者の背景をクリティカルに見直しながら、意味の探究や創造、あるいは交渉を行っていくもので、研究者は伝統的な質的研究の表象形式に対する批判を共有する。

発表者らは、質的研究における解釈のアプローチを探究することを目的に、質的研究との出会い、学位論文執筆における葛藤やジレンマ、他者を理解することの難しさなどについて対話を重ねた。それにより、「研究」という支配的なディスコースに埋め込まれているわたしたち自身が浮き彫りになった。

本発表では対話の一部を紹介し、参加者と発表者で、研究にかかわる経験をもとに新たな意味の構築を試みたい。

P19B-7 事件について「語ること」と「語らないこと」—地下鉄サリン事件の被害者とその家族へのインタビュー調査から—

北本遼太（静岡産業大学経営学部）・仲嶺 真（荒川出版会）・藤田浩之（京都大学大学院）

1995年3月に発生した地下鉄サリン事件から30年が経つ。この間、被害者やその家族は事件について様々な形で「語ること」が求められてきた。事件について語ることは被害からの回復や社会運動につながる場合もある。しかしながら、ある被害者家族は、自身が経験した深い悲しみは周囲の人々には伝わらないことから、事件について話すことに消極的であったと語る。また別の被害者家族は、事件を風化させないためにも訴えることは必要と思いつつも、自身が発信して目立つことは避けたいという葛藤を抱えている。本発表では、地下鉄サリン事件に遭遇した後、被害者やその家族（遺族含む）の「語ること」あるいは「語らないこと」の選択を、自身の感情や周囲からのまなざし、刑の執行といった社会的な出来事とともに変化してきた過程として描く。そして、「語ること」あるいは「語らないこと」の持つ意味について議論する。

P19B-8 劇場における鑑賞と対話〈シアターダイアログ〉の試み

中山佐代（立命館大学人間科学研究科）・川野健治（立命館大学総合心理学部）

現代では、インターネットの普及に伴い自宅で様々な鑑賞体験が可能となり、コミュニケーションツールの発達により常時誰かと繋がることもできるようになった。そのような時代に、他者と共に舞台作品を鑑賞する劇場という文化装置にはどのような可能性があるのか。本研究では、同じ舞台作品を鑑賞した観客が終演後に対話を行う〈シアターダイアログ〉を企画し、公募で集まった研究参加者6名（女5・男1, 20代前半～40代後半）が、4作品（ダンス、人形劇、ソロダンス、演劇）を鑑賞し対話を行った。その対話の逐語録を thematic analysis (Braun & Clarke, 2006) を用いて分析した。舞台上の物語を語りつつ自身の物語を語る場が立ち上がっていた。

※本研究において〈シアターダイアログ〉と名付けた。

P19B-9 心理面接における同性愛者の自己像とその共同生成過程—スティグマ体験をめぐって—

太齋 慧（東京大学大学院教育学研究科）

心理面接には、心理士との関わりによりクライアントの自己像が立ち現れ変容する自己像の共同生成過程としての側面がある。同性愛者等の社会的マイノリティにおいては、社会にあるスティグマの内在化が肯定的自己像を阻害しがちなこと、心理面接でもスティグマが支援過程に悪影響を及ぼし得ることが指摘される。本研究では、スティグマを体験する同性愛者の自己像が異性愛者との心理面接過程においていかなるものとしていかに共同生成されるか検討する。同性愛当事者である研究者がクライアントとなり異性愛者である心理士との間で行った心理面接および振り返りのデータについて、語り合い法、対話的な自己エスノグラフィを参照し、主観の交流から生じる意味を分析するメタ観察を行なう。スティグマに関する複雑な感情体験の特徴および面接の阻害/進展の鍵となる相互作用を浮き彫りにし、対話が有する機能やリスク、その条件を検討する。

P19B-10

（発表取り下げ）

P19B-11 コミュニティミュージックの場における多面的な経験とその感じられ方
—フォトボイスを通して—

南 摩周（任意団体yoriai.）・角 亮典（任意団体yoriai.／早稲田大学大学院
文学研究科）

発表者は、コミュニティミュージック（コミュニティにおける協働的な音楽づくり）の場として、「みんなとつむぐ音楽会（通称つむおと）」を開いている。コミュニティミュージックの場があることで、コミュニティの人びとにはどのような経験がもたらされるのだろうか。

本研究では、その経験を「つむおと」の参加者と協働的に明らかにすることを目指し、フォトボイス（「写真という手法を用いてコミュニティを認識し、表現し、向上していくプロセス」（Wang&Burris,1997:369））を実施した。参加者複数名は、「つむおと」の写真を撮影し、対話を通してタイトルとキャプションを作成し作品にした。参加者はフォトボイスを通して、自分に引きつけて「つむおと」がどのような経験であったかを表現できた。作品では、複数のアクターへの視点や、協働で演奏する経験などが語られるとともに、その感じられ方は多面的であることがわかった。

P19B-12 レビュー論文作成に複線径路等至性モデリング（TEM）を用いることの可能性と課題—保育における子どものICT活用に関する文献レビューから—

田島美帆（広島大学大学院教育学研究科）・大道香織（広島大学大学院人間社会科学研究科）・李 睿苗（広島大学大学院人間社会科学研究科）・渡邊真帆（福山市立大学）・中坪史典（広島大学）

本研究の目的は、複線径路等至性モデリング（以下、TEM）を用いるレビュー論文作成の可能性と課題を明らかにすることである。TEMは、その人が生きてきた時間を重視しながら人生経路の多様性と複線性を描く研究手法である。また、等至点（EFP）をはじめ、様々な概念ツールがあり、社会的諸力による影響も含むプロセスを可視化できる点が特徴である。この特徴を踏まえ、本研究では「保育における子どものICT活用」に関するレビュー論文の作成にTEMを用いることを試みる。「保育における子どものICT活用」に関する先行研究では、活用の可能性や課題、教育効果に関する知見は蓄積されているが、その過程については明らかにされていない。TEMの概念ツールを用いて、蓄積の過程を描き出し、レビュー論文作成におけるTEMの可能性と課題を明らかにすることは、文献レビューの新しい可能性の提示にもつながると考える。

P19B-13 大学内に設置された「居場所」におけるスタッフや利用者の体験—多様性との両立という観点から—

稲田真子（東京大学大学院教育学研究科）

近年、社会的に周縁化され得る人々の精神的健康の問題が指摘されることが多く、大学においても多様性の包摂（D&I）に向けての取り組みが喫緊の課題である。生きづらさを抱える人々への支援の一つとしては「居場所づくり」が行われてきたが、その多くは特定の属性の利用が想定されたものであり、周縁化され得る属性や背景を複数抱えることによる交差性の影響が見えにくくなるという問題がある。そこで本研究では、いかにして多様性は「居場所」と両立するのかという問いを踏まえ、大学内の施設としての「居場所」およびその利用者やスタッフを対象にした数ヵ月間の参与観察とインタビューを通して、「居場所」の使われ方や捉えられ方、スタッフや利用者が受ける影響や変化等を検討した。分析の結果、使われ方のパターンや他者の存在に関する影響も浮かび上がってきており、最終的には、本研究が今後の「居場所」構築の一助となることを目指す。

P19B-14 Autoethnography as Epistemic Action: A Free Energy Principle Perspective

金澤 佑（大阪大学）

This presentation reconceptualizes autoethnography through the lens of the Free Energy Principle (FEP), drawing on Martin's (2025) critical examination of narrative research and Kanazawa's (2024) neurocognitive framework. Autoethnography is redefined not as self-indulgent memoir, but as a process of minimizing epistemic uncertainty through narrative reconstruction. From the FEP perspective, self-narration serves as an active inference mechanism that updates generative models to reduce prediction error. Emotions, particularly epistemic emotions such as curiosity and confusion, play a central role by signaling mismatches between internal expectations and external realities. The integration of conceptual frameworks in autoethnographic research—such as ACT-R or critical realism—parallels the deep temporal structure of expected free energy minimization in FEP. Thus, autoethnography becomes a multi-level cognitive-emotional process, linking subjective experience with cultural and material structures through model-based inference. This reframing positions autoethnography not only as reflective inquiry, but as an epistemically motivated, socially embedded cognitive action. Implications for qualitative research, education, and reflective practice will be discussed.

P19B-15 スタンプから読む「非言語以上、言語未満」の共同性—Discordを利用した会員制オンライン・コミュニティにおける検証

尾石智美（九州大学大学院統合新領域学府）・杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究は、スタンプ（絵文字）機能を対象に、Discordを利用した会員制オンライン・コミュニティにおける非言語的参与の実践と共同性の生成過程を検証したものである。コミュニティ内における投稿へのリアクションとしてのスタンプ使用を、ログ記録および文脈的記述に基づき分析し、その意味づけを「承認」「共感」「儀礼」などのカテゴリに分類した。さらに、スタンプが多く押された投稿とその前後のやりとりを取り上げ、使用される感情や状況の文脈を記述し、典型的な使用と逸脱的な使用の両事例を抽出した。こうした「非言語以上、言語未満」の相互行為が、どのようにコミュニティの共同性形成に関与しているのかを明らかにした。スタンプという言語外のリアクション行為が、オンラインにおける関係性の構築と維持に果たす社会的機能を示し、デジタル空間における新たな共同性のあり方を理論的に捉える手がかりを示す。

P19B-16 いじめ傍観者体験に関する質的研究—当事者へのインタビューの分析—

竹原奈成（駒沢女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻）・依田尚也（駒沢女子大学）

本研究では、いじめ傍観者の体験についてインタビュー調査を行い、その体験過程に迫ることを目的とした。得られた語りについて、KJ法を用いて分析した結果、傍観者体験のある調査協力者7名全員が、いじめ場面において『傍観者であり続ける』選択をしていたことが明らかとなった。その背景には、加害者との親密な関係性を維持しなければならない、といった切迫した思いがあったことも示唆された。いじめに関する先行研究においては、傍観者はいじめ事態を仲裁する『キーパーソン』としての役割を期待されていたが、本研究においては、その立場を変容させることは難しいことが浮かび上がった。さらに、傍観者であったという自身の立場について、曖昧な認識を持つ場合があることも示された。このような、不安定で曖昧な傍観者という立場がいかに変容しうるのか、それを促す方略はあるのか、といったことについて、今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。

P19B-17 スポーツにおける対人暴力の被害経験をめぐる対話的自己エスノグラフィ (2) —「対話者」として聴く—

堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）・豊田 隼（東京大学大学院教育学研究科，日本学術振興会）

対話的自己エスノグラフィは，当事者と対話者の相互作用を通して語りを捉えていく手法である。この手法では，対話者が対話の方向性に影響を与えうる存在であり，ともに何かを見つけていこうとする姿勢が求められる（沖潮（原田），2013）。また，既存の当事者同士の対話による手法とは異なり，当事者と非当事者である対話者とのあいだにある差異性が，新たな切り口を導き出す契機となることも指摘されている（大倉・鷹田，2016）。

このように，対話的自己エスノグラフィにおける対話者の立ち位置や役割の重要性に関する言及はなされているものの，対話のプロセスが対話者自身にとっていかなる体験となるのか，また，対話者の内面や認識にどのような変化が生じるのかは，十分に検討されてこなかった。

本研究では，スポーツにおける対人暴力の被害経験を主題とした対話的自己エスノグラフィにおいて，対話者がいかなる省察や気づきを得るのかに焦点を当てて検討する。

P19B-18 障がい者福祉施設への訪問と交流を促進する学習環境デザインの分析

大本 航（九州大学大学院統合新領域学府）・迎 拓真（九州大学大学院統合新領域学府）・杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究は、知的障がいや肢体不自由などの重度障がいがある人々およびその人々が利用する施設を対象とし、学習環境デザインの観点から地域との関係形成に影響を与える心理的要因の整理を目指すものである。

障がい者との関係を深めるには、特殊な発話手段への適用不足等から生じる「技術的ハードル」や、知識の不足や偏見から生じる「心理的ハードル」の解消が課題となる。また地域によっては交流の機会自体が不足している場合もあるため、本研究では障がい者と周辺人物を取り巻く環境を学習環境デザインの観点から分析することで、交流機会の創出および交流の促進における要件整理を行った。

手法として、福岡市の障がい者福祉施設A(仮名)を対象としたアクションリサーチを実施し、地域住民と障がい者との関わり方や両者の態度変容などを分析することで、障がい者とのコミュニケーションを促進するための要件を整理した。

P19B-19 被災地における農業の持続可能性と継続要因：山形県酒田市「へらへらでゅーな」の事例から

鈴木ミチル（九州大学共創学部）・杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究では、2024年7月に豪雨災害に見舞われた山形県酒田市旧八幡大沢地区を対象に、被災農村における農業の持続可能性と継続を促進する要因について、自助と共助の観点から明らかにすることを目的としている。具体的には、豪雨災害後に人口が激減し、自治体の統合が進むA集落にて約2ヶ月間のフィールドワークを行い、農地復旧・復興の現状とそれを取り巻く共同体の変化について分析した。その結果、「へらへらでゅーな（お節介を焼くな）」という言葉に代表される本地域の在来的な規範意識は極めて自立性が高いものであり、地域で共有する水路を優先的に補修したり、農地から居住地が離れた後も自身の所有する農地に通いながら農業を継続したりするなど、高い自立意識から共助に向かう地域住民らの様子が観察された。一方で、高い自立意識が自助を過剰に促進し共助を困難にしている可能性も見られた。

P19B-20 物語の断片を創ることの一人称研究

宮下 怜（筑波大学情報学群知識情報・図書館学類）・松原正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

皆さんにも、物心がつく頃から理由は分からないが好きな物事があるのではないだろうか。そして私にとっては、物語の断片（物語の一場面）を創ることがそれに当たっていた。しかし、作家を志望しているわけではない私が、なぜ10年以上も物語の断片を書き続けていたのかは分かっていない。そこで本研究では、「無自覚に書き続けている行為がどのような意味をもつのか」「『物語』の断片である意味は何か」といった問いについて研究を行う。研究手法としては、自分の身体と環境の間に生じる相互作用について、個人固有性を重視しながら一人称視点で観察し、そのデータをもとに新しい仮説をたてることを目的とする研究（諏訪,2013）である一人称研究を用いて、物語の断片やそれに伴う記述を分析する。同時に、創作傾向や物語の断片から見えてくる作者の思考についても分析を行う。

P19B-21 医療的ケアが必要な重症心身障碍児の〈主体〉の芽生えとそだち—ある乳幼児と母親、支援者との関わりのエピソード記述から—

佐々木由佳（大阪大学大学院人間科学研究科）

近年増加している医療的ケア児が健やかに成長発達し、子どもや家族がQOL維持向上し生きていくためには、地域社会中で医療的ケア児や家族が他者と関係を築き、共生していくことが目指される。そこで、本研究では医療的ケアが必要な重症心身障碍児の他者との関係性に着目し、反応や言葉、生活行動に制限のある彼らの乳幼児期における〈主体〉の芽生えとそだちを検討することを目的とした。研究方法は、重症心身障碍児1名とその母親、訪問看護師、デイサービス職員等の支援者との関わりの関与観察とインタビューから、主にエピソード記述による分析を行った。子どもの〈主体〉は、二者関係のなかで能動・受動の関係性を越えた〈身体〉を通した関わりの積み重ねにより芽生え、その子どもの〈主体〉に喚起された相手の〈主体〉から、特に〈身体〉を通した関わりの中で子どもの〈主体〉は育てられていた。なお、本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

P19B-22 「語り合い」において、語ることを可能にするのはいかなる仕組みか—協力者とともに語り合った経験の質感に着目して—

水野唯衣（大阪大学大学院人間科学研究科）

本発表は、自己について深く語り合う「語り合い」という対話実践の場について考察することを目指す。まず前提として、「語り合い」では、ときに「スティグマ」とされかねない自己の属性が語られることがある。また、インタビュー協力者の語りからは、日常生活、日常的相互行為においてはその属性を慎重に「管理」している一方で、「語り合い」は日常と対置され、「語ることのできる場」として機能していることが明らかとなった。「語り合い」であれば語ることはなぜか。本発表では、協力者による「語り合い」経験の表現を提示し、語ることを可能にする仕組みを考察したい。考察に際して鍵となるのは、「目的のなさ」、「枠」、「共通の話題」にすること、「見えないボール」を介した応答など、協力者の体験の質感である。本発表における対話を通して、未だアイデア段階にあるこれらの考察の精緻化、さらなる発展を試みたい。

P19B-23 発達障害の診断を受けることの意味に関する当事者研究

塚本薫平（大阪大学大学院人間科学研究科）

発表者は大学4年生で発達障害（神経発達症）に分類されるADHD、ASDの診断を受けた。診断を受けたことで、医療機関での相談や治療、障害者枠での就職の選択肢、合理的配慮の活用など、障害がもたらす障壁の解消に向けた選択の余地が生まれたが、自分自身を「発達障害」という概念の下に規定することによる葛藤も感じるようになった。その葛藤とは障害の有無を他者にどのように表現するかという問題など自分自身のアイデンティティに関わる事柄である。本報告ではそのような葛藤がどのような要因の下で発生しているかについて、個人的な要因と社会的な要因の両面から検討し、発達障害の診断が当事者にとってどのような意味を持つのかについて検討する一助とする。

P19B-24 自閉スペクトラム症幼児の家族相互行為参加の変容過程

高橋ゆう子（大妻女子大学家政学部）

RDI（Relationship Development Intervention）に取り組んでいるある家族の相互行為場面、「簡単なデザートを作る場面」を対象として、会話分析を用いて、4歳の自閉スペクトラム症児（A）がどのように家族相互行為に参加しているのか、対象児Aの相互行為参加の変容に影響する家族、特に親のふるまいについて検討した。その結果、Aが応答していること、それによって、家族の応答が引き出されて相互行為が展開することが明らかになった。RDIでは、非言語的コミュニケーションやペースダウンを両親に勧めたが、それらはAのふるまいの小さな変化への気づきを促し、Aのふるまいを「理にかなった」ものとして受け止めやすくなったことが推測された。そのような両親の受け止めは、両親のガイド、子どもを相互行為に招き入れる調整のあり方を多様にしたことが考えられた。

P19B-25 実践知の言語化によるキャリア支援の探究—航空会社客室乗務員を対象としたアクション・リサーチ—

田村美香（早稲田大学大学院人間科学研究科）

本研究は、航空会社の客室乗務員を対象に、実践知の言語化と共有がキャリア形成に与える影響を探究したものである。コロナ禍による業務変容を背景に、キャリアへの不安や自己理解の曖昧さが顕在化している中、現場では主体的なキャリア構築の方法論が確立されていない。そこで、アクション・リサーチの研究手法を用い、ワークショップを実施し、実践知を言語化して共有する場を創出した。参加者は、キャリア・アンカー診断と対話を通して自己理解を深め、自身の経験に意味づけし、主体的なキャリア選択に向けた気づきを得た。また、研究者自身も参加者と共に省察することで、内省が深化した。ワークショップを通じ、漠然とした不安が具体化され、他者との相互作用による新たな気づきが生まれ、自己肯定感が向上する過程が確認された。これらの知見は、キャリア支援における「場」の意義を示し、今後の実践的支援のあり方に新たな視座を提供するものである。

P19B-26 周産期喪失を経ての次の妊娠・出産をした母親の経験—TEMを用いた分析—

管生聖子（大阪大学大学院人間科学研究科）

目的：周産期に胎児の喪失を経験した親が次子を妊娠し出産する際の葛藤内容やサポートへの示唆を得る。

方法：妊娠中期以降に胎児を亡くし、その次の妊娠・出産をした母親3名の語りについてTEAを用いて分析した。

結果と考察：周産期胎児喪失の次の妊娠や出産には不安や恐怖心、葛藤がある。新たな妊娠・出産へのポジティブな思いと共に、亡き子への想いの表出し難さが見られた。医療従事者も含めた他者との関係の中で傷つきやすさがあり、妊娠・出産という重複する状況や対人関係において、無事に次子を出産すれば葛藤が終わるのではなく養育時にも続いてゆくことが明らかとなった。周囲に話すこと、あるいは理解・共感を得ることが難しく、孤立や葛藤を深める場合がある中で、親がそれらを抱えてゆくプロセスを描写した。

本研究は所属先の倫理審査委員会の承認を受け実施した（承認番号17223-5）。利益相反はない。

P19B-27 異なる意見の統合にビジュアルが与える影響—グラフィックファシリテーション実践を対象とした相互作用分析—

仲沢実桜（東京大学大学院教育学研究科）

個人間における意見などの対立（conflict）の解決を探究する先行研究では、対立相手の意見と直面して相容れない視点を統合する論争の方法が提唱されている。本研究ではそのような異なる意見が統合する際にビジュアルが及ぼす影響を明らかにすることを目指す。データ取得のため、参加者を公募してグラフィックファシリテーション実践を実施した。その際に参加者から研究協力に伴う説明のもと許諾を得た。映像データをもとに相互作用を分析した結果、異なる意見が1つのビジュアルに混淆したものとして具象化し、参加者は意見が異なることを認識しないままそのビジュアルに共同創作感を抱くという新たな意見統合のプロセスが明らかになった。これはビジュアル・ナラティブ研究で示されてきたビジュアルによって新たな見方が生じるという影響と関連すると考えられる。

P19B-28 触覚と詩的言語の往復—ニットジャーナルを用いたオートエスノグラフィ—

荒木奈美（札幌大学地域共創学群）

本研究は、ニットジャーナルに詩を添える創作実践を通して、感情表現の多層性と自己探究のプロセスを質的に分析したものである。

ニット制作は触覚・温度・反復動作を伴い、身体感覚を媒介として、創り手自身の感情や記憶を編み込む。一方、詩作は比喩やリズムなどのレトリックを媒介に、経験を別のかたちへと編み直し、象徴的な物語として再構成する。

本発表では、①制作過程での感情変化、②ニットと詩の相互作用がもたらす新たな意味づけ、③鑑賞者との非説明型共感、の3点を報告する。質的心理学においては、身体感覚と象徴言語を統合した方法論の提案として位置づけ、臨床・教育・アート実践への応用可能性を展望する。

P19B-29 脳腫瘍患者の語る病いの体験—「わからなさ」に着目して—

梁 瀛迪（東京大学大学院教育学研究科）

本研究の目的は、脳腫瘍患者が語る病いの体験の特徴を明らかにすることである。治療中または経過観察中の18歳以上の脳腫瘍患者15名に対し80～240分のライフストーリー・インタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、解釈学的現象学的分析を用いた多角的な分析を行った。結果として明らかになったのは、①脳腫瘍患者は、脳という自己の中樞が傷害されるがゆえの病いと自己の対象化困難、自己の曖昧な変化や喪失への不安、希少・多彩・複雑な病態による情報不足と不確実性の高さ、自覚しにくい・見えにくい・伝えにくい症状の多さといった特異性をもつこと、②それと関係して《脳腫瘍という病気》、《脳腫瘍を患った自分》、《他者との関わり》、《今後の生活と人生》について多層的な「わからなさ」を経験していることである。本研究は東京大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（審査番号：24-418）。

P19B-30 翻訳者による翻訳実務と生成AIについての認識の変容

単 凱（東京科学大学環境・社会理工学院）

近年、生成AIの翻訳実務への導入が急速に進んでいる。本研究は、こうした導入過程において、翻訳者と生成AIとの関係性に対する認識がいかに変容してきたかを明らかにするため、中日産業翻訳に従事する中国語を母語とする翻訳者7名に対し、平均140分の半構造化インタビューを実施し、その中の翻訳者のスキルアップ、役割認識、生成AIに対する認識変化に注目した。GTA及びTEMによる分析の結果、翻訳者の認識変容は、①生成AIに対する不信感や脅威意識を抱く「懐疑期」、②生成AIを道具として試行的に活用し、翻訳スキルの再構成を模索する「模索期」、③生成AIを戦略的に使いこなし、翻訳者のアイデンティティ変容へ至る「融合期」という三段階のプロセスが確認された。また、若手翻訳者が生成AIを積極的に活用しスキルを向上させる一方、ベテラン翻訳者は自らの経験知と生成AIとの間に葛藤を抱えつつも、人間ならではの価値とやり甲斐を再認識する傾向が見られた。

P19B-31 訪問看護という営みを生きる看護師のライフストーリー研究—心的構えの変容に着目して—

渡邊優那（広島大学大学院人間社会科学研究科）

訪問看護は、地域で暮らす乳幼児から高齢者までのあらゆる世代の利用者を対象とし、利用者の病状に応じた支援を提供する。患者を「迎える」入院・外来医療での看護とは異なり、看護師自らが利用者・利用者家族の生活空間に「向かう」訪問看護では、利用者の日常的な姿や、利用者・利用者家族が長年築いてきた家族関係や価値観に深く触れることになる。このような状況の中で、訪問看護師は在宅訪問を重ねながら、専門職として、そして一個人として揺れ動く経験を通して、自らの専門職としての在り方を模索していくと考えられる。そこで、本研究では、訪問看護師の職歴を有する研究協力者にライフストーリー・インタビューを行い、訪問看護を行う中での内的体験やその意味づけを明らかにしていく。さらに、主観的な体験の仕方を示す「心的構え」の概念を用いて、専門職であると同時に一個人としての自己が形成されていく過程を探索していくことを目指す。

P19B-32 中小企業オーナー経営者の認知の変容と組織への影響—経営者の自己受容とナラティブアプローチによる組織分析—

鎌苅慧哉（株式会社suiten）

本研究の目的は、中小企業のオーナー経営者が自己をどのように認知・受容していくかという内面的な変容が、組織全体の在り方や文化、メンバーの関与にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。特に、経営者の自己受容のプロセスに焦点を当て、ナラティブアプローチを用いて経営者自身と従業員の語りを通じて組織との相互作用を分析する。

本研究の目標は、経営者の認知の変容が組織の対人関係、意思決定、学習風土、関係性に与える影響を整理し、中小企業における人的資源や組織開発の実践的な知見を提示することである。

P19B-33 地方自治体の虐待担当として働く行政一般職の心的負担についての検討
—保健師職に焦点を当てて—

金 葵（川村学園女子大学大学院人文科学研究科心理学専攻）

2023年に「子ども家庭庁」が発足したことからも、現在子どもに関する政策は国の重要課題であると言える。しかし、地方自治体の虐待対応には未だ課題が多い。特に子ども虐待に対応できる専門的な知識を有した人材は不足しており、どの自治体も対応に苦慮している。このような問題に対し、本研究では主に虐待に関わる現場で勤務する地方自治体の行政一般職を対象に、どのような心的負担があるかについてインタビュー調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。今回の発表では研究全体の研究協力者である行政一般職12名のうち、保健師として働いていた3名の結果を取り上げ、報告する。

保健師が虐待に関わる現場での仕事において感じている難しさや検討課題として、市町村職員と児童相談所職員間の連携が挙げられた。

なお、本研究の実施にあたっては、所属機関の倫理審査を受け承諾を得た。

P19B-34 「推し」から離れるとき、離れのあと—青年期女性の応援プロセスと意味づけに着目して—

河原聡希（大阪大学人間科学部人間科学研究科）

本研究は、「推し」を人に薦めたいほど気に入っている人やものと定義し、「推し」の応援の一連のプロセスと、人生におけるその経験の意味づけを明らかにすることを目的とした。協力の得られた大学生女子9名を対象とし、半構造化インタビューを行い、ライフラインチャートを援用し、M-GTAで分析した。その結果、「推し」の応援プロセスは「推しとの出会い」、「推し活」、「推し離れ」という段階で進行すること、その後、「応援の再燃」、「応援の振動」、「空虚」、「新たな推しとの出会い」と4つのパターンに分岐された。また、「現在の自己からかつての自己へ」、「現在の自己からかつての推しへ」、「かつての自己からかつての推しへ」と三方向の意味づけが確認された。これらの結果から、本研究は思春期・青年期臨床で現れる「推し」「推し活」に関する語りへの洞察とクライアント理解を深めるうえで、一つの地図になると考えられる。

P19B-35 成人期・中年期のADHD者における自己や環境の個別最適化プロセス

芝崎文子（筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局）

本研究では、ADHD当事者のライフストーリーについて半構造化面接を行い、成人期から中年期にかけての出来事に着目して、自己や環境の個別最適化の観点から分析を行った。対象は20代後半から60歳前後までの21名であり、成人期前期から中年期を含む幅広い年齢層を網羅している。分析の結果、「労働の最適化」「生活の最適化」「人間関係の最適化」「心理的最適化」「ADHDの開示」「ADHDと自己の位置づけ」の6つのカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーは、ADHD者が生活や環境を選択・調整し、自分に適した状況を作り上げる多様なプロセスを示している。またカテゴリー同士は単独で機能するだけでなく、相互に影響し合いながら動的に変化するものであった。本研究は、ADHD者の適応を理解するうえで、環境選択と調整を含む長期的な個別最適化プロセスの把握が重要であることを示唆する。

P19B-36 ポピュラー音楽の創作現場におけるミュージシャンの音楽的知識の活用—TEAアプローチによる分析を通して—

木下和彦（宮城教育大学教職大学院）・中村昭彦（国土舘大学文学部）

ポピュラー音楽の創作現場では、ミュージシャンやプロデューサー、A&Rなどの専門家チームによって楽曲が創作される。その中でミュージシャンは、人生経験を通して得た音楽的知識をいかに活用し創作現場に参加しているのか。具体的に言えば、ミュージシャンがなぜそのメロディーやコード進行を採用したのかに着目することは、ポピュラー音楽創作に関する理論研究や音楽科教育の教材開発研究に資する知見を新たに創出する可能性がある。そこで本研究では、ポピュラー音楽の創作現場におけるミュージシャンの創造的側面と商業的側面との相互作用に着目し、ミュージシャンが人生経験を通して得た音楽的知識が実践で活用される過程を明らかにする。研究方法として複線径路等至性アプローチ（TEA）を用い、楽曲制作に携わるミュージシャン3名を対象に半構造化インタビューを複数回実施し、複線径路等至性モデリング（TEM）を用いて分析する。

P19B-37

(発表取り下げ)

P19B-38 あるホスピス住宅におけるスタッフの看取り観—パーソナル・コンストラクト理論を用いた質的研究試論—

火ノ口史野（九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻）

近年、独居や経済的貧困によって看取り先が見つからない「看取り難民」が増加し、その対応としてホスピス住宅という新たな高齢者福祉施設が広がりつつある。本研究では、先行研究が限定されているこの新興施設で働くスタッフの看取り「観」を、Kelly (1955) のパーソナル・コンストラクト理論の現象学的側面を強調する新たな方法論を用いて探究した。観とは、個人が世界の解釈を繰り返しながら形成される動的な世界の認識とその方法であり、コンストラクトの概念と理論的に互換性があるため、方法論の構築と実践を試みた。筆者は現場に参加を行いながら、スタッフらが思うホスピス住宅と対照・類似する場を尋ね、語りを分析した。結果・考察として、利用者の疾患、専門職ごとの専門性、理想と現実などの対極の中で、看取り観が構築されていた。個人内の看取り観の揺れとスタッフ間の差異の分析から、多職種連携のケアの場における「言葉遣い」について考察した。

P19B-39 ADHD特性における質的差異

河原希美（京都大学人間・環境学研究科）

ADHDは「不注意」「多動」「衝動性」を特徴とする発達障害であり、その特性は定型発達と連続的だと言われる。しかし、これらの言葉の裏には実は、当事者間の質的差異が覆い隠されているのではないだろうか。ADHDはその歴史上、初めから脳の問題と考えられ、さらに投薬効果が注目されたことからチェックリストによる量的研究が中心となってきた。このような歴史から結果的に、「不注意」等の言葉には多様な質的差異が含まれ、さらに「不注意」と「多動」の関係の仕方といった特性の構造も人によって様々であると予想される。以上から、ADHDにおいて必要なのはむしろ次のような研究だと考える。すなわち、一人一人の当事者の主観的体験に焦点を当て、その特異性に着目する研究、さらにそれらを比較して、質的差異を検討するような研究である。そこで本研究では、ADHD当事者を対象に語り合い法によるインタビュー調査を実施し、精神病理学の方法も取り入れた分析を行った。

P19B-40 コロナ特例貸付アンケート調査の自由記述から見る借受人の感情の様相—年代別の比較

村山 陽（東京都健康長寿医療センター研究所社会参加とヘルシーエイジング研究チーム）

社会福祉協議会(以下,社協)では,コロナ禍に収入が減少し生活に困っている人への生活資金特例貸付を行った.貸付金の返済が始まったが償還率は4割弱に止まっている(2024年5月時点).本研究では,アンケート調査の自由記述データから借受人の感情とそれに係る問題との関連を検証する.新宿区社協が2023年と2024年に借受人に行った調査の自由記述(教示:相談したい事・サポートして欲しい事を書いて下さい)データ(n=2323)の二次解析を行った.テキストマイニング手法により年代(若年層20-39歳,中年層40-64歳,高年層65歳以上)別に感情を表す単語(感情語)を抽出し,対応分析により周辺に布置される言葉との関連を確認した.さらに,その関連の意味を解釈するためSCAT分析を行った.高年層では住宅確保や健康問題を「心配」しながら「頑張って生きる」,中年層では失業や業績悪化への「不安」や物価高に「苦しい」現状への「疲労」,若年層では出産や育児による出費や借金返済による「大変さ」から生活の「困難さ」,が示された.

P19B-41 まちづくりの主体形成のための空間の意味付けに関する研究

内山志保（大阪大学人間科学研究科）

本研究は、人々がある空間に意味を付与する過程を分析することで、まちづくりの主体形成のために必要な視座を得ることを目的とした。研究対象は再開発計画がすすむ名古屋市の中川運河である。研究1では運河と関わりの深い人を対象にインタビューを実施した。研究2では運河の景観評価のために実施した実験結果を、運河と関わりの浅い人による運河への意味付けプロセスとして再解釈した。研究1では、運河と自己アイデンティティが切り離せないものとして語られた。研究2では具体的に切り取られたシーンが、空間体験の共有感を補完し、対話的な空間への意味付けを促進していた。また、意味付けのあいまいさや、事前知識の影響も確認された。研究1と2の結果から、まちづくりの主体形成につながる空間への意味付けは、他者との共有の容易さと困難さの両面を重視する必要があると結論づけた。

P19B-42 大学進学時のより良い学部選択につながる自発的学習を引き起こす契機となる経験の分析—大学院進学時に学部時から専攻を変えて進学した人の語りをもとに—

近藤百玲（青山学院大学大学院教育人間科学研究科）・益川弘如（青山学院大学教育学部）

大学進学は卒業後の職業を想定して専攻を決定する、人生における重要な選択機会であるが、学部選択過程に関しては女性のキャリア選択や教育困難校の生徒、医師・薬剤師・教師などの専門職に関連する学部など特定の層を対象とした研究はあるものの、進学校や中堅校から志望校に合格した特殊性の低い・一般的な生徒に関する研究には蓄積がない。本研究では進学校に通い、明確な意思を持たずに大学進学をした後多様な経験を経て、学部とは異なる専攻の大学院進学に至った研究参加者に進路選択過程に関するインタビューを実施し、専攻変更の過程で学習科学研究において知識構築に必要とされる自発的学習を引き起こした契機としていかなる経験があったのかを詳細に分析する。分析結果からキャリア選択の一つとしてより良い学部選択をするために必要な学習機会やそれらを実現する環境の特徴を抽出し、高校教育終了時まで実現すべき学習環境について一考察を述べる。

P19B-43 「夕方時間帯の保育」で感じられる雰囲気とはどのようなものなのか—
THINKING AT THE EDGE (TAE) によって見出されたフェルトセンスを手掛かりに—

石川 徹（広島大学大学院人間社会科学研究科／高崎健康福祉大学人間発達学部）

保育の場には様々な雰囲気が存在している。例えば、佐藤（2011）の子どもと大人の間に通い合う情感の気づきによって生まれる保育的雰囲気や、差波（2018）の保育者と子どもが織りなすユーモアによって生まれる雰囲気などが挙げられる。だが、保育の研究において取り上げられる雰囲気は、何かを示す際の代名詞的な使い方をされて論じられることが多く、雰囲気自体にどのような意味があるのかについては丁寧に検討されていない。

本研究では、この雰囲気の意味を探るために、保育施設において標準とされる保育、教育時間を過ぎてから、閉園するまでの時間帯（本研究では「夕方時間帯の保育」と定義付ける）を対象に、観察者のエピソード記述をTHINKING AT THE EDGE (TAE) を用いて分析する。その際に、ステップ1までの分析を行い、見出されたフェルトセンスを手掛かりに、「夕方時間帯の保育」における雰囲気とはどのようなものであるのかについて明らかにしたことを報告する。

P19B-44 ADHD当事者が服薬経験を語る場の創出と語りの検討—オンライン・グループインタビューを用いて—

山口莉絵（山梨大学大学院医工農学総合教育部）・井潟瑞希（SOAS MA Medical Anthropology and Mental Health）

ADHDは服薬に効果があると言われており(e.g. Ishii-Takahashi, A. et al., 2015)、自分らしさを取り戻す手段として位置づけられる(e.g. Singh I., 2013)一方、服薬の「結果」は社会への適応の度合いによって意味づけられている。

本研究は、当事者同士の語り合いが、「結果への意味づけ」自体を変化させる可能性に着目し、ADHD治療薬の服用経験がある人を対象に、合計5回のオンライングループインタビューを行った。各回1つテーマを設けた上で、参加者同士も質問しあいながら聞き取りを行った。

クロスリー(2000)を参考にナラティブ分析を行ったところ、「仮説の生成と検証」というテーマが抽出された。服薬は始めから順調に行われることは非常に少なく、挫折の経験が繰り返されるが、その過程で「自分」「薬」「医者」「社会」など、さまざまな対象に対する仮説の生成と検証が行われていた。

P19B-45 タイ人留学生在小学校で自文化を伝える経験から生じた内的変容の質的分析

磯本崇仁（立教小学校）

本研究は小学校6年生を対象に、タイ人留学生と発表者である私が共同で実施した、タイの文化を伝える特別活動の授業を通して、留学生にどのような内的変容が生じたかを明らかにすることを目的としたものである。授業は2時間構成で、2日間にわたり実施された。授業後、留学生にインタビューを行い、語られた内容をもとに質的データ分析を行った。佐藤郁哉（2008）の枠組みに基づく分析の結果、異文化交流の壁と向き合う経験、自己効力感の高まり、自国文化への自覚、子ども観の変化など、多面的な心理的変容が抽出された。

P19B-46 質的方法の知識の正当化プロセスの顕在化にリフレクティビティを導入する—論理ベイズ主義を踏まえて—

岡田 心（大阪大学大学院生命機能研究科、CiNet）

質的方法の知識の正当化に対する批判的議論（例：King et al. 1994）を受け、混合研究の発展や、質的推論の妥当性を可視化する方法論的応答が展開されてきた。その一つに、仮説と証拠の関係を確率論に基づいて評価し、支持の度合いを数値化することで推論の正当化を明示する論理ベイズ主義がある。この枠組みにより、「どのように、どの程度」知識が支持されるかを透明に示すことができ、量的研究との方法論的対話が可能になるだけでなく、質的方法内でも推論過程の説明責任を高める効果が期待されている。一方で本モデルに対して、様々な批判が主張されている。

本研究はその中でも、先行研究の知見、研究者の属性、調査環境といった文脈的要素が推論に与える影響が十分に考慮されていない点に着目し、従来の論理ベイズモデルにリフレクティビティの視点を統合することで、質的方法における正当化の実践をより多面的に記述可能とするモデルの構築を試みる。

P19B-47 生成AIにおける他者性の技術的条件—オートエスノグラフィによる対話論的考察—

河野未来

近年、生成 AI とのチャットにおける対話的経験が注目されつつある。

そこで本研究では、生成 AI が“他者性に支えられた対話的経験”をユーザーに与える技術的条件を探った。

ChatGPT とのチャットログおよび振り返りを素材とし、オートエスノグラフィに基づくコード化とリフレクティブメモによる分析を行い、バフチンの対話論の視点から解釈を加えた。

その結果、筆者が AI に人格を仮構して対話的経験を得た場面には、

- ①入力为非公開性
- ②文字による即時応答
- ③文脈保持による一貫性
- ④同調しすぎない応答設計

という四条件が関与していた。

とくに④は、ユーザー入力に対して独立した視点から応答を返すもので、バフチンの「ポリフォニー的外在性」が見られた。

本研究は自己事例であり一般化に限界はある。しかし、こうした特性は、AI と人間だけでなく、人間同士の対話にも通底し、他者性とナラティブ生成の構造を考える上で新たな視座を提供する。

大会参加者索引

あ行	
青山征彦	会員企画シンポジウム 12 会員企画シンポジウム 18
朝岡寛史	P18A-17
アサダワタル	質的心理学研究編集委員 会企画シンポジウム
麻野美和	P18A-23
安部主晃	準備・実行委員会企画シン ポジウム
綾城初穂	会員企画シンポジウム 1
新井素子	P18A-25
荒木奈美	P19B-28
有川友子	会員企画シンポジウム 15
有賀 光	P19B-02
安斎聡子	会員企画シンポジウム 5 P19A-02
五百竹亮丞	P19B-03
井潟瑞希	P19B-44
井川純一	P19B-03
生野里花	会員企画シンポジウム 22
石井俊行	P18A-16
石井宏典	会員企画シンポジウム 21
石川 徹	P18B-06 P19B-43
石津 空	P18B-39
石田健太郎	質の心理学フォーラム編 集委員会企画シンポジウ ム
石森恵美	P18B-27
磯本崇仁	P19B-45
市川章子	会員企画シンポジウム 19 P18B-28
伊藤哲司	常任理事会企画国際シン ポジウム 会員企画シンポジウム 5 P19A-02
伊藤仁美	P19A-18

伊藤麻紀	質の心理学フォーラム編 集委員会企画シンポジウ ム
稲田真子	会員企画シンポジウム 3 P19B-39
稲田素子	会員企画シンポジウム 15
稲谷 颯	P18B-39
井庭 崇	会員企画シンポジウム 20 P18B-40
今井多樹子	準備・実行委員会企画シン ポジウム
岩根由佳	会員企画シンポジウム 2
上田敏丈	会員企画シンポジウム 11 準備・実行委員会企画シン ポジウム
上村 晶	P19A-04
内田千春	P18B-07
内山志保	P19B-41
梅村比丘	P18B-24
江連紀子	P18A-23
海老田大五朗	会員企画シンポジウム 9 P18A-04
遠藤友咲	P18B-19
呉 宣児	常任理事会企画国際シン ポジウム
大家慎也	会員企画シンポジウム 6
尾石智美	P19B-15
大内雅登	P18B-44
大谷 尚	招待講演
大野美子	P18B-43
大橋靖史	会員企画シンポジウム 2
大道香織	P18B-06 P19B-12
大本 航	P19B-18
大山星馬	会員企画シンポジウム 16
岡田 心	P19B-46
岡田羽叶	P19B-01
岡部大介	会員企画シンポジウム 9

沖潮満里子	学会賞選考委員会企画シンポジウム P18A-13	上手由香	会員企画シンポジウム 13 準備・実行委員会企画シンポジウム
奥田紗史美	質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム P19A-02 P18B-33	川崎 隆	P18B-03 P18B-04
奥村かえで	P19A-02	川島大輔	P18B-27
奥村哲朗	P18B-33	川野健治	会員企画シンポジウム 2 会員企画シンポジウム 12
小澤伊久美	会員企画シンポジウム 14		P19B-08
小沢一仁	P18A-22	河原聡希	P19B-34
小野明日香	P18B-46	河原智江	研究交流委員会企画シンポジウム
尾見康博	会員企画シンポジウム 3 会員企画シンポジウム 10 会員企画シンポジウム 14	河原希美	P19B-39
か行		河南真衣	P19A-10
樫田美雄	学会賞選考委員会企画シンポジウム 会員企画シンポジウム 3	菅野雅代	P18A-28
勝浦眞仁	学会賞選考委員会企画シンポジウム P18B-14	岸磨貴子	質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム 会員企画シンポジウム 18
勝谷紀子	P18A-23	岸本華穂	P18B-37
加藤 望	会員企画シンポジウム 13 P18B-07	岸本有紀子	P18B-06
加藤美千代	P18B-27	北出慶子	会員企画シンポジウム 13
加藤碧子	P18B-36	北村篤司	P18B-03
加藤夢子	P19A-15	北本遼太	P19B-07
加藤嘉明	P18B-13	木戸彩恵	会員企画シンポジウム 17 P18B-09
加戸友佳子	質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム P19B-14	鬼頭弥生	会員企画シンポジウム 11
金澤 佑	P19B-14	木下和彦	P19B-36
金子智紀	会員企画シンポジウム 20	木下寛子	会員企画シンポジウム 7 会員企画シンポジウム 12 会員企画シンポジウム 21
金田裕子	P19A-19	楠見友輔	P18B-02 P19B-02
カビール ラッセル サーワー	P18B-39	久保田楓	P19A-01
鎌苅慧哉	P19B-32	久保田裕斗	会員企画シンポジウム 9
鎌田安里紗	会員企画シンポジウム 20	久保田真弓	P19A-25
上川多恵子	会員企画シンポジウム 10	栗原慎太郎	P18B-30
		呉 文慧	会員企画シンポジウム 6 会員企画シンポジウム 9

黒瀬武史	研究交流委員会企画シン ポジウム		P19B-01
郡司菜津美	会員企画シンポジウム 18	佐藤 碧	P18B-42
小池星多	P19A-24	佐野智子	P18A-23
香曾我部琢	研究交流委員会企画シン ポジウム	寒川美紀	P18B-28
	会員企画シンポジウム 14	鮫島輝美	質の心理学研究編集委員 会企画シンポジウム
高 智子	P18A-07	猿渡敬志	P18A-10
河野暁子	会員企画シンポジウム 5	澤屋真樹	P18B-25
河野未来	P19A-47	重久理奈	会員企画シンポジウム 16
小竹栞	P19A-20	司城紀代美	P19A-26
後藤真衣	P18B-46	芝崎文子	P19B-35
小林道太郎	会員企画シンポジウム 4	清水憲志	P18B-06
小木 貢	会員企画シンポジウム 5	下川功喜	P18B-13
	P19A-02	下中村武	P18A-21
駒久美子	P18B-38	単 凱	P19B-30
駒崎俊剛	P19A-11	周 偉傑	P18A-06
小森国雄	P19A-26	荘島幸子	会員企画シンポジウム 1
小山多三代	P18B-20		P19A-01
小屋美香	P19B-04	白井利明	準備・実行委員会企画シン ポジウム
金 葵	P19B-33	城石ゆかり	P18B-21
KONG MINGXI	P18B-18	沈 炫普	常任理事会企画国際シン ポジウム
近藤百玲	P19B-42		P19B-26
さ行		管生聖子	会員企画シンポジウム 21
蔡 小瑛	P18B-31	菅野幸恵	P19A-03
斉藤明子	P19A-12	菅森朝子	研究交流委員会企画シン ポジウム
齊藤哲也	P18B-03	杉浦彰子	P19A-02
境愛一郎	P18B-41		会員企画シンポジウム 11
坂井志織	会員企画シンポジウム 4	杉本菜月	P18A-08
境悠太郎	P18A-17	杉山高志	P19B-15
櫻井香乃	P18B-04		P19B-18
笹川真奈	P18B-46		P19B-19
佐々木由佳	P19B-21		研究交流委員会企画シン ポジウム
貞安 薫	P18B-34		会員企画シンポジウム 15
佐藤 星	P19A-16		会員企画シンポジウム 2
佐藤暁子	P18A-29		
サトウタツヤ	会員企画シンポジウム 11	鈴木一代	
	会員企画シンポジウム 20	鈴木聡志	

鈴木ミチル	P19B-19	玉置佑介	質の心理学フォーラム編
角南なおみ	P18A-05		集委員会企画シンポジウム
角 亮典	P19B-11		
瀬古俊一	P18B-46	玉木志穂	P18B-32
薛 海升	会員企画シンポジウム 3	玉城美千子	P18B-06
	会員企画シンポジウム 5	田村美香	P19B-25
曾 玉儒	P19A-27	張 富麟	P18A-11
宗田直子	準備・実行委員会企画シンポジウム	塚本薫平	P19B-23
た行		辻 高明	P19A-21
高井かおり	会員企画シンポジウム 10	土元哲平	会員企画シンポジウム 13
高田由利子	会員企画シンポジウム 22		会員企画シンポジウム 19
高梨克也	会員企画シンポジウム 16	恒松美輪子	P19B-03
高野眞生	P18B-09	露木亜海	P19A-24
	P19A-06	手塚千鶴子	会員企画シンポジウム 15
高橋 彩	会員企画シンポジウム 11	天願順優	P19A-23
高橋ゆう子	P19B-24	徳永聖子	P19A-22
高宮明子	P18A-23	徳光 薫	P18B-31
高森順子	研究交流委員会企画シンポジウム	栩川綾子	会員企画シンポジウム 4
		豊田 隼	会員企画シンポジウム 3
田口友美	会員企画シンポジウム 10		P19B-05
竹内一真	会員企画シンポジウム 17		P19B-17
	P18A-14	鳥本大貴	P18B-01
	学会賞選考委員会企画シンポジウム	な行	
武島千明	P18B-29	中井好男	会員企画シンポジウム 8
竹原奈成	P19B-16		P18A-07
太齋 慧	会員企画シンポジウム 2	仲沢実桜	P19B-27
	P19B-09	永田真子	P18B-26
田島美帆	P18B-06	中田友貴	会員企画シンポジウム 3
	P19B-12		会員企画シンポジウム 14
立川真紀絵	P19A-13	中坪史典	常任理事会企画国際シンポジウム
田中千尋	会員企画シンポジウム 14		P18B-06
田中宏明	P18B-40		P18B-07
田中元基	P19A-22		P19B-12
	学会賞選考委員会企画シンポジウム	中津真美	会員企画シンポジウム 8
棚橋莉沙子	P18A-08	仲嶺 真	P18B-17
			P19B-07
		中村昭彦	P19B-36

中村 平	準備・実行委員会企画シン ポジウム	藤ノ井鴻介	会員企画シンポジウム 4
中本明世	会員企画シンポジウム 13	藤原京佳	P19B-06
仲本美央	P19B-04	藤原朝洋	質の心理学フォーラム編 集委員会企画シンポジウ ム
中山亜紀子	P18A-07		
中山佐代	P19B-08	布施陽太郎	会員企画シンポジウム 6
西井宏之	P18B-11	二川一彦	準備・実行委員会企画シン ポジウム
西垣正展	会員企画シンポジウム 8		
西島功	P18B-35	古屋千紘	P18B-19
西村美佳	P18B-14	ベイツ ソフィア	P18B-39
新田一洋	P18B-10	ポーター倫子	P18B-07
ニフユス美冬	P18B-06		P19A-09
能智正博	常任理事会企画国際シン ポジウム	ポーター リチャード	P19A-09
	会員企画シンポジウム 2	保坂裕子	会員企画シンポジウム 12
	会員企画シンポジウム 8	細野知子	質の心理学フォーラム編 集委員会企画シンポジウ ム
野村栄太	P18B-28		P18A-04
は行		細馬宏通	会員企画シンポジウム 16
ハーベル＝ボーマン リンジー	P18B-06		P18A-04
長谷川絢音	会員企画シンポジウム 11	堀内多恵	P19B-05
濱田 香	P18B-28		P19B-17
浜田寿美男	会員企画シンポジウム 21	ま行	
濱名 潔	P18B-23	前垣義弘	P18A-05
番田清美	会員企画シンポジウム 19	眞崎光司	P19A-14
肥田 武	P18B-07	益川弘如	P19B-42
火ノ口史野	P19B-38	俣賀勇人	会員企画シンポジウム 12
平井爽乃	P19A-24	町田奈緒士	会員企画シンポジウム 11
平井靖史	P19A-07	松尾純子	P18B-08
平賀 慧	会員企画シンポジウム 9	松熊 亮	会員企画シンポジウム 17
平原 藍	P18B-47	松下はるゑ	会員企画シンポジウム 4
廣瀬太介	会員企画シンポジウム 10	松嶋秀明	会員企画シンポジウム 18
	P18B-05	松原正樹	P18B-19
広津侑実子	会員企画シンポジウム 8		P19B-20
	P18A-02	松原未季	P18A-09
吹原 豊	会員企画シンポジウム 15	松元 圭	P18B-12
福山未智	会員企画シンポジウム 11	松本光太郎	学会賞選考委員会企画シ ンポジウム
藤井真樹	P18A-14		
藤田浩之	P19B-07		

丸山 慎	P18B-13		会員企画シンポジウム 7
丸山優樹	P18B-32	矢野亜紀子	会員企画シンポジウム 14
三品拓人	P18B-12	山口恭平	会員企画シンポジウム 14
水上拓哉	会員企画シンポジウム 6	山口紀子	P18A-10
水野唯衣	P19B-22	山口洋典	質の心理学研究編集委員
三井小波	P19A-17		会企画シンポジウム
三枝信吾	P18A-20	山口莉絵	P19B-44
水戸貴久	会員企画シンポジウム 1	山口琉生音	P19A-24
南 摩周	P19B-11	山下 香	会員企画シンポジウム 12
三宅博子	会員企画シンポジウム 22	山下里加	質の心理学研究編集委員
宮下太陽	会員企画シンポジウム 14		会企画シンポジウム
	会員企画シンポジウム 19	山田富秋	学会賞選考委員会企画シンポジウム
	P19A-07		
宮下 怜	P19B-20	やまだようこ	会員企画シンポジウム 1
宮島衣瑛	P18A-06		会員企画シンポジウム 17
宮前良平	準備・実行委員会企画シンポジウム	山中綾華	P18B-46
	P18A-01	山野大星	会員企画シンポジウム 20
	P19B-18	山本登志哉	常任理事会企画国際シンポジウム
迎 拓真	P18A-19	ヤン ダンビ	P19A-09
村上めぐみ	P18B-46	横山草介	会員企画シンポジウム 1
村木志帆	会員企画シンポジウム 5		会員企画シンポジウム 7
村本邦子	準備・実行委員会企画シンポジウム		会員企画シンポジウム 9
	P19B-40	横山 愛	P18A-27
村山 陽	P18B-38	吉川康太	P18B-24
目戸郁衣	質の心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム	吉田弘美	P18A-18
元橋利恵		吉村優一	P18B-44
		依田尚也	P18B-16
			P19B-16
本山方子	会員企画シンポジウム 7	ら行	
や行		李 睿苗	P18B-06
八木真奈美	P19B-06		P19B-12
八木裕子	P18A-03	李 心庭	P18B-09
安田裕子	会員企画シンポジウム 19		P19A-08
	P18B-18	李 勇昕	P18A-06
	P18B-20		P19A-02
	P19A-07		研究交流委員会企画シンポジウム
八ッ塚一郎	会員企画シンポジウム 2		

梁 瀛迪	P19B-29
劉 毓禧	P18B-45

わ行

渡邊真帆	P18B-06
	P18B-15
	P19B-12
渡邊優那	P19B-31
渡邊歆忠	P18A-23

質的データ分析なら

MAXQDA

AI
アシスト
プレミアム
も使える

日本質的心理学会
ご来場者様限定！

無料

特別ライセンス & MAXQDA使い方ガイド (PDF)

ライトストーンブースにて申し込み

大注目のAIアシストプレミアムとは？

文書の要約
(英語→日本語も◎)

コード/サブコード
の提案

AIチャット

などOpenAI社のAIが質的データ分析をサポート。
特別に利用制限なしでお試しいただけます。

技術スタッフによる
相談会開催中！

MAXQDAの妖精
まつきゅすくん



開発元

VERBI | Software – Consult –
Sozialforschung GmbH
VERBI Software, Consult, Sozialforschung GmbH

正規国内代理店

LightStone®
株式会社ライトストーン

創業30年の経験と実績でお客様をサポートします。

Ubiquitous AI
Group Company

〒101-0031
東京都千代田区東神田2-5-12 龍角散ビル7F
TEL 03-3864-5211 E-Mail: sales@lightstone.co.jp
<https://www.lightstone.co.jp/>



テーマ分析

実践ガイド

バージニア・ブラウン、
ビクトリア・クラーク 著
溝呂木佐季 訳
B5 判並製 368 頁・定価 7,040 円
ISBN 978-4-7885-1895-7

引用が 23 万を超えるテーマ分析の論文で広く知られる著者たちによるガイド本。心理学やコミュニケーション学、社会学など幅広い社会科学で活用されるテーマ分析を背景の理論まで踏み込んで理解し、実践できるよう導いてくれる、突出して優れた教科書。



新刊

クラシック・グラウンデッド・セオリー

アクションのための研究方法

志村健一 著
四六判並製 208 頁・定価 2,860 円
ISBN 978-4-7885-1886-5【ワードマップ】

グレーザーが提唱したクラシック・グラウンデッド・セオリーは、データ収集と分析、コーディング、コードを用いた概念化など、質的データを扱う基盤となっている。その歴史、哲学、方法を解説、応用としてのグラウンデッド・アクションについても概説。



新刊

やまだようこ著作集

好評既刊

1巻 ことばの前のことば
A5 判上製 496 頁 定価：5280 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1206-1 2010.12.01

2巻 ことばのはじまり
A5 判上製 356 頁 定価：3960 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1626-7 2019.3.25

3巻 ものがたりの発生
A5 判上製 320 頁 定価：3520 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1627-4 2019.3.25

4巻 質的モデル生成法
A5 判上製 384 頁 定価：4290 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1697-7 2020.12.01

5巻 ナラティヴ研究
A5 判上製 504 頁 定価：5390 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1703-5 2021.01.20

6巻 私をつつむ母なるもの
A5 判上製 608 頁 定価：6380 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1808-7 2023.5.20

7巻 人生心理学
A5 判上製 480 頁 定価：5280 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1737-0 2021.10.25

8巻 喪失の語り
A5 判上製 336 頁 定価：4730 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1044-9 2007.3.25

9巻 ビジュアル・ナラティヴ
A5 判上製 432 頁 定価：6050 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1862-9 2024.10.22

10巻 世代をむすぶ
A5 判上製 344 頁 定価：3520 円 (税込)
ISBN 978-4-7885-1268-9 2012.1.30

シリーズ最終巻 2026 年刊行予定

11巻 詩的心理学

オートエスノグラフィー・マッピング

「私」からはじめる研究手法を知るための地図

土元哲平・桂悠介・サトウタツヤ 編
四六判並製 220 頁・定価 3,080 円
ISBN 978-4-7885-1892-6【ワードマップ】

「私」の経験を主題とした研究手法＝オートエスノグラフィー。芸術／科学を架橋するこの多様なアプローチを、八つに整理して紹介するマッピング（地図）が誕生。初学者へのガイドから、学問と人生にかかわる根本的な論点まで網羅した、待望の入門書。



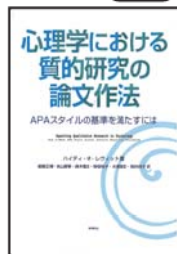
新刊

心理学における質的研究の論文作法

APA スタイルの基準を満たすには

H.M. レヴィット 著 能智正博ほか 訳
B5 判並製 192 頁・定価 3,960 円
ISBN 978-4-7885-1828-5

質的研究論文をどう書くか、評価するかの基準として、アメリカ心理学会で質的研究のための学術論文執筆基準が作られた。しかし基準は簡潔に書かれていて、そのまま論文に適用するのは難しい。基準を具体的な研究に橋渡しするための実践的ガイドブック。



2刷

SAGE 質的研究キットシリーズ 好評既刊

- 1 質的研究のデザイン
U. フリック 著／鈴木聡志 訳 A5 判並製 196 頁・定価 2,310 円
- 2 質的研究のための「インター・ビュー」
S. クヴァール 著／能智正博・徳田治子 訳
A5 判並製 272 頁・定価 2,970 円
- 3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察
M. アングロシーノ 著／柴山真琴 訳
A5 判並製 168 頁・本体 1,980 円
- 4 質的研究のためのフォーカスグループ
R. バーバー 著／大橋靖史ほか 訳 A5 判並製 256 頁・定価 3,190 円
- 5 質的研究におけるビジュアルデータの使用
M. バンクス 著／石黒広昭 監訳 A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円
- 6 質的データの分析
G.R. ギブズ 著／砂上史子・一柳智紀・一柳 梢 訳
A5 判並製 280 頁・本体 3,190 円
- 7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析
T. ラブリー 著／大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 訳
A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円
- 8 質的研究の「質」管理
U. フリック 著／上淵寿 訳 A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円

質的研究をはじめるための30の基礎スキル

おさえておきたい実践の手引き

J. クレスウェル & J.C. バイアス 著 廣瀬真理子 訳
A5 判並製 432 頁・定価 5,060 円
ISBN 978-4-7885-1769-1

質的研究者のように考えることから、研究に際しての感情的側面、リサーチクエストの設定、インタビューやデータ分析のノウハウ、論文を書くプロセスまで、混合研究法の第一人者が実践に役立つ 30 の基礎スキルを豊富な具体例とともに伝授する。



3刷



新曜社

〒101-0051 東京神田神保町 3-9 〈税込〉
TEL 03-3264-4973 / FAX 03-3239-2958

日本質的心理学会 会員限定 15%OFF!

詳細は左記QRコードにて。2025年11月30日まで

関係の世界へ

◎危機に瀕する私たちが生きのびる方法
ケネス・J・ガーゲン 著

東村知子・鮫島輝美・久保田賢一 訳
「一番やさしい社会構成主義入門」 2420円

何のためのテスト？

◎評価で変わる学校と学び
K・ガーゲン＋S・ギル 著
東村知子・鮫島輝美 訳
教育システム変革に向けて。 2750円

最強の社会調査入門

◎これから質的調査をはじめるときのために
前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆 編
「聞いてみる」「やってみる」「行ってみる」
「読んでみる」から始まる極意。 2530円

岡本祐子 著作集①

中年からの アイデンティティ心理学

◎成人期の危機と発達
岡本祐子 著 3960円

岡本祐子 著作集③

成人期の危機の心理臨床

◎アイデンティティ発達危機論と臨床実践
危機があるからこそ、人は成長する。
岡本祐子 著 4950円

動かして学ぶ！はじめての テキストマイニング

◎フリー・ソフトウェアを用いた自由記
述の計量テキスト分析
樋口耕一・中村康則・周景龍 著 2420円

関係からはじまる

◎社会構成主義がひらく人間観
K・ガーゲン 著／東村知子・鮫島輝美 訳
独自の関係論から世界を記述する、対立
を乗り越える未来への招待状！ 5500円

基礎から分かる会話 コミュニケーションの 分析法

理論的かつ体系的な入門書。 2640円
高梨克也 著

フェミニスト現象学

◎経験が響きあう場所へ
稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優 編
当事者の経験を記述・考察するフェミニス
ト現象学の可能性に迫る。 3520円

早わかり混合研究法

クレスウェル 著／抱井尚子 訳
混合研究法を始めようとする読者の入り
口として、重要なポイントがばつと読んでつ
かめる最適な入門書。 2640円

テーマイックテクニクス法

◎インタビューデータ分析のためのコー
ディングの基礎 土屋雅子 著
分析の透明性や厳密性を確保するTAA法
 2420円

社会調査のための 計量テキスト分析

◎内容分析の継承と発展を目指して
【第2版】 樋口耕一 著
KHI Coder の利用方法、事例。 3080円

あなたへの社会構成主義

K・ガーゲン 著／東村知子 訳
「常識」を覆す社会構成主義への格好の入
門書。平易な文章で、ガーゲンとの対話の
世界へ誘うロングセラー。 3850円

チームダイナミックス の行動科学

◎組織の生産性・安全性・創造性を高める
鍵はどこにあるのか
山口裕幸 編著 3630円

医療とケアの現象学

◎当事者の経験に迫る質的研究アプローチ
榎原哲也・西村ユミ 編
医療やケアにかかわるさまざまな当事者
の経験を「現象学」によって描く。 3300円

内容分析の方法

【第2版】 有馬明恵 著
メッセージ内容の客観的・体系的かつ科学
的分析の技術を、コーディングシートとテ
キストマイニングに分けて解説。 1760円

質的研究のための 理論入門

◎ポスト実証主義の諸系譜
プシユカラ・ブラサド 著／箕浦康子 監訳
考え方、基本的概念、研究事例。 4180円

会話データ分析の実際

◎身近な会話を分析してみる
中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 著
会話ビデオ、文字化資料を見ながら会話
データを具体的に分析する。 2750円

社会を説明する「新装版」

◎批判的実在論による社会科学論
B・ダナー・マークほか 著／佐藤春吉 監訳
基礎理論から解説する北欧発のすぐれ
た入門書 待望の復刊！ 3960円

精神障がいのある人を 排除する社会でよいのか

◎国際比較調査からみる人間の価値
樋口麻里 著
共生可能な新しい社会の提言。 6600円

グラウンデッド・セオリー の構築【第2版】

K・シャーマズ 著／岡部大祐 監訳
多くの事例と内容を盛り込み詳説した
増補版。 6050円

フィールドワークの学び方

◎国際学生との協働からオンライン調査まで
村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司 編著
新しい時代の変化に対応したフィールドワ
ークを学ぶための実践的参考書。 2420円

ポストヒューマン時代 のコミュニケーション学

◎モノと主体の関係を問い直すための
視点と事例
石黒武人ほか 編著 2970円

リーダーシップは みんなのもの

◎フェミニズムから考える女性とリーダーシップ
J・E・オーウェン 著／和栗百恵ほか 訳
女性とリーダーシップを問い直す。 3630円

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 <http://www.nakanishiya.co.jp/> 【税込価格】



A5 判
3300 円

TEAと質的探究用語集

サトウタツヤ・安田裕子 監修 中坪史典 他編

時間の経過とともにある人生経路や人間発達の様態性、複雑性を捉える質的探究の方法論である TEA について、その基本概念やそれに関連する多様な理論を体系的に整理して解説する。



A5 判
3630 円

TEAによる 対人援助プロセスと分岐の記述

——保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究

安田裕子・サトウタツヤ 編著 TEMから昇華したTEAによる対人援助に関する実践的研究について、その内容紹介から研究の真舞台までをつまびらかにした書。



A5 判
3740 円

TEMでひろがる社会実装

——ライフの充実を支援する

安田裕子・サトウタツヤ 編著

外国語学習・教育、看護、保健、介護などに焦点をあてた論文に加え、キャリアデザイン、学生相談など実践的応用事例を収録。



A5 判
4290 円

文化心理学への招待

——記号論的アプローチ

ヤーン・ヴァルシナー著 サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽 監訳 「記号」を媒介とした、人間の未来志向のかつ動態的な発達を描くことを目指す「記号論的動態性の文化心理学」について解説。



A5 判
3740 円

TEMでわかる人生の径路

——質的研究の新展開

安田裕子・サトウタツヤ 編著 質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰もが自身の人生の経路をTEMに描くことができ初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。



A5 判
3300 円

TEMではじめる質的研究

——時間とプロセスを扱う研究をめざして

安田裕子・サトウタツヤ 編著 複線経路・等至性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらし。人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。臨床心理学分野でも導入が進む画期的手法。

心理学のための統計学 [全9巻]

荘島宏二郎編集・各巻共著

心理学の分野別に優先度の高い統計手法を取り上げて解説。各巻の各章は、90分の講義で説明できる内容にて構成。心理学を学ぶ人に必須の統計テキストシリーズ。

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| ① 心理学のための統計学入門 (川端一光) | ⑥ パーソナリティ心理学のための統計学 (尾崎幸謙) |
| ② 実験心理学のための統計学 (橋本貴充) | ⑦ 発達心理学のための統計学 (宇佐美 慧) |
| ③ 社会心理学のための統計学 (清水裕士) | ☆シリーズ新刊☆ |
| ④ 教育心理学のための統計学 (熊谷龍一) | ⑧ 消費者心理学のための統計学 (齋藤朗宏) |
| ⑤ 臨床心理学のための統計学 (佐藤寛) | ⑨ 犯罪心理学のための統計学 (松田いづみ) |
- 既刊 ① 2310 円 / ②・③・④・⑤・⑥ 各 2860 円 / ⑦・⑧・⑨ 3080 円



誠信書房
SEISHIN SHOBO

Tel 03-3946-5666 Fax 03-3945-8880
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-20-6 (価格に税込)

<https://www.seishinshobo.co.jp/>

@seishinshobo

日本質的心理学会第 22 回大会準備・実行委員会

委員名簿

準備・実行委員長	中坪 史典 (広島大学)
準備・実行副委員長	上手 由香 (広島大学)
事務局長	本岡美保子 (比治山大学)
委員：五十音順	安部 主晃 (広島大学)
	今井多樹子 (香川大学)
	上山瑠津子 (静岡大学)
	川畑 貴寛 (日本赤十字広島看護大学)
	上岸 光太 (広島大学大学院博士課程後期大学院生)
	宗田 直子 (福山大学)
	田島 美帆 (広島大学大学院博士課程後期大学院生)
	服巻 豊 (広島大学)
	宮前 良平 (福山市立大学)
	門田 清孝 (日本赤十字広島看護大学)
	若松 美沙

【大会デザイン作成・協力】

本岡 景太 (東京藝術大学大学院博士課程後期)

【企業展示・広告】

株式会社ライトストーン
株式会社新曜社
福村出版株式会社
株式会社ナカニシヤ出版
株式会社誠信書房

【広告】

東京図書株式会社